

南あわじ市埋蔵文化財調査年報XIV

2018年度 埋蔵文化財調査

2024年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会

南あわじ市埋蔵文化財調査年報XIV

2018年度 埋蔵文化財調査

2024年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会



入田稲荷前遺跡 4次調査 水路 10 S D 1 遺物出土況 (北西から)



木辺遺跡 21区西半部全景（北東から）



木辺遺跡 21区S K 106 遺物出土状況（北東から）

はじめに

兵庫県の最南端に位置する南あわじ市は、周囲を山・海に囲まれた自然豊かな自治体です。これらの環境は本市の魅力の一つとなっており、南あわじ市を訪れる観光客も増加しています。

この度、平成30年度に行った埋蔵文化財調査の成果を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報XIV』として刊行する運びとなりました。今回の報告は、ここ数年大規模な開発事業が実施・計画中の国衙地区と養宜地区の調査成果が中心となっています。国衙地区では古代の建物群など、養宜地区では弥生時代終末期の土器溜まりなど、いずれも淡路の歴史を考える上で欠かすことができない成果が確認されています。

また令和5年4月には、松帆銅鐸7点が兵庫県指定文化財に指定され、南あわじ市滝川記念美術館玉青館での展示も定着してきており、本市の文化財に対する注目度も一層高くなっているところです。

新型コロナウイルス感染症の収束も見えはじめてきており、時代の転換期をむかえた中で、今後本市といたしましては、文化財の保護・継承や松帆銅鐸を核としたあらたな文化財の魅力の発掘・情報発信に力を注いでまいりたいと考えていますので、より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査ならびに本書を作成するにあたり、ご協力いただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

令和6年3月

南あわじ市教育委員会
教育長 浅井 伸行

例 言

1. 本書は、兵庫県南あわじ市教育委員会が2018（平成30）年度に実施した埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査は、南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫が担当した（所属については当時のものである）。
3. 出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・沖悠矢・清水善美・白川裕二・新崎都・田村信也・富岡美早子・豊田亜希子・榎本早苗・松下矩之・三宅靖子が行った。
4. 本書の編集は、坂口が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、森岡秀人氏にご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。

目 次

巻頭写真図版

はじめに

例言

第1章 埋蔵文化財事業の動向	1
第2章 埋蔵文化財調査の成果	2
第1節 埋蔵文化財調査一覧および調査位置図	2
第2節 主な埋蔵文化財調査の成果	4
1 木辺遺跡（4次調査）	4
2 門の上遺跡（2次調査）・南平遺跡（2次調査）	32
3 入田稲荷前遺跡（3次調査）	35
4 入田稲荷前遺跡（4次調査）	50
5 石ヶ坪遺跡（3次調査）	59

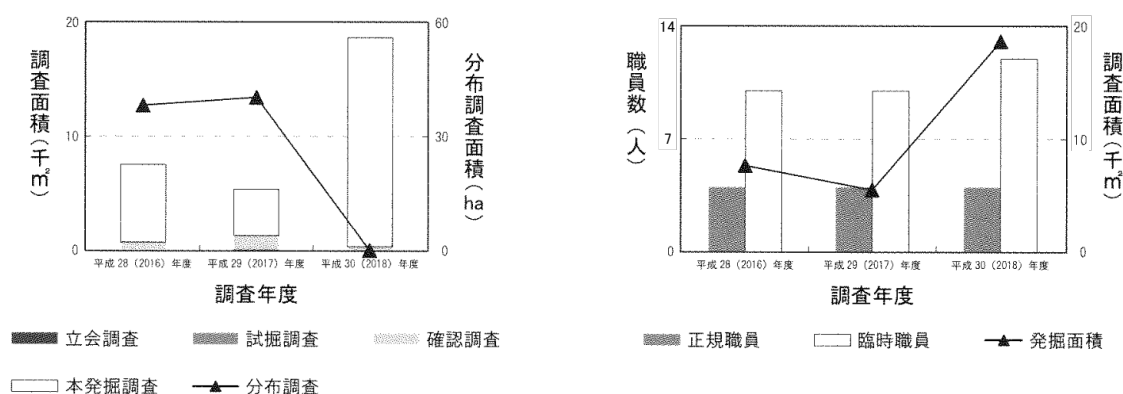
第1章 埋蔵文化財事業の動向

平成30年度は、試掘調査1件、確認調査2件、本発掘調査3件の調査を実施した。各調査の面積の合計は、18,687.5㎡となる。主な発掘調査は神代国衙・賀集立川瀬地区、八木入田地区、志知志知北・志知南地区、賀集八幡北地区での圃場整備事業に伴う発掘調査や民間の開発事業に伴う合計6件の調査を実施した。啓蒙普及活動として、昨年度に引き続き12月に木辺遺跡の現地説明会を実施した。

年度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							正規職員	臨時職員
平成28(2016)年度	38.2	0	0	685.9	6,859.1	7,545.0	4	10
平成29(2017)年度	40.3	15.0	44.0	1,169.0	4,312.6	5,540.6	4	10
平成30(2018)年度	0	0	4.0	296.0	18,387.5	18,687.5	4	12

*単位：分布調査 (ha) 調査面積 (㎡)

調査量と職員数の推移 1



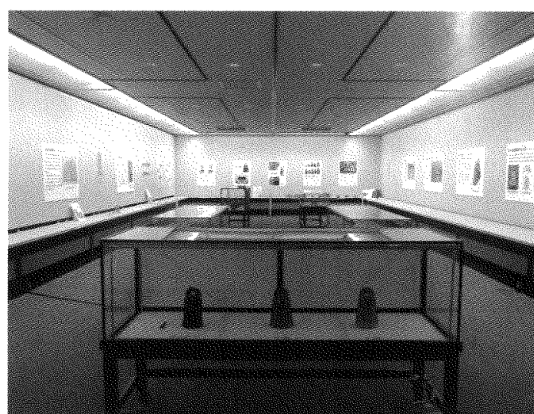
調査量と職員数の推移 2

また松帆銅鐸の関連事業で、松帆銅鐸市民講座「銅鐸が造られた日…」と題する講座、玉青館において平成31年2月2日～4月7日に「造る展」を実施した。さらに3月10日には、淡路ファームパークイングランドの丘で「淡路島古代フェスティバル」を開催した。刊行物としては、『南あわじ市文化財調査年報XI』を発行した。

(坂口)



木辺遺跡現地説明会の様子



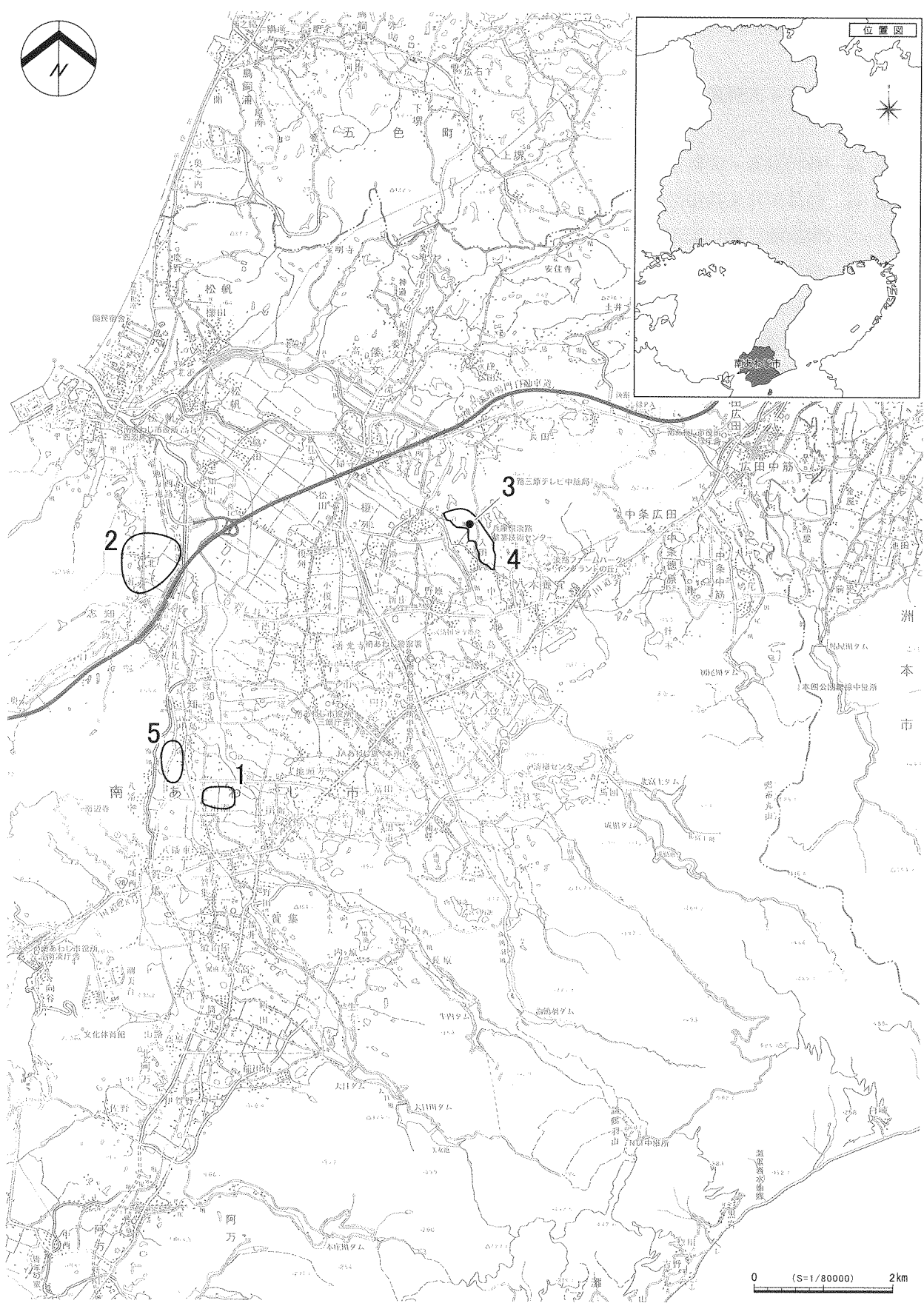
造る展 展示風景

第2章 埋蔵文化財調査の成果

第1節 埋蔵文化財調査一覧および調査位置図

番号	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
1	経営体育成基盤整備事業（国衙地区）	本発掘	6,157.7 m ²	坂口	木辺遺跡（4次）	神代・賀集	国衙・立川瀬	平成30年5月10日～平成31年2月28日	縄文～中世の遺構・遺物確認。
2	経営体育成基盤整備事業（片田地区）	確認	68 m ²	山崎	門の上遺跡（2次） 南平遺跡（2次）	志知	志知北・志知南	平成30年5月22日～6月12日	平安時代末～室町時代の遺構・遺物確認。
3	市道大榎列古長田線新設事業	本発掘	1,761.8 m ²	的崎・山崎	入田稲荷前遺跡（3次）	八木	入田	平成30年6月1日～平成31年2月18日	弥生時代中期～室町時代の遺構・遺物確認。
4	経営体育成基盤整備事業（養宜地区）	本発掘	10,468 m ²	的崎	入田稲荷前遺跡（4次）	八木	入田	平成30年6月5日～平成31年2月18日	縄文時代の落とし穴、弥生時代の竪穴建物、律令期～中世の建物、中世墓等確認。絵画土器、管玉、硯出土。
5	経営体育成基盤整備事業（八幡北地区）	確認	228 m ²	山崎	石ヶ塚遺跡	賀集	八幡北	平成30年10月1日～11月7日	古墳時代後期を中心とする包含層を確認。
	賀集福井開発事業（民間）	試掘	4 m ²	坂口		賀集	福井	平成31年1月28日	遺構・遺物未確認。

調査一覧



調査位置図

第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

1. 木辺遺跡 - 4次調査 -

所在地 神代国衙・賀集立川瀬字木辺外

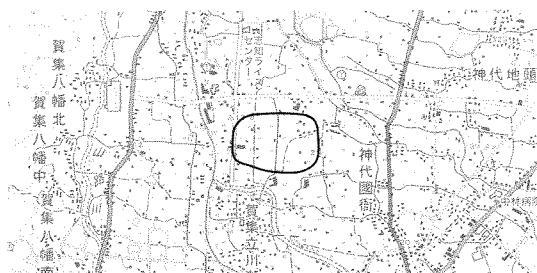
事業名 経営体育成基盤整備事業
(国衙地区第6工区)

担当者 坂口弘貢

種別 本発掘調査

調査期間 平成30年5月10日～平成31年2月28日

調査面積 6,157.7㎡

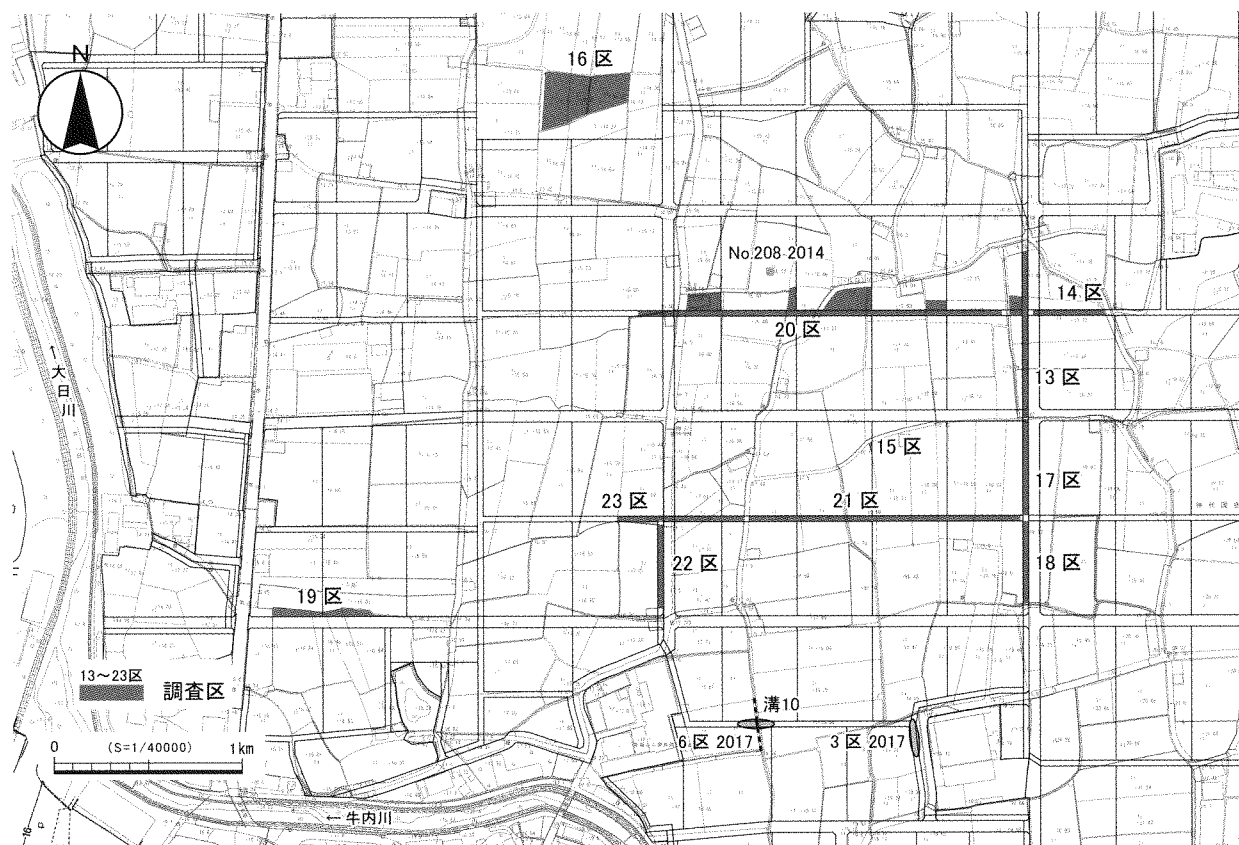


調査の位置

1. 調査内容

本調査は、神代国衙～賀集立川瀬地区で計画されている県営圃場整備事業に伴う調査である。

調査地は、三原平野中央南寄りの南東～北西方向に緩やかに傾斜する水田などからなり、南側を牛内川、西側を大日川が流れる。調査地北西部には嫁ヶ淵遺跡（縄文・弥生・飛鳥・奈良・平安時代、中世）、東部には長手遺跡（弥生時代、中世）、南部には国衙廃寺跡（弥生・奈良・平安時代、中世）などが分布しており、今回の調査範囲には木辺遺跡が遺跡登録されている。



調査区設定図

調査は、平成25・26年度に行った確認調査結果に基づき、地下の文化財に影響が及ぶ排水路と圃場部分等を対象に重機・人力併用で進めていった。なお調査区名は、平成29年度の調査（1～12区）に引き続き13～23区を設定し作業を進めていった。以下主な調査区の概要を記す。

[13区]

調査地北東部に位置する排水路部分と圃場部分の調査区で、標高17.41～18.27mを測る。調査面積786.4㎡。

遺構面を2面確認した。基本的に第1面は中世以降の遺構面で、第2面は弥生時代・古代の遺構面と考えられる。13a区以北は遺構面が1面となり、同一面で遺構を確認した。第1面では掘立柱建物1棟（SB1）、柱列又は柵列状の遺構1列（SA1）、竪穴建物1棟（SH4）、溝（SD1）、小穴、窪み状の遺構などがある。第2面では竪穴建物3棟（SH1～3）、土坑（SK340）、溝、小穴などがある。

第1面

SB1 調査区中央部12a～13y区に位置する総柱の掘立柱建物で、西側にのびる可能性がある。規模は東西2間（5.0m）以上、南北3間（6.7m）で、P109-175を基準にした方位は座標北に対し、N19°Eを示す。南側1間は柱間が1.4mと短いことから廂になる可能性がある。遺物は土師器皿2～4、埴1・6、白磁5などが出土しており、中世初頭と考えられる。

SA1 調査区南部6a～8a区に位置する柱列又は南北方向の柵列状の遺構である。掘立柱建物の可能性がある。規模は南北3または4間（6.2m）程度、P33-28を基準にした方位は座標北に対しN2°Wを示す。遺物は土師器片が出土しており、中世初頭と思われる。

SD1 調査区南端部の1a～2a区に位置する東西方向の溝である。規模は幅4.6m、深さ1.7mを測る。遺物は土師器、須恵器7～9、磁器（白磁）、瓦器などが出土しており、中世と考えられる。

SH4 調査区北部14a～15a区に位置する東側にのびる隅丸方形の竪穴建物である。規模は南北方向の長さが約4.5m、深さ30cmを測り、西側の辺を基準とした方位は座標北に対してN12°Wを示す。ベースが礫層であるため支柱穴が明確でない。中央土坑と思われるSK411は6cmと浅く、遺物は弥生時代終末期の甕17、小型丸底壺18、鉢19、東阿波型土器甕20、甕形製塩土器21・22など完形に復元できる遺物がまとまって出土している。

第2面

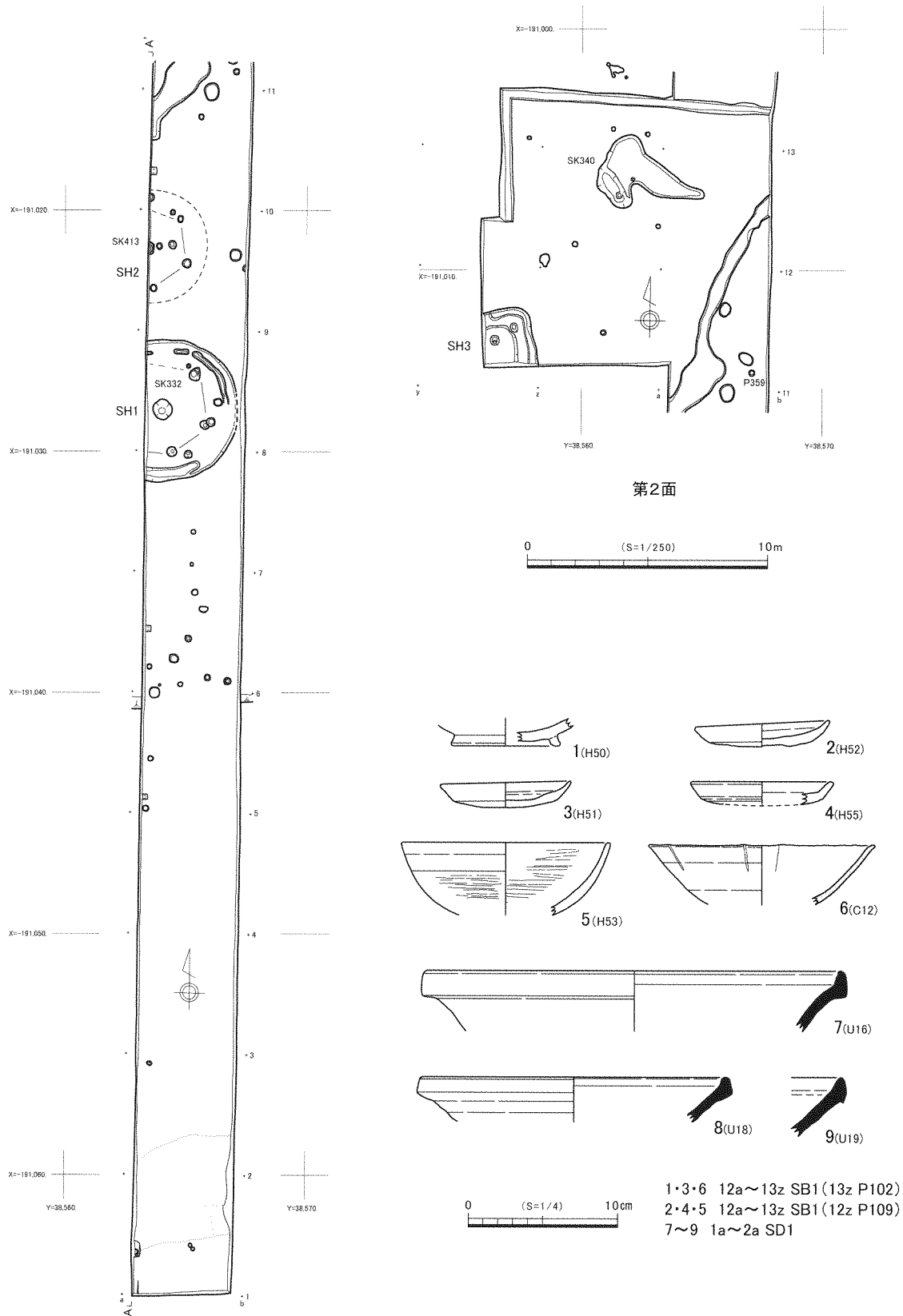
SH1 調査区南部7a～8a区に位置する西側にのびる円形の竪穴建物である。規模は直径5.9m、深さ20cmを測る。支柱穴は6本と思われ、SK332が中央土坑になる。南・北側に周壁溝と思われる溝が部分的に認められる。遺物は弥生時代中期後葉の土器片10・11が出土している。

SH2 調査区南部9a～10a区に位置する西側にのびる円形と思われる竪穴建物である。深さが約10cmと浅いため、平面では検出できず、壁面と中央土坑SK413などからの確認である。規模は直径約4.8mに復元できる。支柱穴は5～6本と思われる。遺物は弥生中期後半と思われる土器小片と石器（石錐）が出土している。先のSH1と同時期と考えられる。

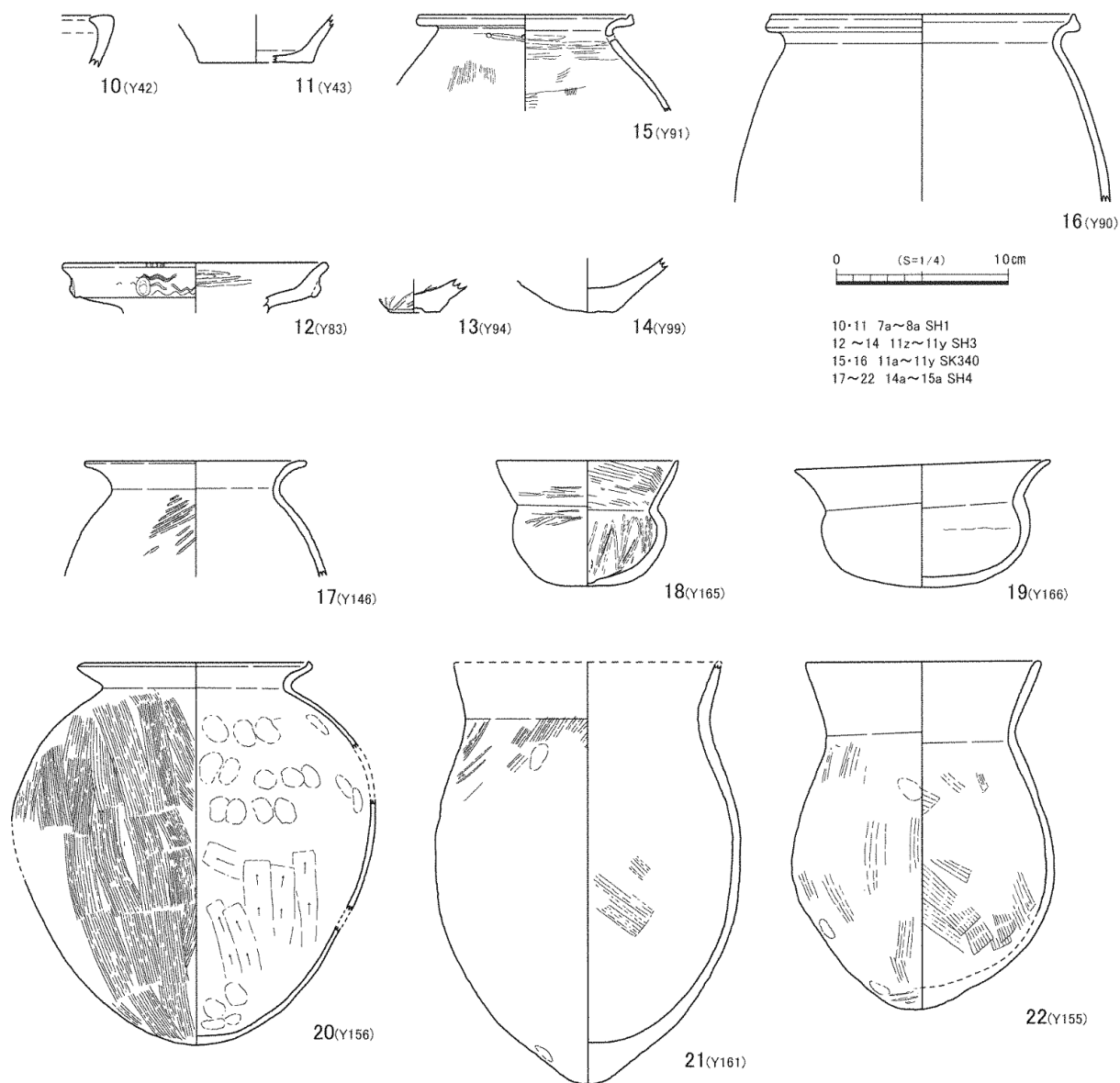
SH3 調査区中央部11y区に位置する角丸方形の竪穴建物で南・西側にのびる。床面の周囲が一段高くベッド状をなす。全体の規模は不明で、深さ27cmを測る。支柱穴と思われる小穴が1基認められる。東側の辺を基準とした方位は座標北に対して、N9.5°W方向を示す。遺物は弥生時代終末期と思



13区平面図1



13区 平面図2・出土遺物1



13区 出土遺物 2

われる土器片 12 ~ 14 が出土している。

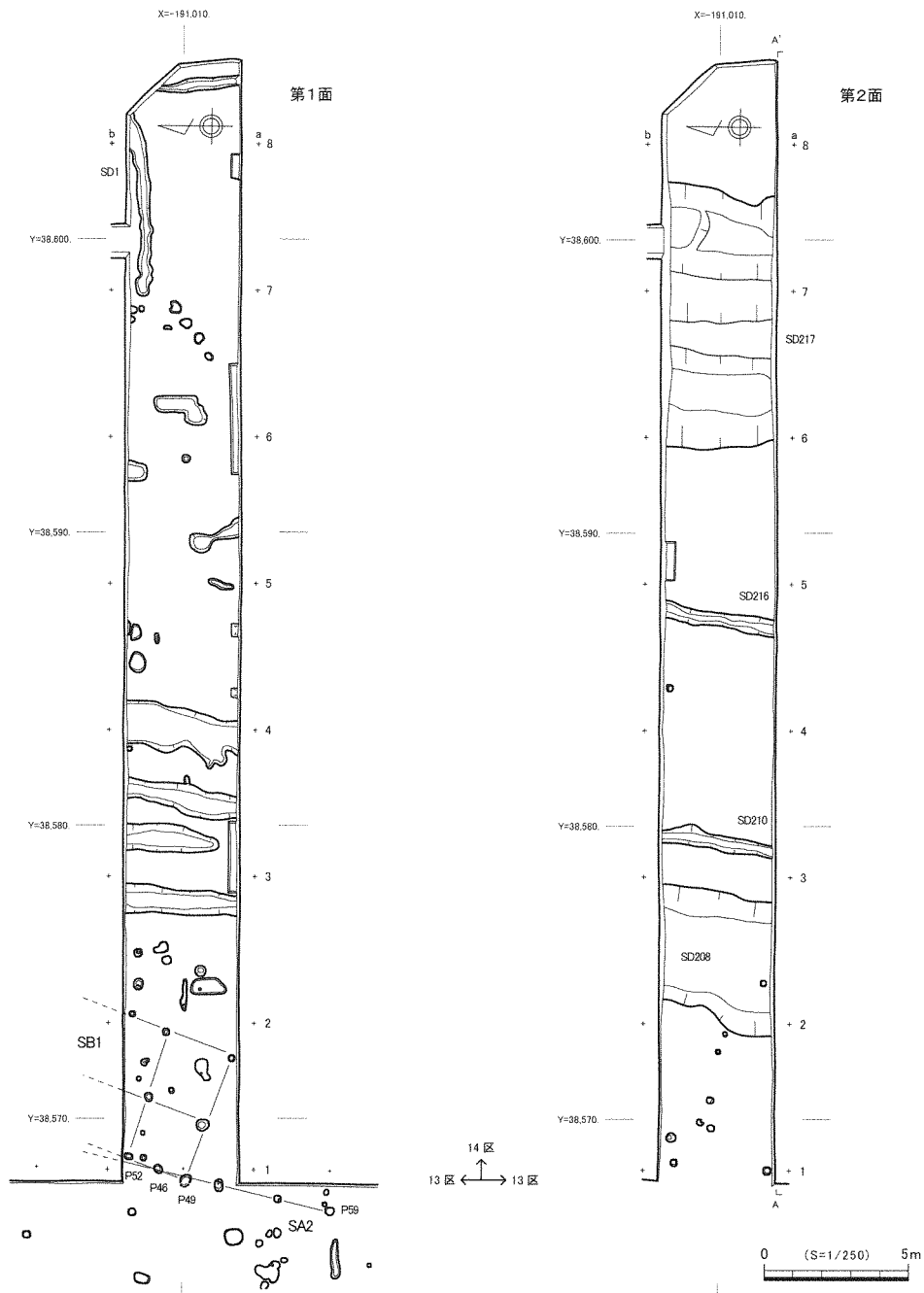
SK 340 調査区中央部 12 a ~ 13 z 区に位置する遺構である。規模は長辺 4.4 m、短辺 2.6 m、深さ約 20 cm の不正形で南西部が一段深くなる。遺物は一段深い部分から弥生時代中期後葉の甕 15・16、高坏などの遺物がややまとまって出土している。

P 359 調査区中央部 11a 区に位置する円形の小穴である。規模は直径 26 cm、深さ 30 cm を測る。遺物は弥生時代中期後葉の高坏などが出土している。

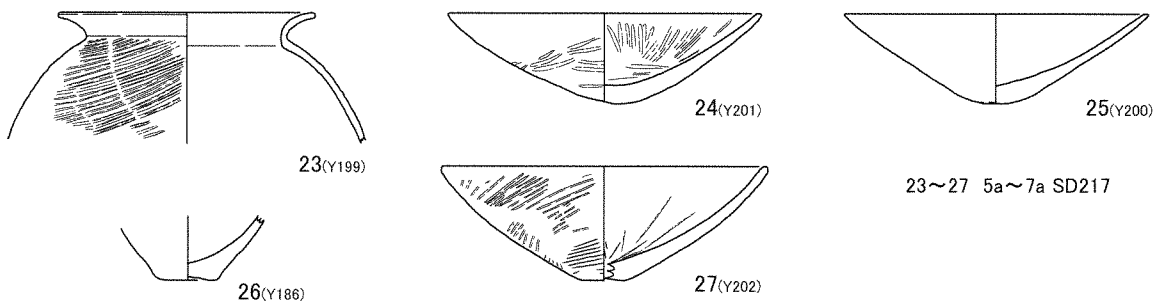
[14区]

調査地中央東寄りに位置する東西方向の排水路部分の調査区で、標高 17.73 m を測る。調査面積 300 m²。

遺構面を 2 面確認した。第 1 面は中世を中心とする遺構面で、掘立柱建物 1 棟 (SB 1)、柵列状の



14区 平面図



14区 出土遺物

遺構1列(SA2)、溝、小穴などがある。柱穴と思われる小穴は西端部の1a~2a区に多く認められる。第2面では溝(SD208・210・216・217)、小穴があり、古代と弥生時代の遺構と思われるが、生活に関連する遺構は少なく、遺物の出土量も少なくなる。

第1面

SB1 調査区西端部1a区に位置する北側にのびる総柱建物と思われる。規模は東西2間(4.4m)、南北1間(2.05~2.4m)以上を測り、P49-52を基準とした方位は座標北に対してN21.5°Eを示す。遺物は土師器片やP49から平瓦が出土しており、時期は中世初頭と思われる。

SA2 調査区西端部1a区~13区10a~11a区に位置する南北方向の柵列状の遺構で、規模は南北3間(5.5m)以上で、P59-46を基準とした方位は座標北に対しN13.5°Eを示す。遺物は土師器皿や瓦器などが出土しており、13世紀頃と思われる。

SD1 調査区東部6a~8a区に位置する東西方向の溝で東側にのびる。規模は幅約50cm、深さ約10cmを測る。遺物は須恵器、土師器片が出土しており、中世初頭と思われる。

第2面

SD208 調査区西部1a~2a区に位置する南北方向の溝である。規模は幅4.6m、深さ42cmを測る。遺物は弥生時代中期と思われる土器片がわずかに出土している。

SD210・216 調査区中央部3a~4a区に位置する溝である。SD210は幅70cm、深さ40cm、SD216は幅60cm、深さ80cmを測る。遺物は共に須恵器、土師器、製塩土器がわずかに出土しており、8世紀後半~9世紀初頭と思われる。

SD217 調査区東部5a~7a区に位置する溝である。幅約9.0m、深さ約1.8mを測り、中央部が約40cm高くなる。上層の暗褐色土から古代の遺物が、下層の黒色粘質シルト層から弥生時代終末期の甕23、鉢24・25・27などが出土している。

[17区]

調査地南東部に位置する排水路部分の調査区である。調査面367.3㎡。

遺構面を3面確認した。第1面では北半部で小穴、落ち込み、浅い窪み状の遺構がある。第2面では南端部を除いて調査区全体にあり、掘立柱建物2棟(SB1・2)、土坑(SK32・81)、溝(SD49)、小穴(P154)などがある。7~8世紀が中心と思われ、一部弥生時代終末期の遺構が認められる。第3面は調査区北端部に溝(SD71・180)がある。

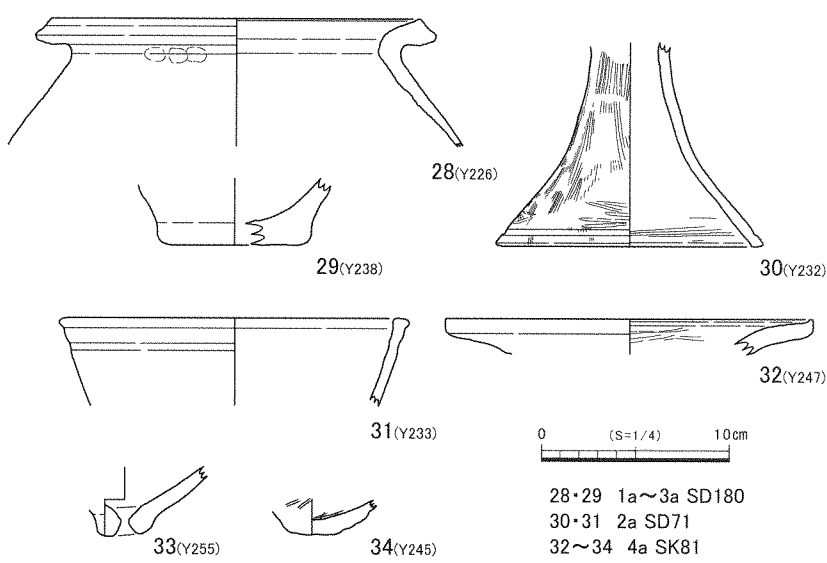
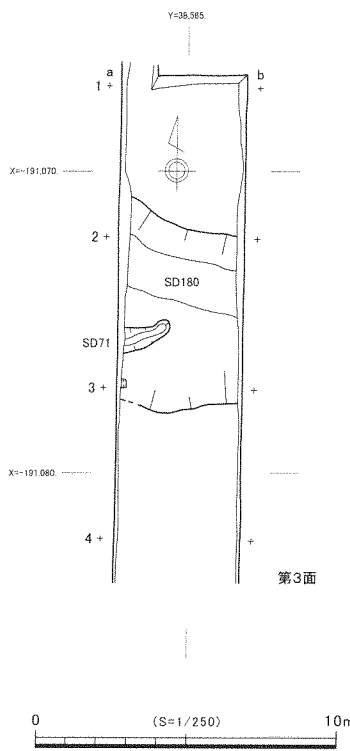
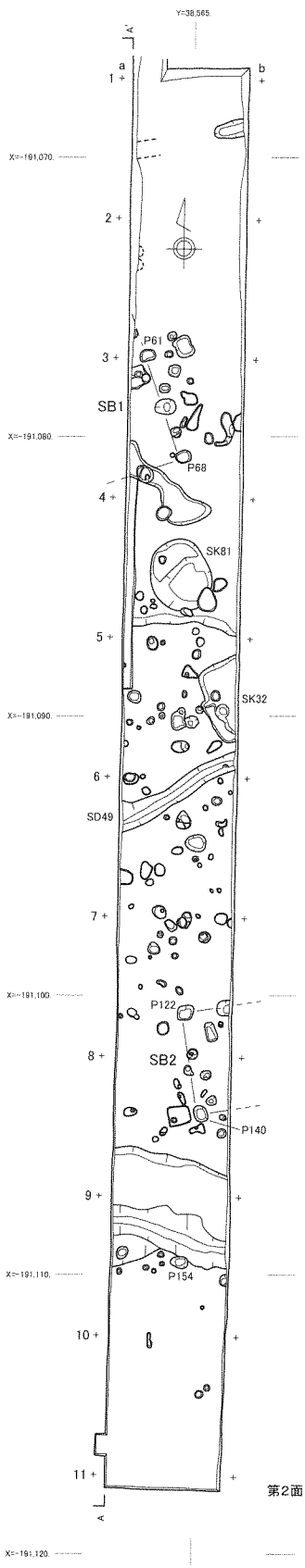
第2面

SB1 調査区北部2a~3a区に位置する掘立柱建物で西・北側にのびると思われる。東西1間(1.6m)以上、南北2間(3.85m)以上を測る。遺物は土師器、須恵器、製塩土器片が出土しており、7世紀後半~8世紀と思われる。

SB2 調査区南部7a~8a区に位置する掘立柱建物で東側にのびると思われる。東西1間以上(1.55m)、南北2間(3.65m)を測る。遺物は土師器、須恵器、製塩土器片が出土しており、8世紀と思われる。

SK32 調査区中央部5a区に位置する方形の土坑で東側にのびる。南北2.3m、深さ10cmを測る。遺物は須恵器、土師器、製塩土器などが出土しており、時期は7世紀前半と思われる。

SK81 調査区中央部4a区に位置する円形の土坑である。南北2.5m、東西2.1m、深さ28cmを測り、遺物は弥生時代終末期の土器32~34が出土している。



17区 平面図・出土遺物

P 154 調査区南部 9 a 区に位置する小穴である。長辺 60 cm、短辺 40 cm、深さ 14 cmを測る。遺物は須恵器高坏が出土しており、7 世紀前半と思われる。

SD 49 調査区中央部 5 a～6 a 区に位置する溝である。幅約 70 cm、深さ 18 cmを測る。遺物は土師器・製塩土器が出土している。製塩土器は丸底Ⅳ式の薄いタイプであることから 8 世紀前半と思われる。

P 154 調査区南部 9 a 区に位置する小穴である。長辺 60 cm、短辺 40 cm、深さ 14 cmを測る。遺物は須恵器高坏が出土しており、7 世紀前半と思われる。

第 3 面

SD 71・180 調査区北端部 1 a～3 a 区に位置する東西方向の溝である。SD 180 は幅約 7.0 m、深さ約 60 cm、SD 71 は幅 70 cm、深さ 22 cmを測る。遺物は両者とも弥生時代中期後葉の土器 28～31 が出土している。

[20 区]

調査地中央部に位置する東西方向の延長 195 mの排水路と圃場部分の調査区である。調査面積 1,238 m²。

遺構面を部分的に 2 面確認した。第 1 面の遺構には掘立柱建物 4 棟 (SB 1～4)、竪穴建物 11 棟 (SH 1～11)、方形周溝墓 2 基 (SZ 1・2)、柱列又は柵列状の遺構 (SA 1・2)、土坑 (SK 43)、溝、小穴などがある。第 2 面は調査区西部 5 a～8 c 区にあり、溝、小穴がある。

第 1 面

SB 1 調査区西部 7 a～8 a 区に位置する側柱建物で南側にのびると思われる。梁行 3 間 (3.8 m)、桁行 2 間以上 (3.8 m) 以上を測る。約 1.0 m東に南北方向の柵列状の遺構 SA 1 がある。南北 3 間 (5.0 m) 以上を測り、両者とも遺物が出土していないが SK 43 と関連すると思われ、弥生時代中期後葉が想定される。

SB 2 調査区中央部 22 a～22 b 区に位置する南北方向の側柱建物である。東・南・北側に柱列状の遺構 SA 2 が巡る。梁行 2 間 (3.5 m)、桁行 2 間 (4.2 m) を測る。

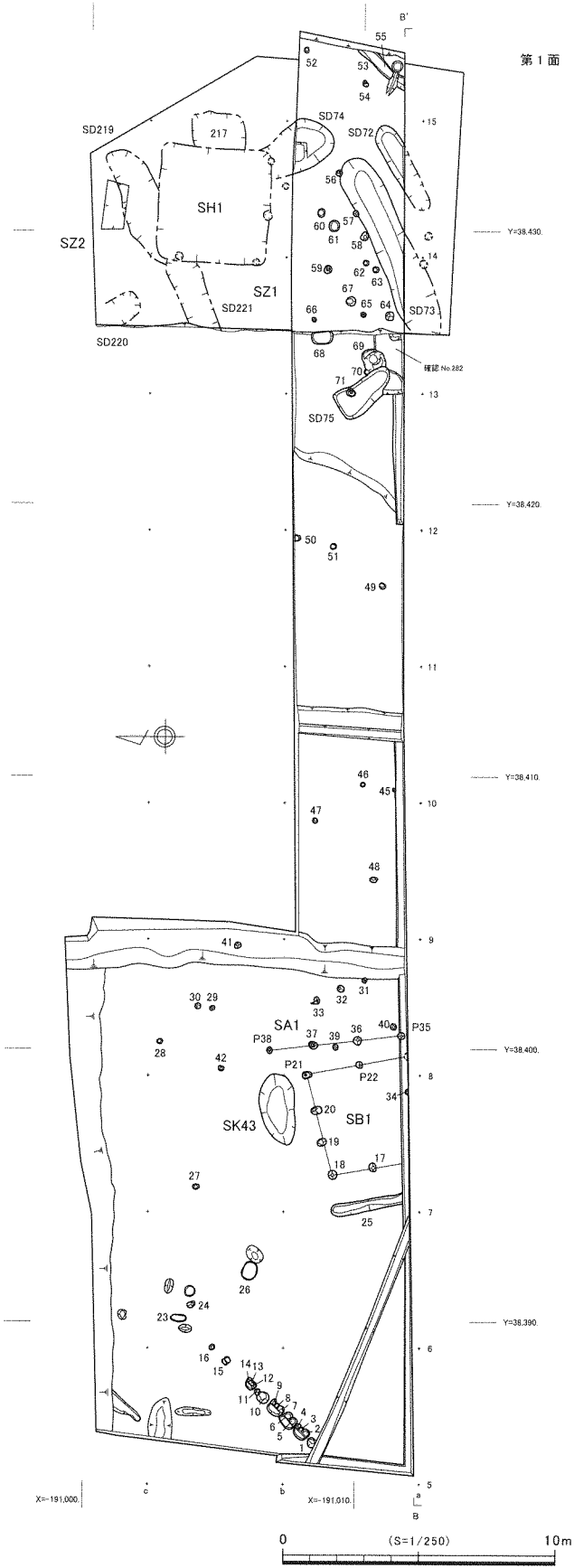
SB 3 調査区東部 26 a～27 a 区に位置する東西方向の掘立柱建物で南方向にのびる可能性がある。南北 1 間 (1.5～1.8 m) 以上、東西 3 間 (6.2 m) を測る。遺物は土師器の小片が出土している。

SB 4 調査区東部 31 b～32 b 区に位置する南西～北東方向の側柱建物である。梁行 1 間 (1.5 m)、桁行 2 間 (2.75～2.9 m) を測り、遺物は土師器の小片が出土している。SB 2～4 については、詳細な年代を決める遺物がないが、中世と思われる。

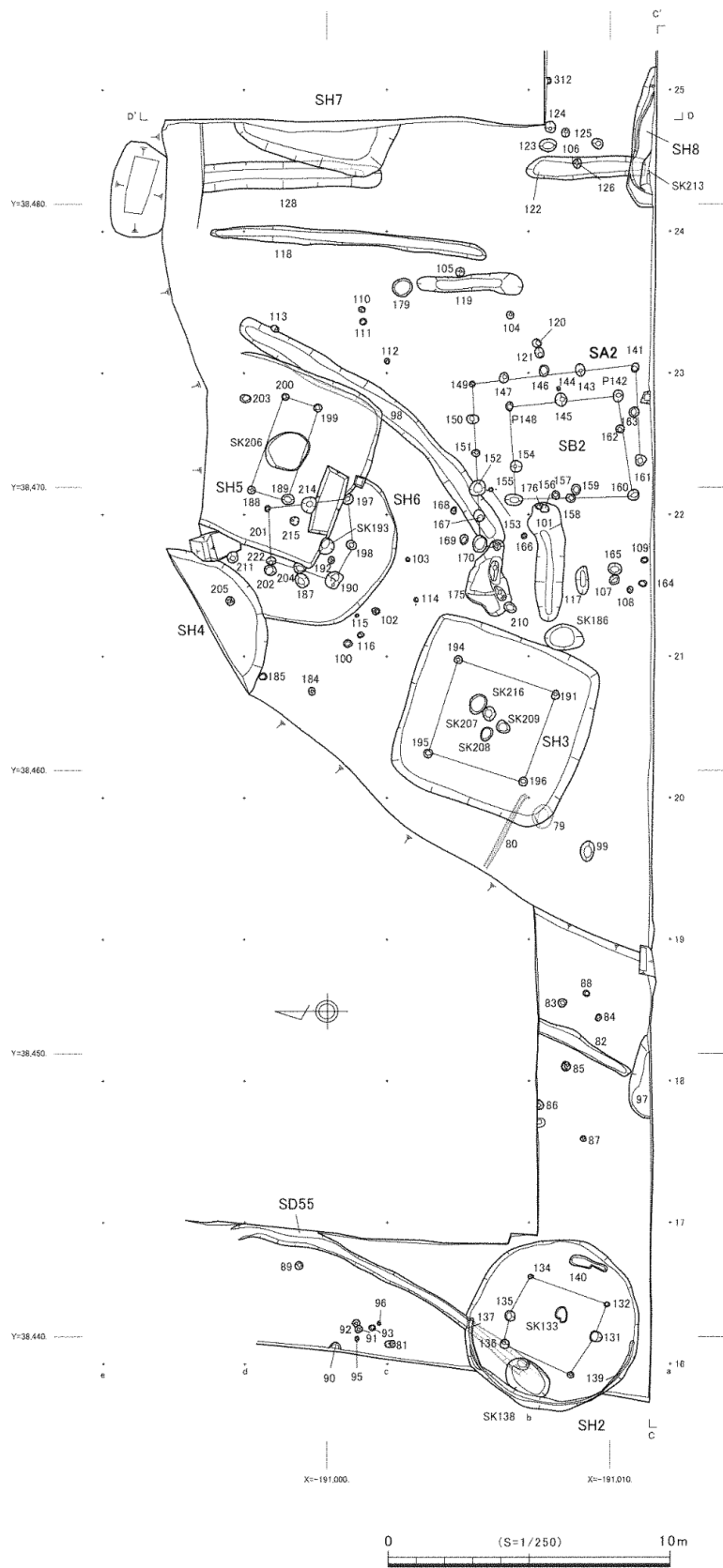
SH 1 調査区西部 13 b～14 b に位置する隅丸方形の竪穴建物である。隣接する方形周溝墓 SZ 1 の溝 SD 74・221 を切る。調査対象外であったが、耕作土直下が遺構面となり、遺構が露出した形となっていたため、平面の検出作業と写真撮影を行った後、設計変更の上盛土保存を行った。規模は東西 4.3 m、南北 4.1 mを測る。西側の辺を基準とした方位は座標北に対して N 3° E を示す。遺物は弥生時代終末期と思われる土器 35・36 が出土している。

SH 2 調査区西部 15 a～16 b 区に位置する円形の竪穴建物である。規模は直径 6.1 m、深さ 25 cm を測り、支柱穴は 6 本と思われる。中央土坑 SK 133 の他に西側に土坑 SK 138、西半部に周壁溝を有する。遺物は弥生時代後期後半～終末期の土器 37・38 が出土している。

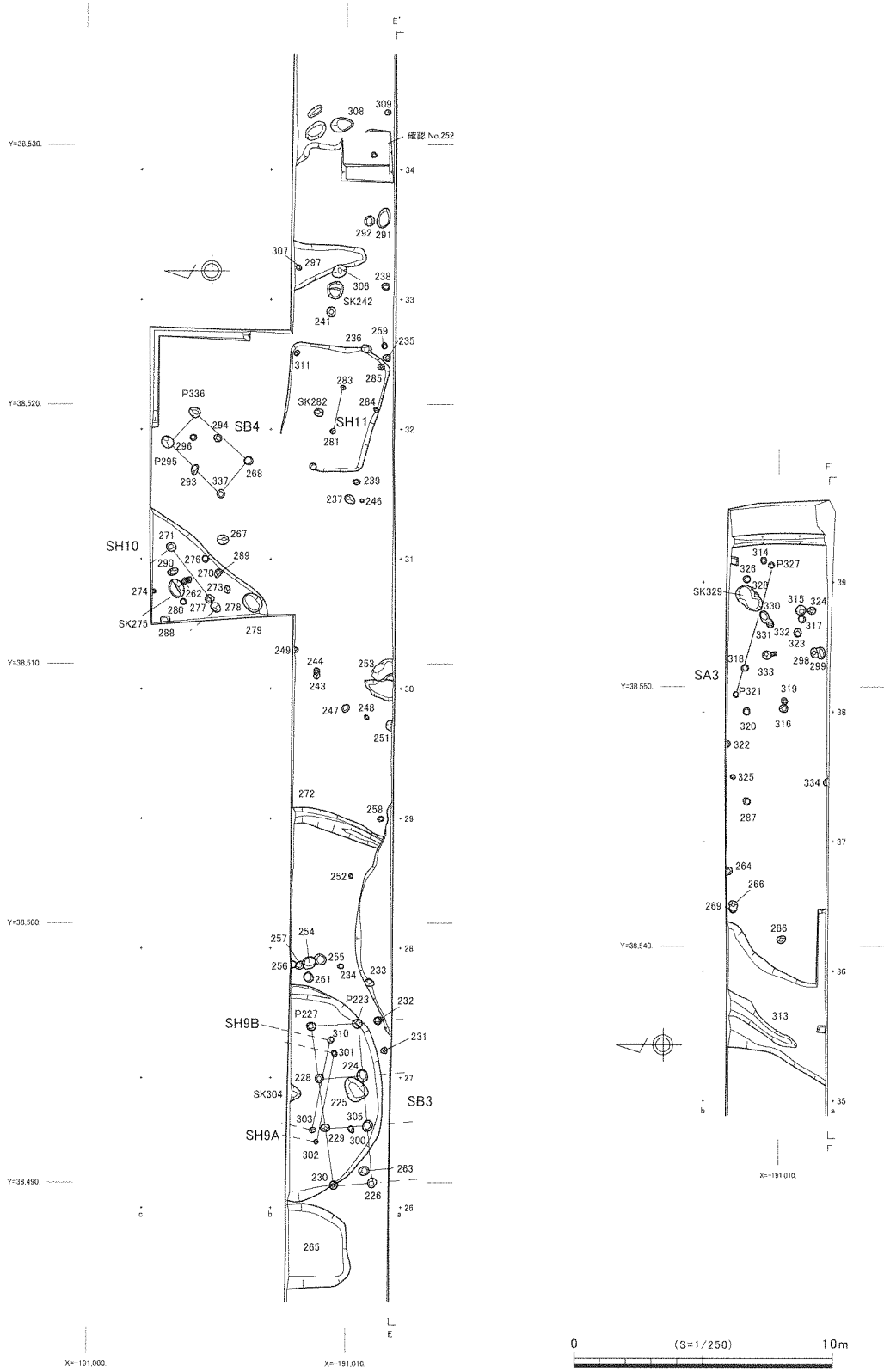
SH 3 調査区中央部 19 a～21 b 区に位置する隅丸方形の竪穴建物である。規模は東西 6.5 m、南北 6.3 m、深さ 23 cmを測る。支柱穴は 4 本で中央土坑と思われる炭化物を含む土坑状の遺構が中央部付



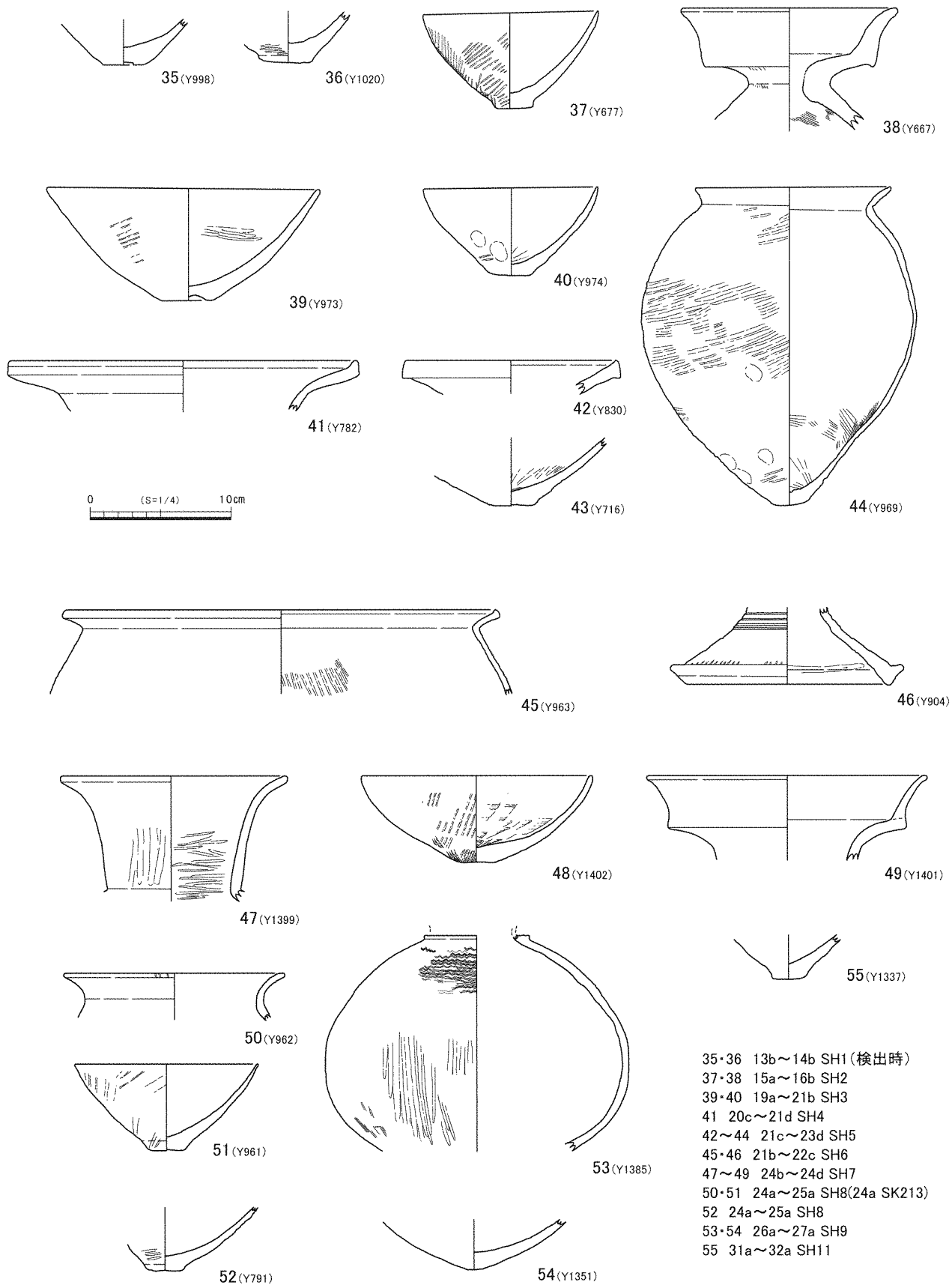
20区 平面图1



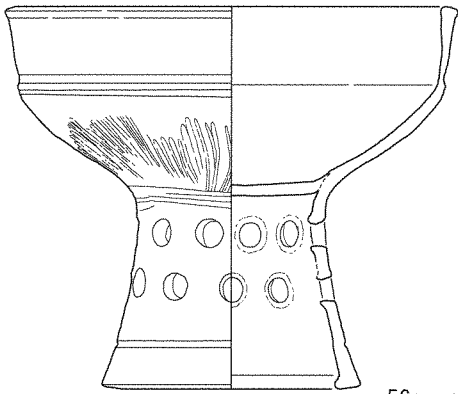
20区 平面図2



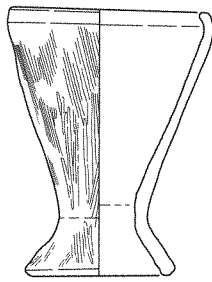
20区 平面図 3



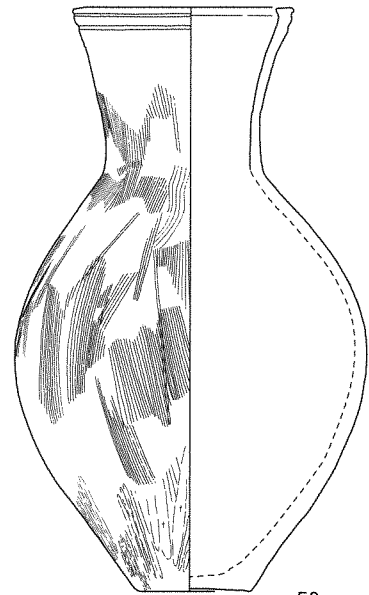
20区 出土遺物 1



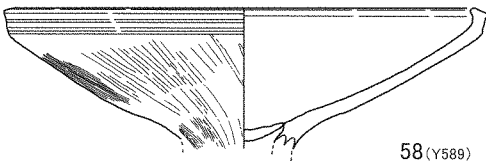
56(Y585)



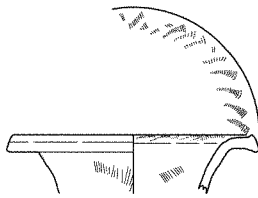
57(Y598)



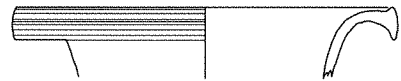
59(Y865)



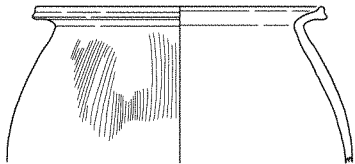
58(Y589)



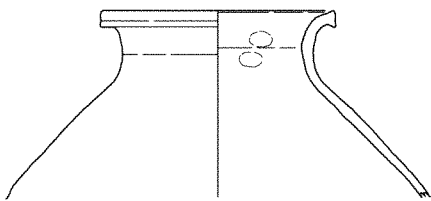
61(Y532)



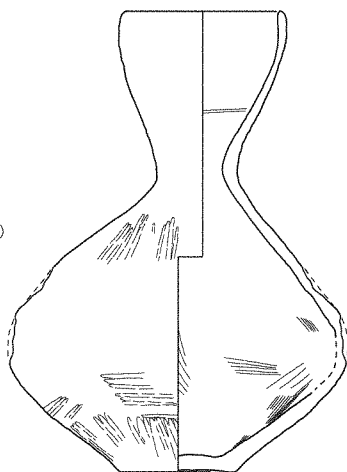
62(Y526)



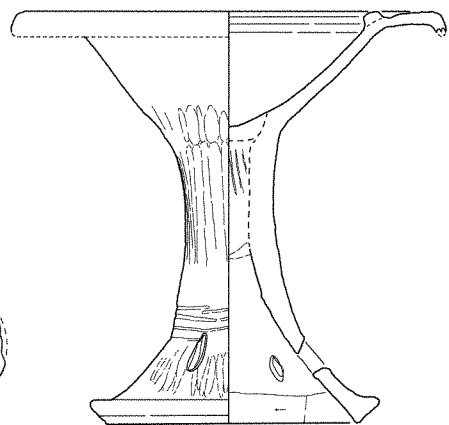
60(Y524)



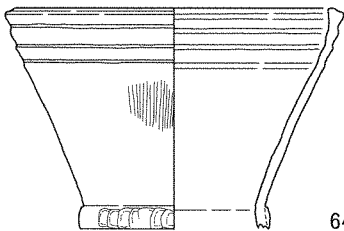
63(Y540)



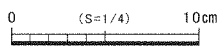
65(Y543)



66(Y542)



64(H545)



56~58 12a~15a SZ1(13a~14a SD73)
 59 12a~15a SZ1(12a~13a SD75)
 60~66 7a~7b SK43

20区 出土遺物 2

近に複数存在する（SK 207～209・216）。西側の辺を基準にした方位は座標北に対してN 21° E方向を示す。遺物は弥生時代終末期の土器 39・40 が出土している。

SH 4 調査区中央部北寄り 20 c～21 d 区に位置する円形の竪穴建物で北側にのびる。南側にある竪穴建物SH 6 を切る。規模は直径 5.8 m 以上、深さ 36 cm を測り、支柱穴と思われる小穴が 1 基確認できた。遺物は弥生時代後期後半～終末期と思われるの土器 41 が出土している。

SH 5 調査区中央部北寄り 21 c～23 d 区に位置する隅丸方形の竪穴建物である。西側にある竪穴建物SH 6 を切る。規模は東西 6.4 m、南北 5.6 m 以上、深さ 25 cm を測る。支柱穴は中央土坑SK 206 を囲む形で 4 基配置されているが、南北 3.5 m に対して、東西が 1.3 m と短い。東側の辺を基準とした方位は座標北に対して、N 20° E 方向を示す。遺物は弥生時代終末期の土器 42～44 が出土している。

SH 6 調査区中央部北寄り 21 b～22 c 区に位置する円形の竪穴建物である。北側が竪穴建物SH 4・5 に切られる。規模は直径約 5.9 m、深さ 18 cm に復元される。支柱穴は 7 本程度が想定され、SK 193 が中央土坑と思われる。遺物は弥生時代中期後葉の土器 45・46、石鏃などが出土している。

SH 7 調査区中央部北寄り 24 b～24 d 区に位置する隅丸方形の竪穴建物で東側にのびる。規模は南北 5.4 m 以上、深さ 63 cm を測る。西側の辺を基準とした方位は座標北に対して、N 18° E 方向を示す。遺物は弥生時代終末期の土器 47～49 が出土している。

SH 8 調査区中央部 24 a～25 a 区に位置する隅丸方形の竪穴建物で南側にのびる。規模は東西 4.9 m 以上、深さ 20 cm を測り、北側に周壁溝を有する。北側の辺を基準とした方位は座標北に対して N 70° W を示す。遺物は弥生時代終末期と思われる土器 50～52 が出土している。

SH 9 調査区東部 26 a～27 a 区に位置する円形の竪穴建物で北側にのびる。規模は直径 8.3 m、深さ 32 cm を測るが、北壁面や支柱穴の位置から、わずかに東に移動して建て替えが推測される（SH 9 A→9 B）。SK 304 が中央土坑であり、弥生時代終末期の土器 53・54 が出土している。

SH 10 調査区東部 30 b～31 b 区に位置する竪穴建物と思われ、北西側にのびる。規模は南北 6.1 m 以上、深さ 24 cm を測り、支柱穴が 2 基と中央土坑と思われるSK 275 が認められる。東辺を基準とした方位は座標北に対して、N 39° E を示す。弥生時代後期後葉～終末期と思われる土器が出土している。

SH 11 調査区東部 31 a～32 a 区に位置するやや歪んだ隅丸の台形をなす竪穴建物と思われる。規模は東西 4.7 m、南北 3.4～3.9 m、深さ 15 cm を測る。支柱穴は 2 本と思われ、中央土坑と思われるSK 282 が認められる。東辺を基準とした方位は座標北に対して、N 5° E を示す。弥生時代終末期と思われる土器 55 が出土している。

SZ 1（SD 73・74・75・221） 調査区西部 12 a～14 b 区に位置する方形周溝墓で北側にのびる。規模は東西 9.3 m、南北 7.5 m を測り、南の辺を基準とした方位は座標北に対してN 61° E 方向を示す。遺物は周溝から弥生時代中期後葉の土器 56～59 が出土している。さらに北側に隣接して溝状の遺構（SD 219・220）があり、周溝墓となる可能性が高い（SZ 2）。

SK 43 調査区西部 7 a～7 b 区に位置する楕円形の土坑である。規模は南北 2.6 m、東西 1.6 m、深さ 40 cm を測る。遺物は弥生時代中期後葉の土器 60～66 などが大量に出土している。先述したSB 1・SA 1 と関連すると考えられる。

SK 186 調査区中央部 21 a 区に位置する土坑である。規模は東西 93 cm、南北 1.4 m、深さ 26 cm を測る。遺物は弥生時代中期後葉の土器が出土している。

S K 242 調査区東部 33 a 区に位置する土坑である。規模は長辺 67 cm、短辺 60 cm、深さ 26 cmを測る。遺物は弥生時代中期後葉の土器が出土している。

S K 329 調査区東端 38 a 区に位置する土坑である。規模は長辺 1.06 m、短辺 70 cm、深さ 30 cmを測る。遺物は弥生時代中期後葉の土器が出土している。

[21 区]

調査区南部に位置する東西方向の排水路部分（延長約 145 m）の調査区で、標高 17.73 ~ 18.77 mを測る。調査面積 622.2 m²。

遺構面を 3 面確認した。第 1 面は中世の遺構面で溝（S D 5・S D 83）などが中心となる。居住域を示す遺構は認められない。平面で検出できた遺構は 1 a ~ 20 a 区周辺までである。第 2 面の遺構は、調査区全域にひろがり、古代の遺構が中心となる。2 a ~ 17 a 区周辺は同一面で古代・弥生時代の遺構が確認できた。竪穴建物 1 棟（S H 1）、掘立柱建物 13 棟（S B 1 ~ 13）、柱列 1 列（S A 1）、土坑（S K 48・106・243）、溝（S D 62）、大型の土坑状の遺構（S X 141）、小穴などがあり、居住域であったと考えられる。第 3 面の遺構は 17a ~ 29 a 区周辺に広がる弥生時代の遺構面である。竪穴建物 1 棟（S H 2）、土坑、溝（S D 189）、窪み状の遺構（S X 400）、小穴（P 417）などがある。

第 1 面

S D 5 調査区東半部 3 a ~ 14 a 区に位置する東西方向の溝である。規模は幅約 1.0 m、深さ約 55 cmを測る。遺物は土師器、須恵器、製塩土器、瓦器、瓦、黒色土器などが出土しているが、いずれも小片である。13 世紀と思われる。

S D 83 調査区中央部 11 a 区に位置する南北方向の溝で北側にのびる。先の S D 5 に直行する形で位置する。規模は幅約 50 cm、深さ 23 cmを測る。遺物は土師器、須恵器、製塩土器が出土しており、S D 5 と同時期と思われる。須恵器の中に動物の顔が表現された土器 128 が含まれていた。

第 2 面

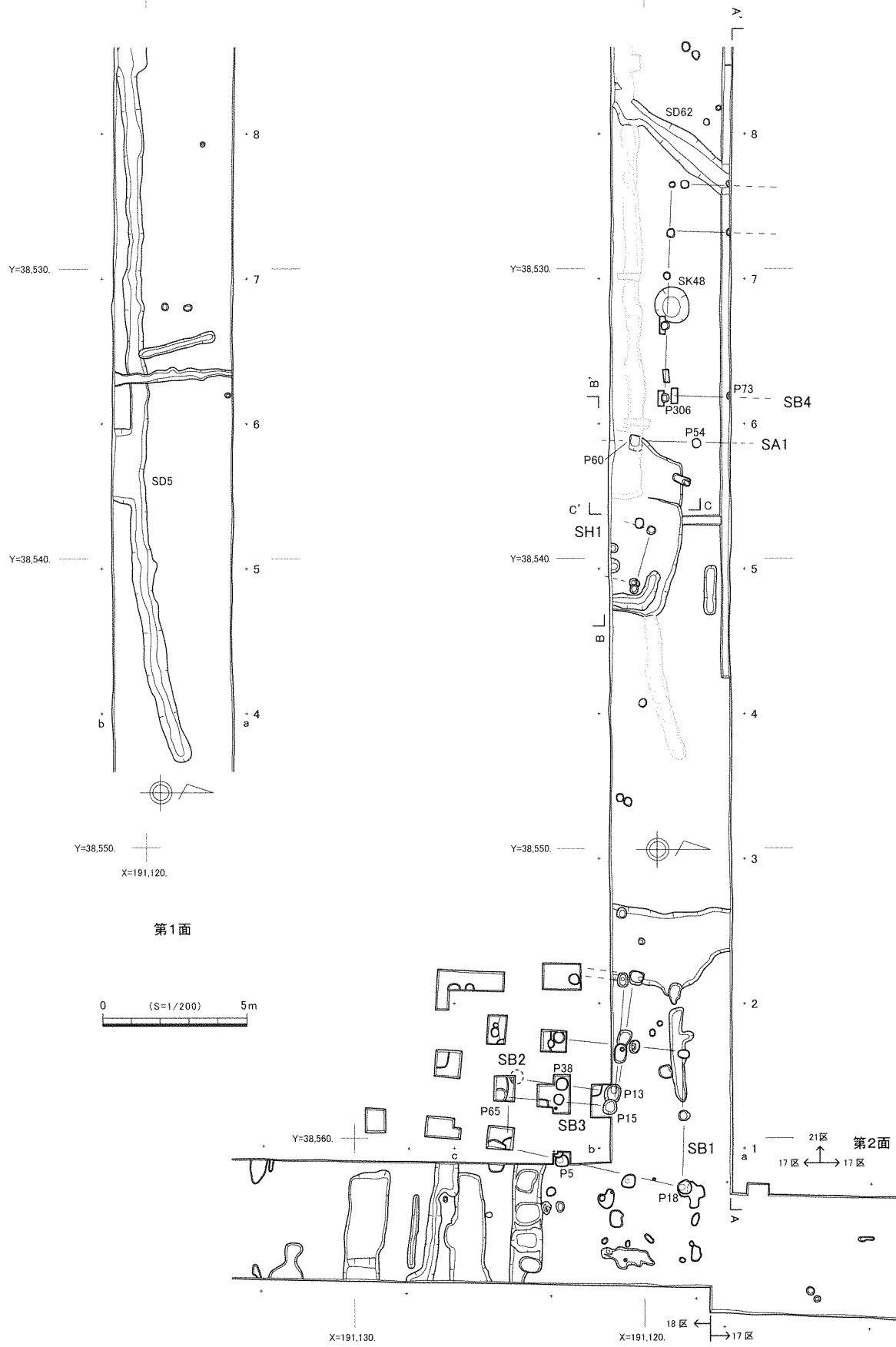
S B 1 調査区東端部 1 a・2 b ~ 18 区 1 a 区に位置する南北方向の側柱建物と思われる。建物の歪みが大きく、規模は梁行 2 間（4.6 m）、桁行 3 間（6.1 m）程度を測る。P 5-18 を基準とした方位は座標北に対して N 10.5° E を示す。

S B 2 調査区東端部 1 a ~ 2 a 区に位置する南北方向の側柱建物と思われ南側にのびる。規模は梁行 2 間（4.4 m）、桁行 2 間（3.8 m）以上を測り、P 65-15 を基準とした方位は座標北に対して N 4.5° E を示す。

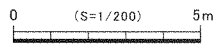
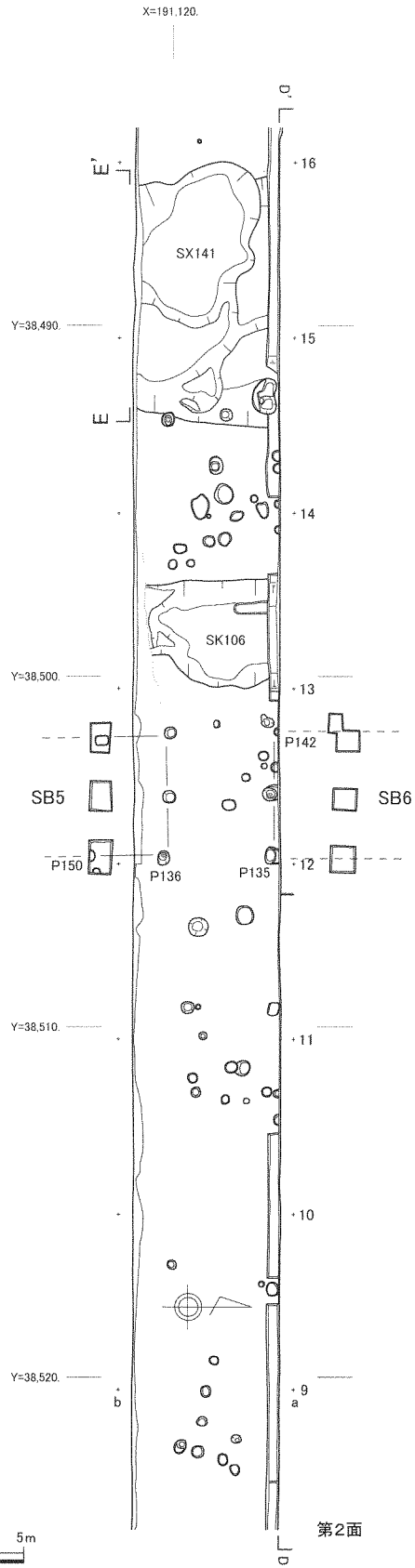
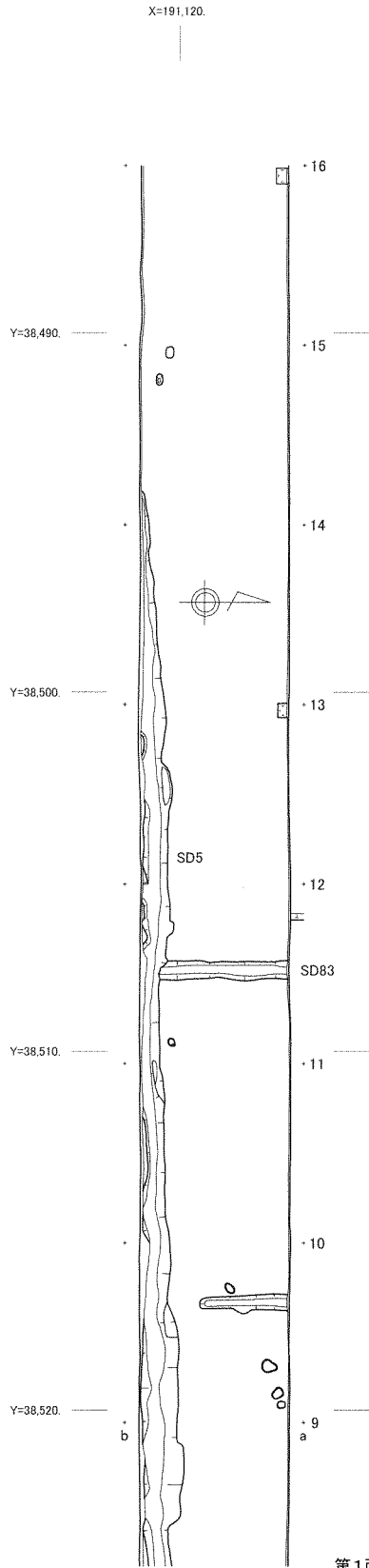
S B 3 調査区東端部 1 a ~ 2 a 区に位置する側柱建物と思われ南側にのびる。規模は梁行 2 間（4.0 m）、桁行 2 間（3.45 m）以上を測り、P 38-13 を基準とした方位は座標北に対して N 8° E を示す。

上記 3 棟の建物からは土師質の土器片が中心に出土しているが、いずれも小片で年代は決めにくいものの、切り合いなどから S B 1（7 世紀後半）→ S B 3（8 世紀初頭）→ S B 2（8 世紀前半）の前後関係が想定される。

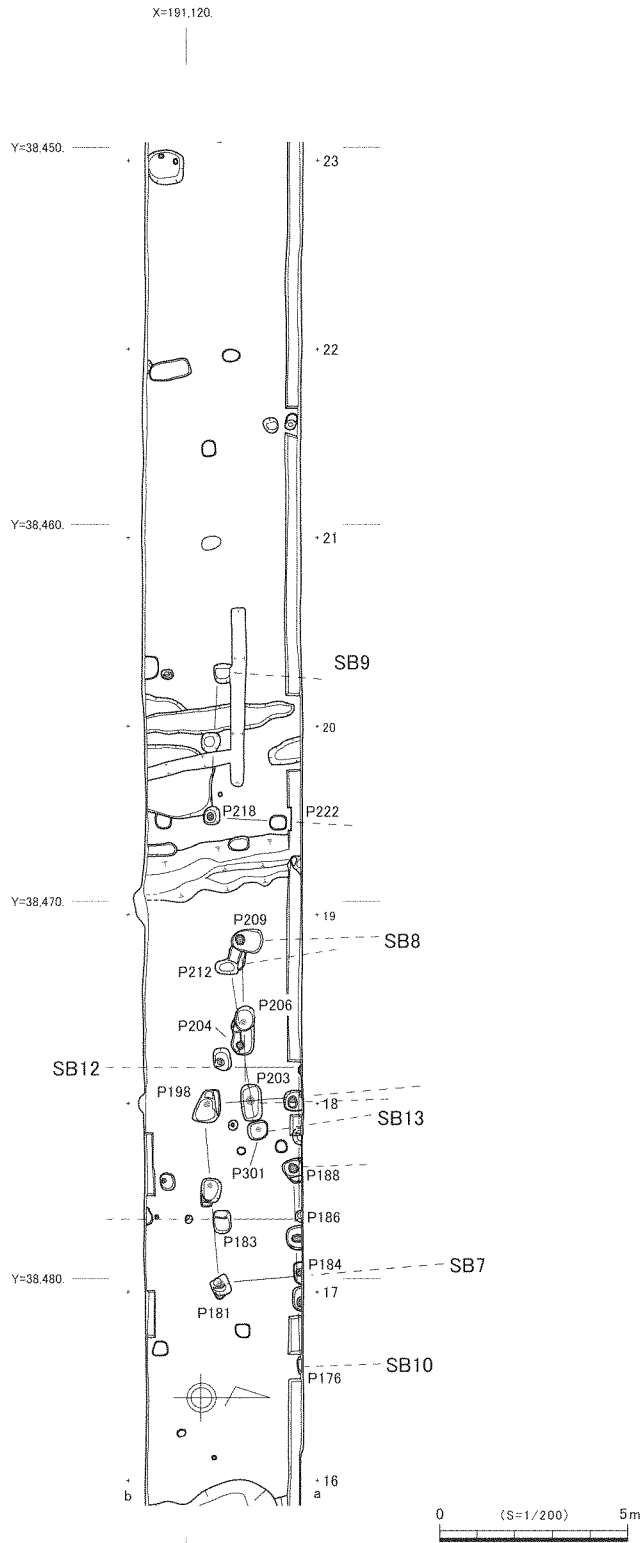
S B 4・S A 1 調査区東部に位置する東西方向の側柱建物と思われ北側にのびる。規模は東西 4 間（7.4 m）、東西 1 間（2.25 m）以上を測り、P 306-73 を基準にした方位は座標北に対して N 1.5° W を示す。遺物は土師器の小片が出土している。1.5 m 東側には南北方向の柱列状の遺構（S A 1）がある。P 60-54 を基準とした方位は座標北を示す。遺物は須恵器坏など出土しており、8 世紀前半と思われ、S B 4 とともに同時期と思われる。



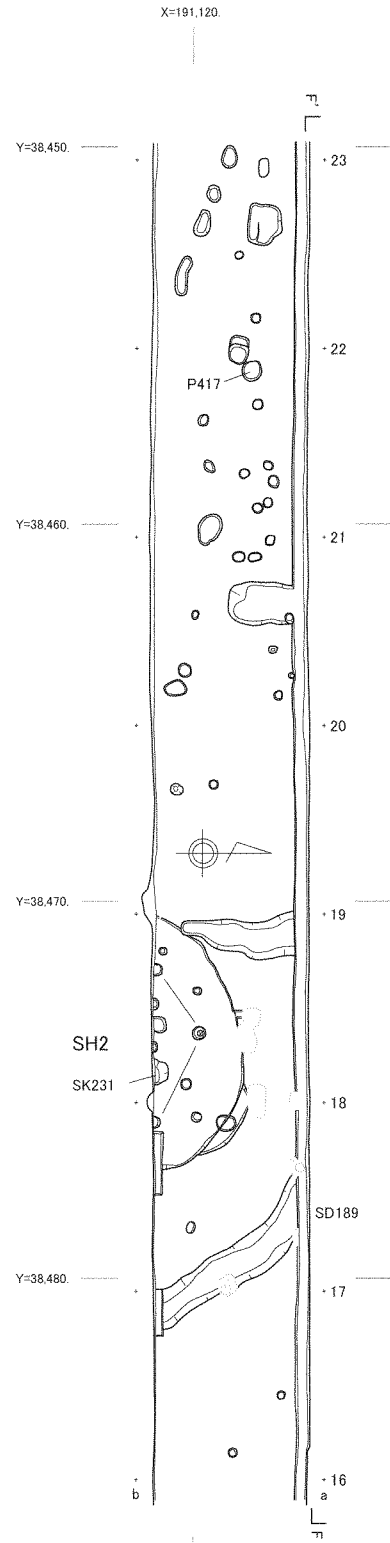
21区 平面图1



21区 平面図2

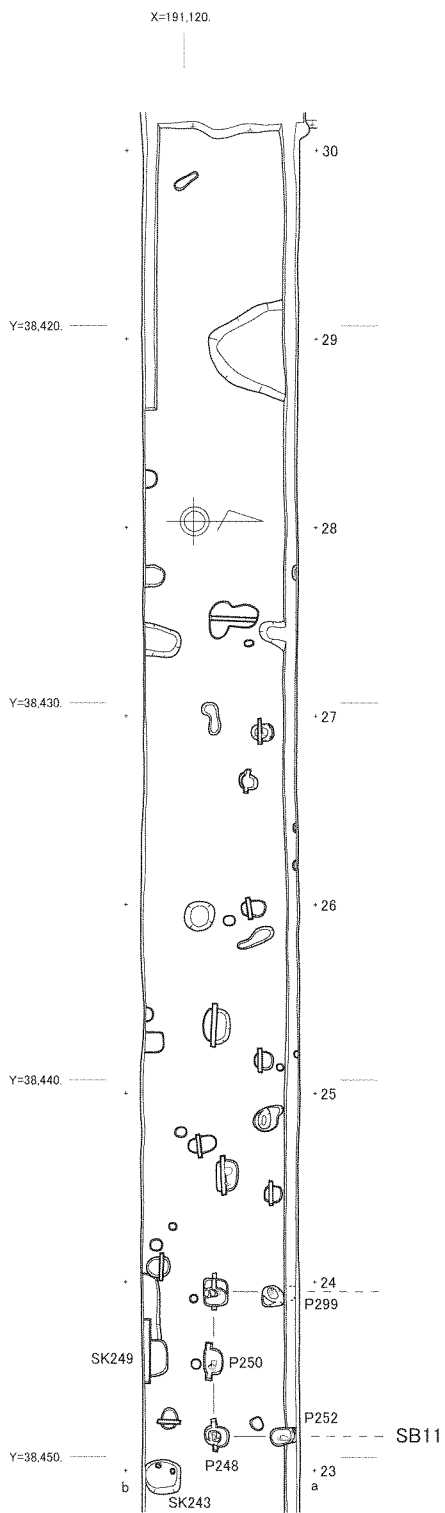


第2面

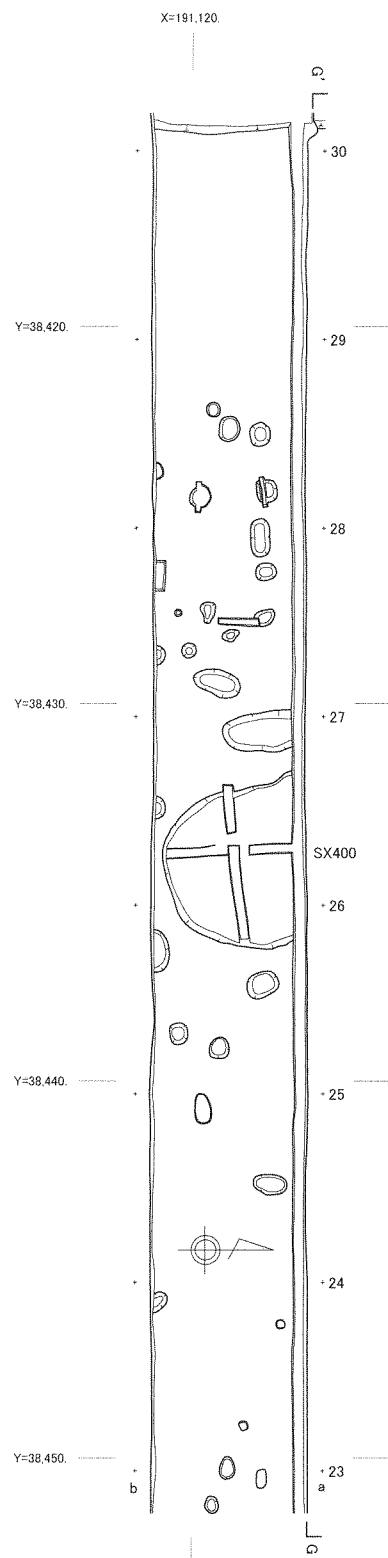


第3面

21区 平面図3



第2面



第3面

21区 平面图4

S B 5・6 S B 5は調査区東半部 11 a～12 b 区に位置する南北方向の側柱建物で南側にのびる。規模は梁行 2 間 (3.5 m) 桁行 1 間 (1.95～2.0 m) 以上を測る。P 150-136 を基準にした方位は座標北を示す。S B 6は調査区東半部 12 a 区に位置する掘立柱建物で北側にのびると思われる。規模は梁行 2 間 (3.5 m)、桁行 1 間以上を測る。先の S B 5 とは 3 m の間隔を有し柱筋が通る。P 135-142 を基準とした方位は座標北に対して N 87.5° W を示す。遺物は土師質の小片が出土している。いずれも奈良時代と思われる。

S B 7 調査区中央部 16 a～18 a 区に位置する南北方向の側柱建物で北側にのびる。規模は梁行 2 間 (4.75 m)、桁行 1 間 (2.3 m) 以上を測り、P 181-184 を基準にした方位は座標北に対して N 2.5° W を示す。遺物は須恵器 67～70 などが出土している。

S B 8 調査区中央部 17 a～18 a 区に位置する掘立柱建物で北側にのびると思われる。規模は梁行 2 間 (4.3 m)、桁行 1 間以上を測る。P 209-203 を基準にした方位は座標北に対し N 86° E を測る。遺物は須恵器 71・72、土師器 73、製塩土器 74・75 が出土している。

S B 9 調査区中央部 19 a～20 a 区に位置する側柱建物で北側にのびる。規模は梁行 2 間 (3.8 m)、桁行 1 間 (1.8 m) 以上の側柱建物である。P 218-222 を基準にした方位は座標北に対して N 5° E を示す。

S B 10 調査区中央部 16 a～17 a 区に位置する東西方向と思われる掘立柱建物で東・北側にのびる。規模は梁行 1 間以上、桁行 3 間 (5.25 m) 以上を測る。P 188-176 を基準にした方位は座標北に対し N 88° E を示す。

S B 11 調査区西部 23 a～24 a 区に位置する掘立柱建物で北側にのびる。規模は梁行 2 間 (3.85 m)、桁行 1 間 (1.65～1.8 m) 以上を測る側柱建物である。P 248-252 を基準にした方位は座標北を示す。P 248・250・252 には根石、P 299 には柱材が残っていた。遺物は須恵器 76 などが出土している。

S B 12 調査区中央部 17 a～18 a 区に位置する側柱建物で南側にのびる。規模は梁行 2 間 (3.85 m)、桁行 1 間 (2.25 m) 以上を測る側柱建物である。P 183-186 を基準にした方位は座標北を示す。P 186 に柱材が残っていた。

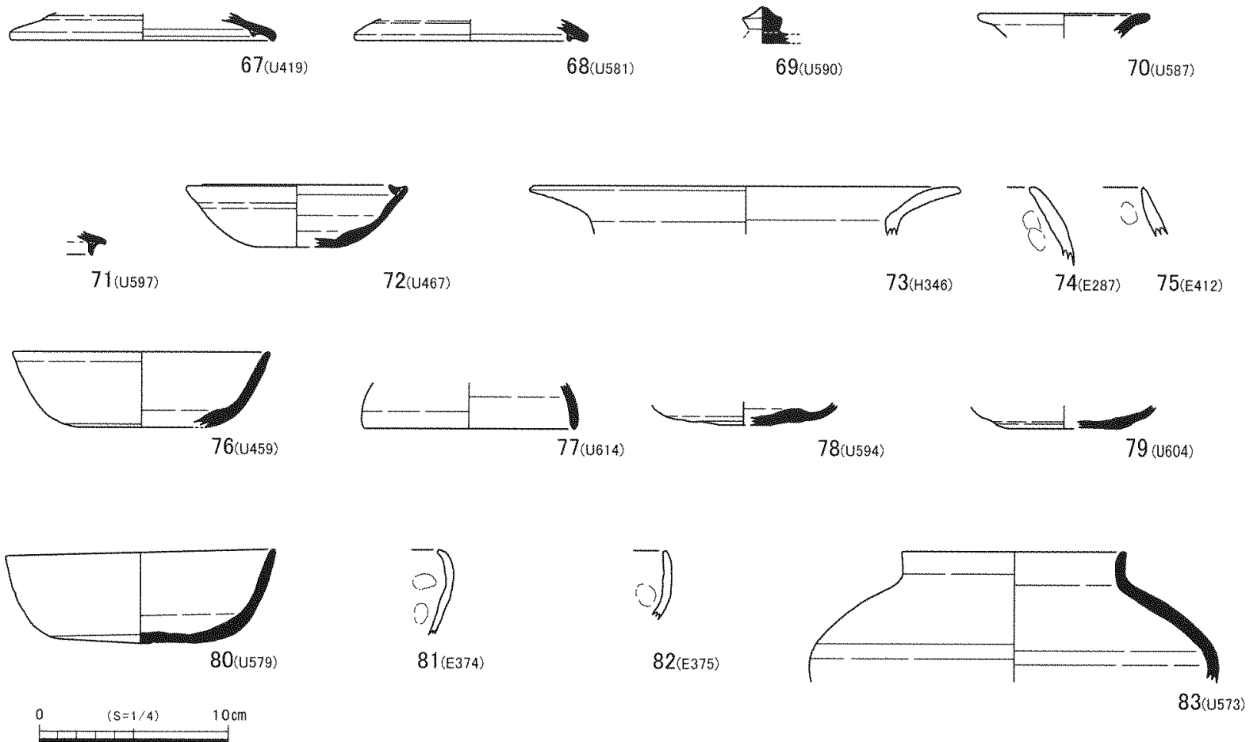
S B 13 調査区中央部 17 a～18 a 区に位置する掘立柱建物で北側にのびると思われる。規模は梁行 2 間 (4.35 m)、桁行 1 間以上を測る。P 212-301 を基準にした方位は座標北に対し N 80° E を示す。P 204 に柱材が残っていた。遺物は須恵器 77～79 などが出土している。

S K 106 調査区東部 13 a 区に位置する北側にのびる土坑である。幅 3.1 m、深さ 40 cm を測り、南側が浅く、北側が深い。遺物は須恵器 84～93、土師器 94～105・109～115、製塩土器 106～108・116、鉄滓などが大量に出土しており、奈良時代前半と考えられる。製塩土器と土師器の割合が高く、遺物の遺存状態が良好なものが多い。土師器は畿内産(系)土師器の割合が非常に高いのが特徴である。

S K 243 調査区西部 22 a～23 a 区に位置する南側にのびる土坑である。規模は残存長 90 cm、幅 90 cm、深さ 20 cm を測る。遺物は須恵器 80、土師器、製塩土器 81・82 が出土しており、奈良時代初頭と考えられる。

S K 249 調査区西部 23 a 区に位置する土坑で南側にのびる。規模は東西 1.0 m、南北 60 cm 以上、深さ 12 cm を測る。遺物は須恵器 83 などが出土しており、奈良時代初頭と考えられる。

S D 62 調査区東部 7 a～8 a 区に位置する南西～北東方向の溝である。規模は最大幅 1.02 m、深さ 36 cm を測り、溝の方向は座標北に対して N 38.5° E を示す。遺物は土師器、須恵器、製塩土器などの



- | | | |
|----------------------------------|----------------------------------|-----------------------------|
| 67 16a~18a SB7(16a~17a P181一段下げ) | 72 17a~18a SB8(17a~18a P203一段下げ) | 77 17a~18a SB13(17a P301掘方) |
| 68 16a~18a SB7(16a~17a P181柱痕) | 73 17a~18a SB8(18a P209柱痕) | 78 17a~18a SB13(18a P204半掘) |
| 69 16a~18a SB7(17a~18a P198掘方) | 74 17a~18a SB8(18a P209一段下げ) | 79 17a~18a SB13(18a P212半掘) |
| 70 16a~18a SB7(17a~18a P198柱痕) | 75 17a~18a SB8(18a P209半掘) | 80~82 22a~23a SK243 |
| 71 17a~18a SB8(18a P206一段下げ) | 76 23a~24a SB11(23a P252一段下げ) | 83 23a SK249 |

21区 出土遺物 1

小片が出土しており、奈良時代と思われる。

S X 141 調査区中央部 14 a ~ 15 a 区に位置する大型の土坑状の遺構で南北方向にのびる。規模は最大幅 7.5 m、深さ 84 cm を測り、北側が浅く南側が深くなる。遺物は須恵器 117 ~ 121、土師器 122 ~ 124、製塩土器 125 ~ 127 が出土しており、7 世紀中葉頃と思われる。

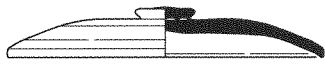
S H 1 4 a ~ 5 a 区に位置する隅丸方形の竪穴建物で、南側にのびる。規模は東西約 4 m、深さ約 40 cm を測り、支柱穴は 4 本と思われる。東側の辺を基準とした方位は座標北に対して N 12° E を示す。遺物は弥生時代終末期の甕 132・133、東阿波型土器 134 などが出土している。

S K 48 6 a 区に位置する円形の土坑である。規模は長辺 1.22 m、短辺 1.08 m、深さ 12 cm を測る。遺物は弥生時代中期後葉の土器 135 ~ 140 が出土している。

第3面

S H 2 調査区中央部 17 a ~ 18 a 区に位置する楕円形の竪穴建物である。第2面と3面の境界付近に位置していたため、この面で報告する。規模は東西 6.6 m、南北は少し短い 5 m 前後に復元され、深さ 20 cm を測る。支柱穴は 5 本程度と思われる。遺物は中央土坑と思われる S K 231 から弥生時代中期後葉の土器 141 が出土している。

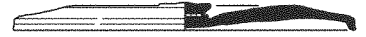
S D 189 調査区中央部 16 a ~ 17 a 区にある南東~北西方向の溝である。S H 2 同様第2面と3面の境界付近に位置する。規模は幅 1.1 m、深さ 12 cm を測り、溝の方向は座標北に対して N 35° W を示す。



84(U264)



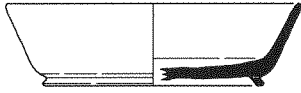
85(U286)



86(U328)



87(U254)



88(U298)



89(U326)



90(U332)



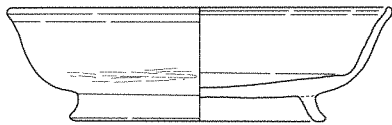
91(U330)



92(U329)



93(U297)



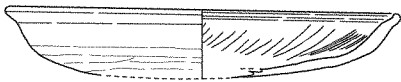
94(H259)



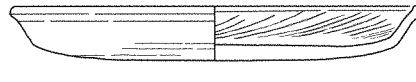
95(H172)



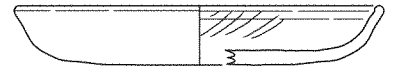
96(H236)



97(H235)



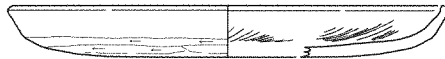
98(H173)



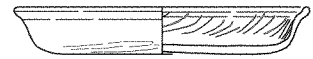
99(H176)



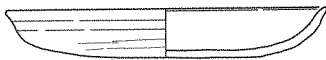
100(H175)



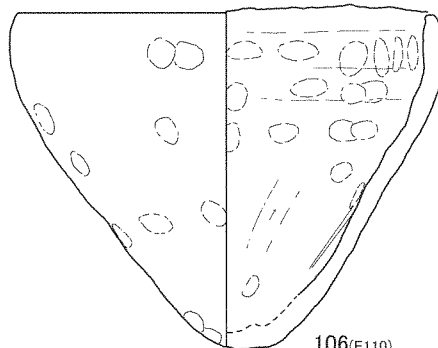
101(H234)



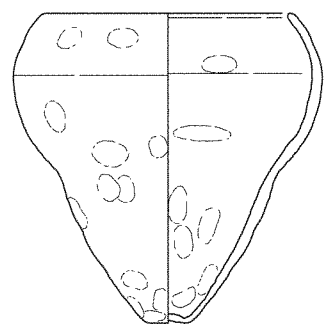
102(H232)



103(H231)



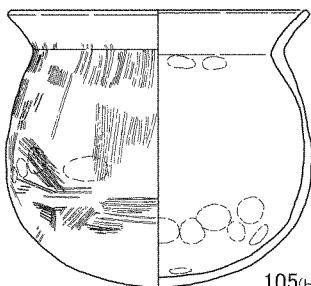
106(E110)



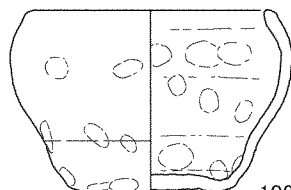
107(E82)



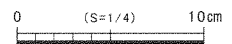
104(H171)



105(H177)

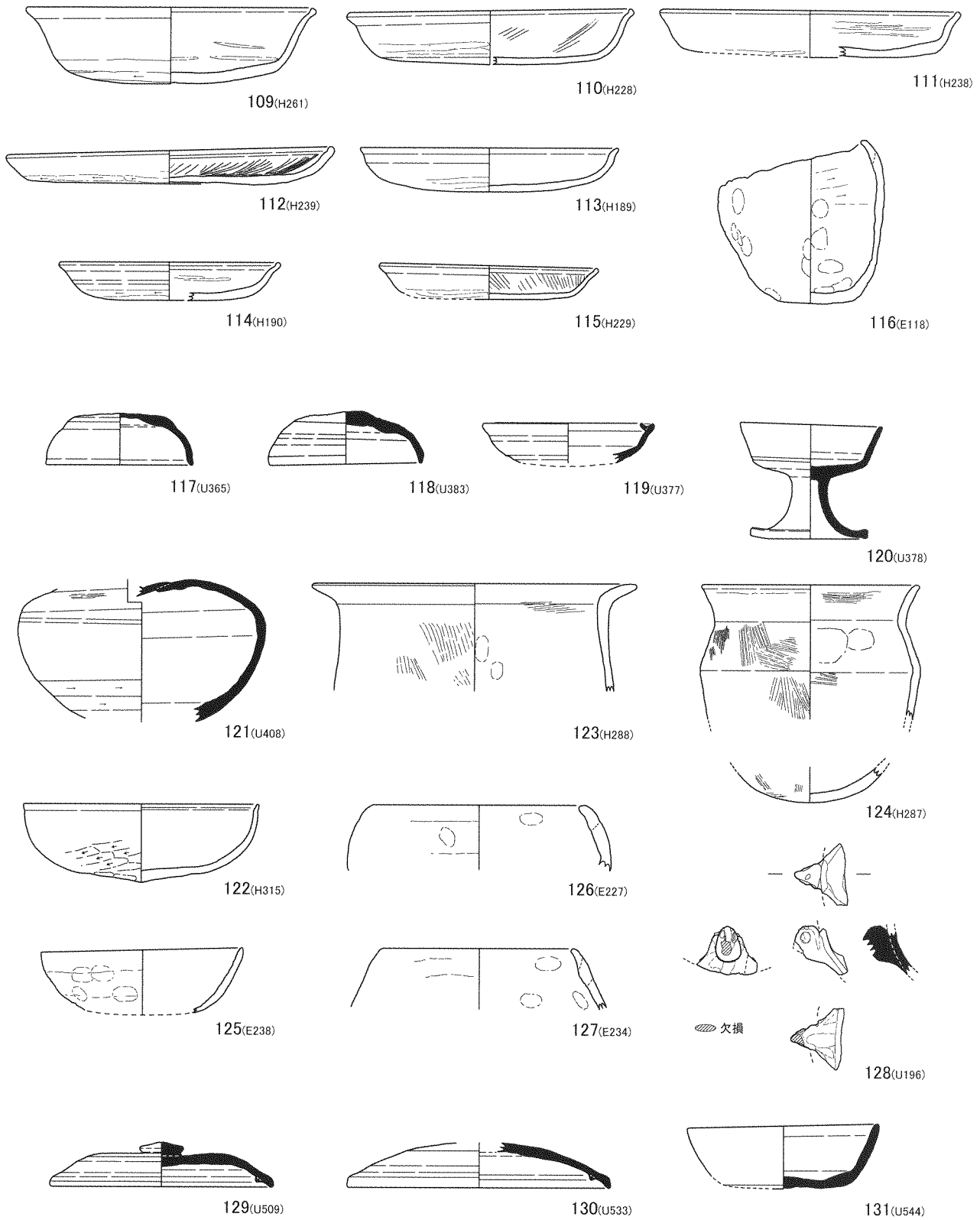


108(E166)



84~108 13a SK106上層

21区 出土遺物 2



0 (S=1/4) 10cm

109~116 13aSK106(中層)

117~120・123~127 14a~15a SX141(中層)

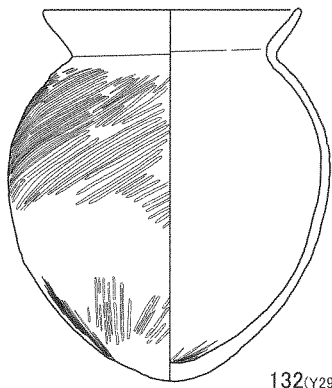
121・122 14a~15a SX141(下層)

128 11a SD83

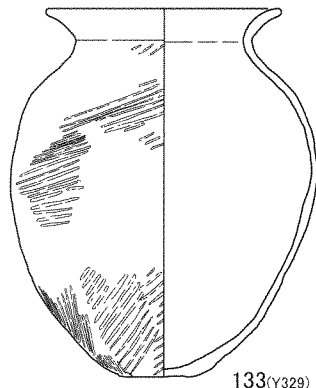
129・130 25a 包含層

131 24a 包含層

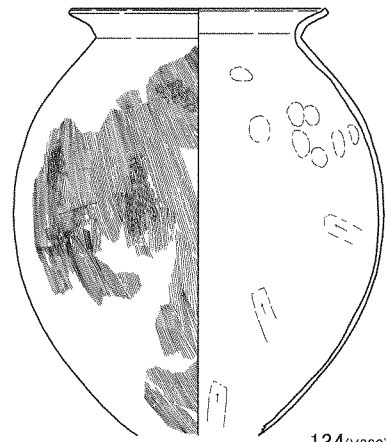
21 区 出土遺物 3



132(Y296)



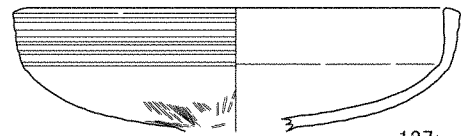
133(Y329)



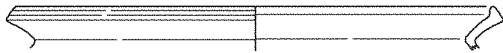
134(Y330)



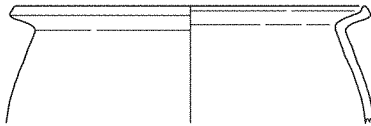
135(Y310)



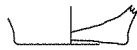
137(Y314)



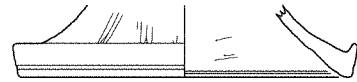
136(Y303)



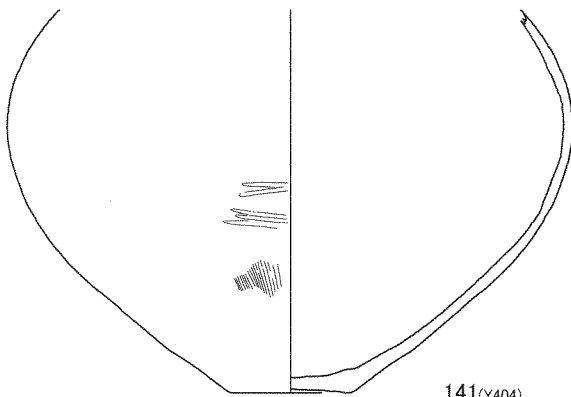
138(Y304)



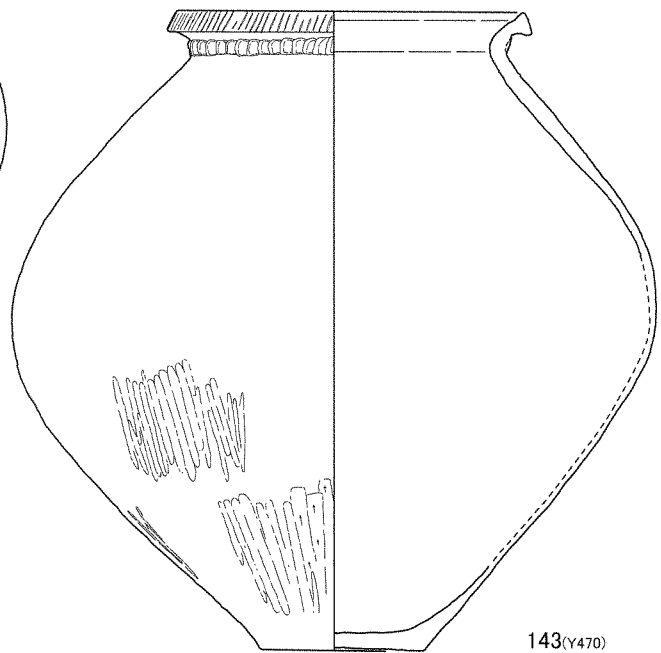
139(Y299)



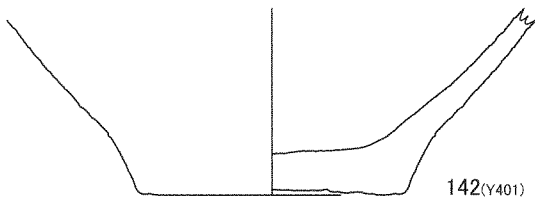
140(Y298)



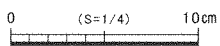
141(Y404)



143(Y470)



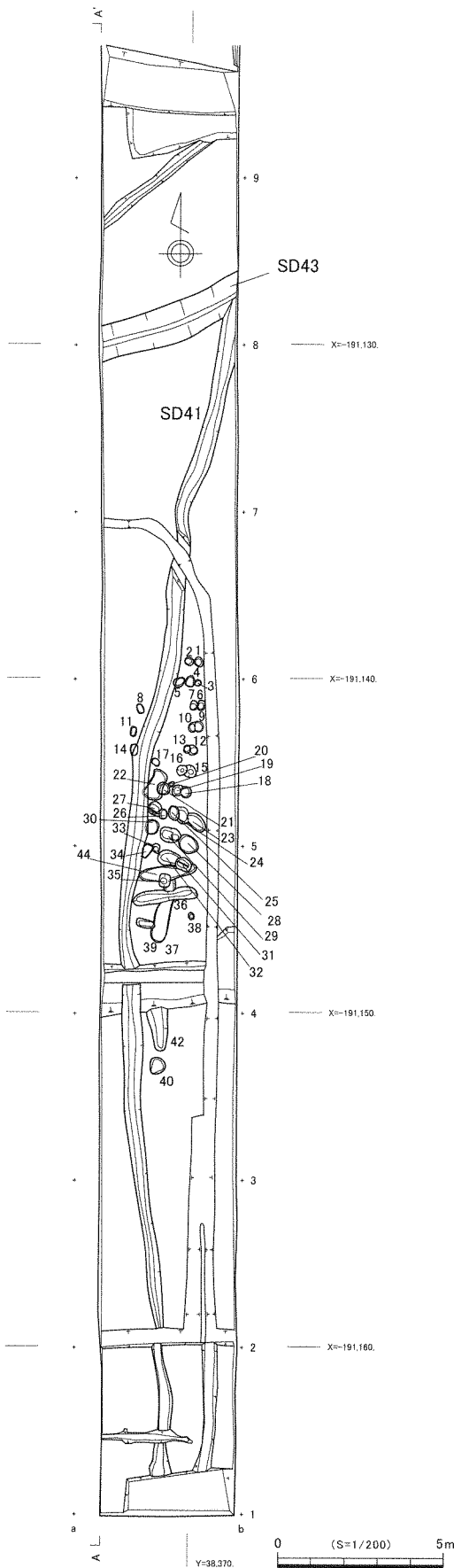
142(Y401)



132~134 4a~5a SH1
135~140 6a SK48

141 17a~18a SH2(18a SK231)
142 16a~17a SD189
143 21a P417

21区 出土遺物 4



22区 平面図

遺物は弥生時代中期後葉の土器 142 が出土している。

S X 400 調査区西部 25 a ~ 26 a 区に位置する遺構で北側ののびる。規模は幅 4.4 m、深さ 20 cm を測る。当初円形の竪穴建物と思い掘削を進めたが、柱穴や中央土坑が確認できなかったことから、窪み状の遺構と判断した。遺物は弥生時代中期後葉の土器が出土している。

P 417 調査区北部 21a 区に位置する小穴である。規模は直径約 50 cm、深さ約 20 cm を測り、遺物は弥生時代中期後葉の土器 143 が出土している。

[22 区]

調査地南部に位置する南北方向の排水路部分の調査区で、標高 17.01 m を測る。調査面積 178 m²。

居住域を示す遺構は少なく、溝 (SD 41・43) や小穴などがある。

SD 41 調査区 1 a ~ 8 a 区に位置する南北方向の溝である。規模は幅約 60 cm、深さ 25 ~ 40 cm を測り、遺物は土師器・須恵器の小片が出土しており 7 ~ 8 世紀と思われる。SD 41 の中央東側には 18 ~ 60 cm の小穴が 2 ~ 5 基を単位に列状に並ぶ状況が認められる。一部は SD 41 を切っており、SD 41 より新しいと考えられる。遺物は土師器、須恵器の小片が出土しており、中世と思われる。

SD 43 調査区北部 7 a ~ 8 a 区に位置する東西方向の溝である。規模は幅 1.16 m、深さ 0.5 m を測り、遺物は弥生時代終末期の土器が多量に出土しており、庄内式土器や東阿波型土器が含まれる。

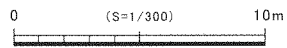
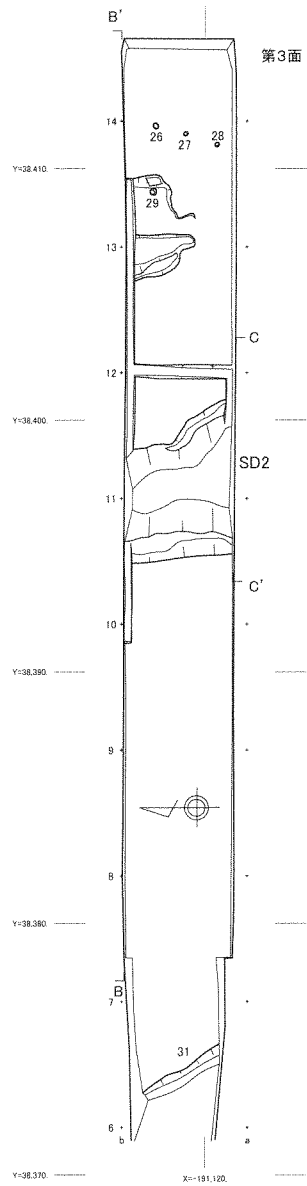
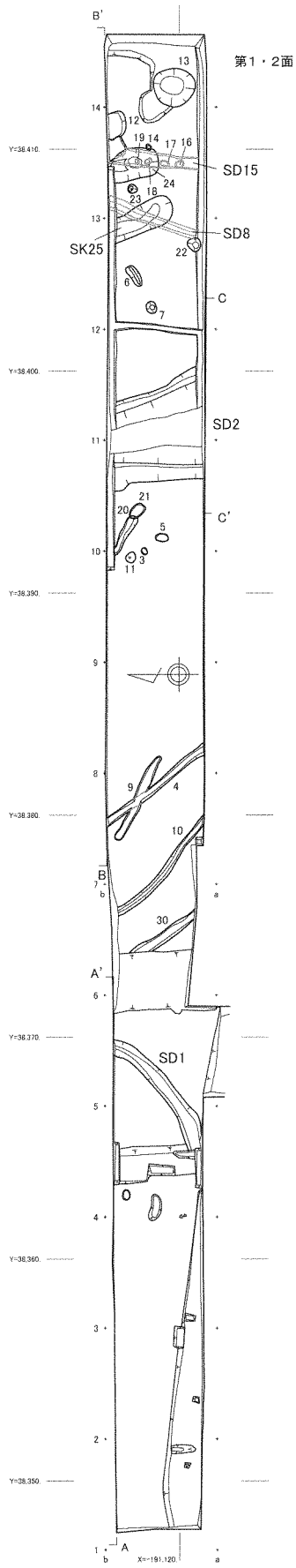
[23 区]

調査地西部に位置する東西方向の排水路部分の調査区で、標高 16.62 ~ 17.27 m を測る。調査面積 279 m²。

調査区東半部 6 a ~ 14 a 区では遺構面を 3 面確認した。22 区同様生活に関連する遺構は少なく、第 1 面では、溝 (SD 8・15)、土坑などがある。第 2 面では土坑 (SK 25)、溝 (SD 1・2) 小穴など、第 3 面では小穴や窪み状の遺構などがある。

第 1 面

SD 8・15 調査区東端 12 a ~ 13 a 区に位置する南北方向の溝である。規模は SD 8 が幅 38 ~ 63 cm、深さ約 3 cm、SD 15 が 51 ~ 80 cm、深さ約 7 cm を測る。遺物は SD 8 が土師器 (摂津 C 型羽釜)、SD 15 は土師器、須恵器、土師器、製塩土器が出土しており、共に平安時代中葉と思われる。



23区 平面図

第2面

SK 25 調査区東部、12 a～13 a区に位置する土坑で北側にのびる。規模は幅1.5 m、深さ40 cmを測る。遺物は弥生時代中期後葉の甕、壺、高坏などが出土している。

SD 1 調査区西部4 a～5 a区に位置する南西～北東方向の溝でわずかにカーブする。幅90 cm、深さ15 cmを測る。遺物は弥生時代終末期と思われる遺物が出土している。

SD 2 調査区東部10 a～11 a区に位置する南北方向の溝である。規模は幅約6 m、深さ約1.4 mを測る。上層・中層・下層の3層に大別され、上層は7～8世紀、中層は弥生～古墳時代、下層は弥生時代中期の遺物が出土している。中層から出土した遺物には、吉備地域と思われる甕が含まれる。2017年度に確認した6区溝10の続きと考えられる（『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅻ』南あわじ市教育委員会2023年3月）。

第3面

小穴や浅い窪み状の遺構がある。中期以前の遺構と思われるが、詳細は不明である。

2. まとめ

本調査により、縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良・平安時代、中世の遺構・遺物を確認することができた。

縄文時代は、調査地北西部16区の自然流路から後期の土器が出土しているが、居住域は確認できていない。

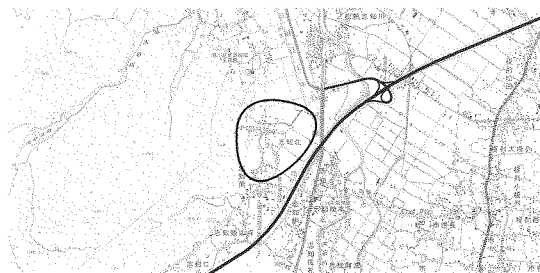
弥生時代は、南西部を除いてほぼ全域に広がる。居住域は中央部～東部にかけて分布すると想定される。年代的には中期後葉と後期後葉～終末期が中心で一部中期前葉の遺物が認められる。竪穴建物は中期後葉が3棟、後期後葉～終末期が15棟の合計18棟確認できた。また中期後葉の方形周溝墓が2基確認できたことは大きな成果といえよう。2017年度の円形周溝墓1基と2014年度の確認調査時（No. 208）の1基と合わせて合計4基となり、居住域と墓域を有する集落であることや終末期には阿波・吉備・河内地域からの搬入土器が認められることから、三原平野の中心集落の一つと評価されよう。

飛鳥～奈良時代の遺構は調査地南東部17・21区周辺を中心に分布する。21区中央部に展開する建物群について、出土遺物が小片で今後検討の余地もあると思うが、SB 13→SB 8・10（Ⅰ期：飛鳥Ⅱ・Ⅲ）→SB 7・11（Ⅱ期：飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ・Ⅱ）→SB 9・12（Ⅲ期：奈良前葉）といった変遷が想定される（11 a～12 b区に位置するSB 5・6はⅡ又はⅢ期）。またこれら建物群は2017年度に確認した3区の倉庫群（『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅻ』南あわじ市教育委員会2023年）とは一定の距離を保ちつつ南北方向を意識した柱筋を揃えた規則的な配置であることが指摘できる。これからの建物群には遺物の廃棄土坑と思われる遺構がそれぞれ存在する（SX 141：Ⅰ期、SK 106：Ⅱ・Ⅲ期）。特に後者のⅡ・Ⅲ期に該当するSK 106からは比較的まとまって畿内産（系）土師器が出土しており、これまで市内で確認されている資料の回転台土師器（在地産）と畿内産（系）土師器との割合が大きく異なり注意される。これらのことから明確な硯や墨書土器など文字関連資料は認められないものの、遺跡の立地などを考慮すると三原郡衙域の一部を確認した可能性がある。

中世については、部分的に12～14世紀頃の集落が存在すると考えられる。 （坂口）

2. 門の上遺跡・南平遺跡 - 2次調査 -

所在地 志知志知北字大床・
志知南字北浦外
事業名 経営体育成基盤整備事業（片田地区）
担当者 山崎裕司
種別 確認調査
調査期間 平成30年5月22日～6月12日
調査面積 68㎡（2×2m17ヶ）



調査の位置

1. 調査内容

調査地は三原平野北西部に位置し、南辺寺山塊山裾の高低差の大きな丘陵部と、大日川支流新川周辺の低平な平野部からなる。平野部にはN 30° Eの条里型地割が見られる。

志知北と志知南を含む片田地区で行われる県営圃場整備事業に伴い、前年度から確認調査を実施しており、今年度は門の上・南平遺跡の範囲について、より詳細なデータを得るために調査区の追加を行った。No.175 4層から少量であるが、鎌倉時代頃と思われる土師器皿1や青磁碗片等が出土した。

No.177 時間的な制約から遺構2～4については部分的な掘削に留めたが、遺構2からは土師器皿2と須恵器皿3が重なって出土した。土師器皿は口径11.5cm、須恵器皿は口径14.0cmで13世紀中～後葉頃と推定される。遺構5からは土師器小皿4が出土しており、遺構2と同時期と思われる。遺構4からは平瓦片が出土している。2～3層からは、須恵器皿5・6・土師器7・土師器小皿8・9・東播系須恵器鉢10・輸入陶磁器11等が出土しており、このうち須恵器皿6と土師器皿7は13世紀中～後葉頃、須恵器皿5は14世紀中葉～15世紀前葉頃、土師器小皿8は14世紀中葉～末頃、土師器小皿9は15世紀初頭～前葉頃と思われる。（『久保ノカチ遺跡Ⅱ』南あわじ市教育委員会2014）

No.178 3～4層から土師器皿12・13・土師器小皿14・白磁碗15・東播系須恵器鉢16・備前焼播鉢17が出土した。およそ13世紀代の13・14・15と14世紀以降の12・16・17に分類できる。

No.184 4層から、土師器皿18・19・備前焼甕20・銭種不明の銅銭一枚が出土した。備前焼甕20は口縁部を折り返して玉縁状を呈している。いずれも14～15世紀代であるが、土師器皿18は14世紀代で19は18より後出すると思われる。

2. まとめ

No.175・177・178は門の上遺跡、No.184は南平遺跡の範囲にあたる。

門の上遺跡については、前年度の調査も含めて考えると、遺跡の東側は12世紀～13世紀前半頃、西側は13世紀中葉～15世紀頃と推定される。条里型地割の縁辺部に位置し、条里型地割の再開発に伴い集落が成立したと推定される。

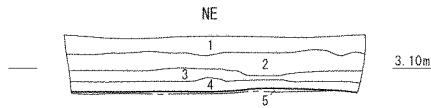
南平遺跡については、出土遺跡から14世紀～15世紀頃の遺跡であることが明らかとなった。標高11～14m付近に広がる段丘端に位置し、これより西の山側からは埋蔵文化財の包蔵が確認できないことから、山林と段丘下に広がる耕地との境界に成立した小集落と推定される。（山崎）



調査区設定図

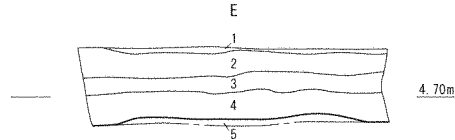
- 平成 30 年度 遺構・包含層確認調査区
- 平成 30 年度 確認調査区
- 平成 29 年度 遺構・包含層確認調査区
- 平成 29 年度 確認調査区
- 遺跡範囲
- 事業範囲

No. 175



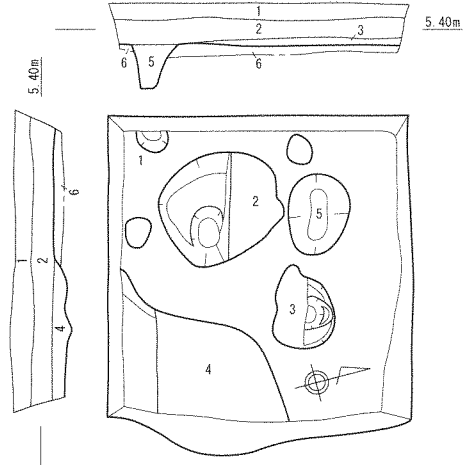
1. 明黄褐色10YR7/6砂質土 (Fe少し含む)
2. 黄橙色10YR7/8砂質土 (Fe・Mn含む)
3. 灰白色10YR7/1砂質土 (Mn含む)
4. 灰白色10YR7/1砂質土 (遺物少し含む)
5. 灰黄褐色10YR5/2粘質土 (Fe・Mn少し含む)

No. 178



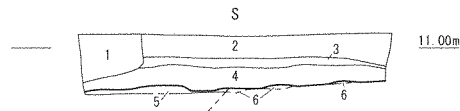
1. 耕土
2. 黄橙色10YR8/8砂質土 (Fe, 床土)
3. 褐灰色10YR5/1砂質土 (Mn少し・遺物多く含む)
4. 礫混にぶい黄褐色10YR5/3砂質土 (Mn多く・φ2~3cm礫・腐り礫・遺物含む)
5. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 (Fe・Mn少し含む)

No. 177

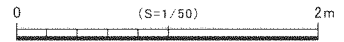


1. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土 (Fe, 床土)
2. 灰白色10YR7/1砂質土 (Fe・Mn少し含む)
3. 黄灰色2.5Y6/1粘砂質土 (Mn少し・遺物含む)
4. 黄灰色2.5Y5/1粗砂質土 (Mn少し含む・遺構4埋土)
5. 褐灰色10YR4/1粘砂質土 (遺構1埋土)
6. 黄色2.5Y8/6粗砂質土 (Fe少し含む)

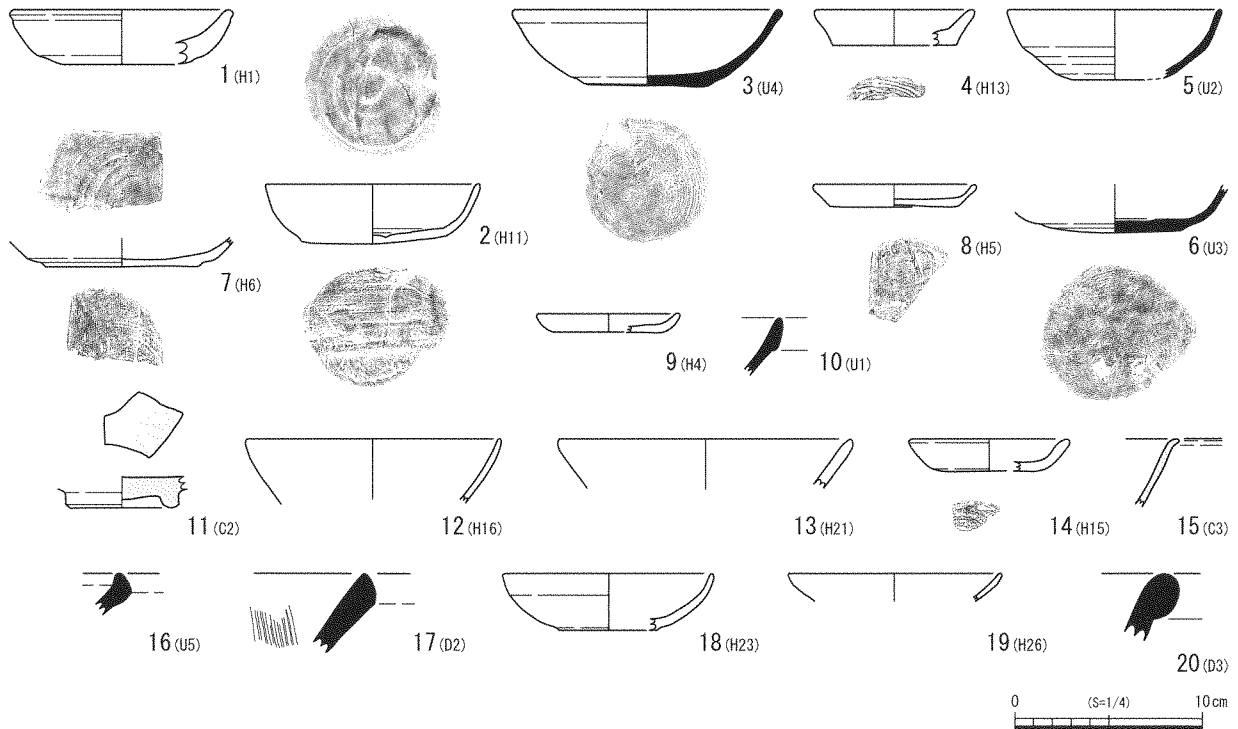
No. 184



1. 攪乱
2. にぶい黄褐色10YR7/2砂質土 (Fe・Mn少し含む)
3. 黄色2.5Y7/8砂質土 (Fe含む)
4. 灰白色10YR7/1粘砂質土 (Mn・遺物含む)
5. にぶい褐色7.5YR6/3砂質土 (Mn含む)
6. 黄褐色10YR7/8粘砂質土 (Fe・腐り礫含む)



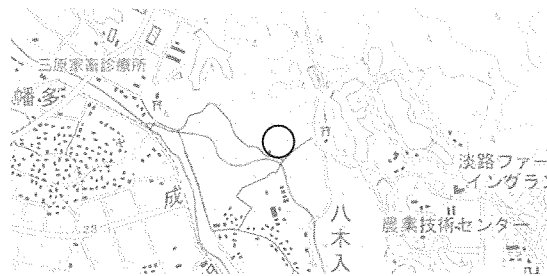
平面・層序図



出土遺物

3. 入田稲荷前遺跡 - 3次調査 -

所在地 八木入田字大下田外
事業名 大榎列古長田線道路新設事業
担当者 的崎薫・山崎裕司
種別 本発掘調査
調査期間 平成30年6月1日～平成31年2月18日
調査面積 1,377.4㎡ (延べ1,761.8㎡)



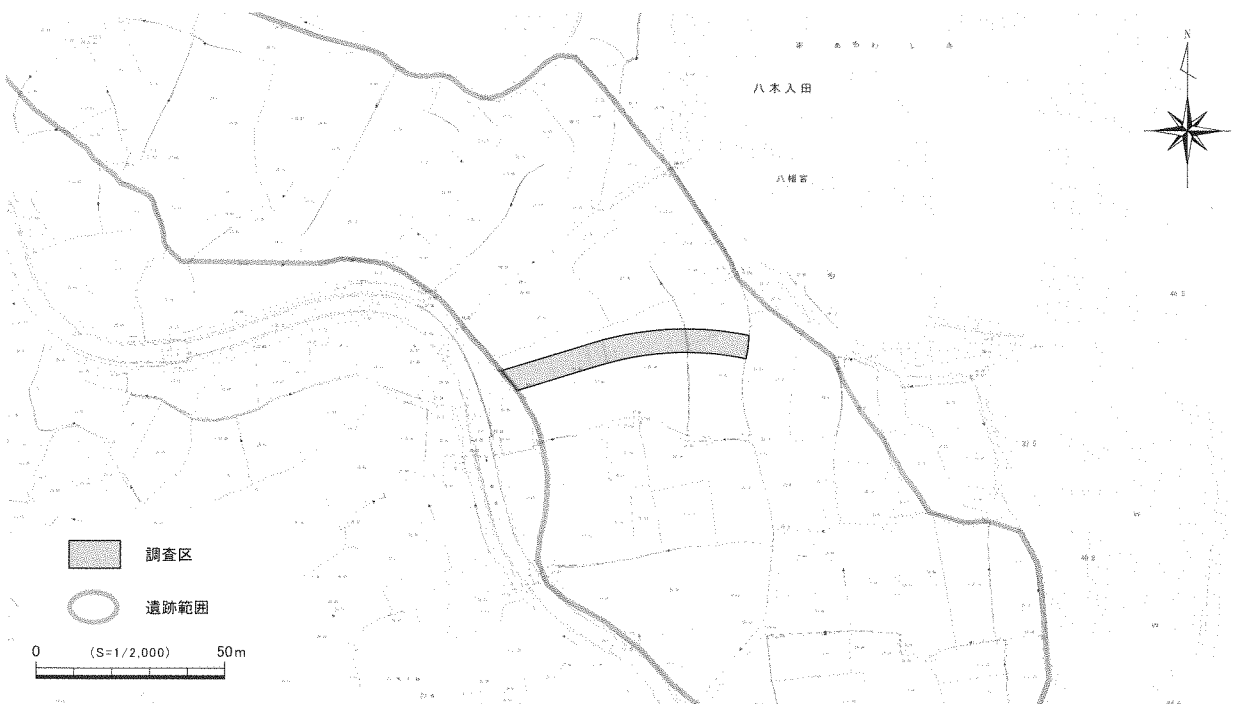
調査の位置

1. 調査内容

入田稲荷前遺跡は淡路島最大の平野である三原平野北東部の標高22～34mを測る養宜川の右岸、河岸段丘の低位段丘面に広がる遺跡である。調査地の北端で養宜川が成相川に合流し、周辺には姥畑遺跡・入田山古墳群・上八木古墳等多くの遺跡が周知の遺跡として包蔵されている。

本調査は経営体育成基盤促進事業とともに計画されている大榎列古長田線市道新設事業に伴って行った本発掘調査である。平成25年度に分布調査を行った結果、広範囲にわたって遺物の散布が認められた。地下の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成28・29年度に遺跡範囲確認調査を行い、縄文(前期・中期・後期)・弥生(中期前葉・中期後葉・後期～終末期)・飛鳥・奈良・平安初頭・鎌倉時代の遺跡であることがわかった。この調査成果をもとに、本発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

調査区は、事業計画に沿って幅11mで設定し、1～10区までは東西方向の直線、11～25区は緩やかに弧を描いて南に曲がって行く。調査区周辺では圃場整備に伴う本発掘調査が行われ、道路の北側に沿って排水路部分(水路7・水路8)の調査を行っている。



調査区設定図

調査の結果、弥生時代の竪穴住居3棟、飛鳥時代の掘立柱建物7棟（建物23～29）、中世の掘立柱建物22棟（建物1～22）のほか、溝や土坑などを確認した。遺構の検出は、後世の田圃の造成などによって削平を受けており、11～18区にかけてのみ2面調査を行うことができた。

基本層序として、黄褐色系粘砂質土（床土）→褐灰色系粘砂質土（包含層①）→黒褐色系粘質土（包含層②）→黄褐色系粘質土、または礫混黄褐色～黒褐色系粘質土（地山）となる。11区～18区では包含層②上面を第1遺構面として中世の遺構を確認できたが、その他の地区では包含層②が後世の削平などによって堆積が確認されず、地山で全ての時代の遺構を確認している。2面調査を行った11～18区では、弥生時代～古代の遺構を地山で確認した。以下、主な遺構について述べる。

竪穴住居1 直径9.5～10.0mの円形を呈する大型住居で、水路7に続く。周溝はなく、中央土坑と支柱穴と考えられる10～11基の浅い遺構を確認した。住居の深度は約0.45mで、埋土はレンズ状に堆積し、大きく3層に大別できる。上層は灰黄褐色砂質土、中層は黒褐色細砂質土（下部に多く礫を含む）、下層はにぶい黄褐色砂質土で礫が多く含まれていた。床面には不定形な被熱痕を数ヶ所確認したが、中央土坑は鉄器や鑄造に関連する遺物の出土はなく、鍛冶を行っていたという確定的な証拠は見つからなかった。

床面からは両面に使用痕のある32×24cm大の粒度の細かい砥石1が出土している。検出面（A面）には、断面が浅い皿状で幅4～6cmの筋痕が3カ所と玉磨き用と思われる幅1cmの使用痕が1筋確認できる。裏面（B面）には幅3～6cmの同様の筋痕が5カ所と側面には金属製品による7本の条痕が見られる。

住居埋土からは弥生時代後期末～終末期を中心として弥生土器2・3、中央土坑からは4が出土した。**竪穴住居3** 15～16区に位置する直径6.7～7.1m、深さ0.3mの円形住居である。中央土坑と5基の支柱穴、部分的に周溝を確認した。床面には炭化した木材を放射状に検出したことから、焼失住居と考えられる。

住居埋土からは長さ0.8cmのグリーントフ製と思われる管玉5や弥生時代後期後半～終末期を中心として弥生土器6～9が出土した。

竪穴住居4 18～19区に位置する復元直径8.2～8.4mの円形住居である。住居埋土が地山と酷似していたため、西半分は検出できなかった。直径1.0mの中央土坑と支柱穴を7基検出したが、本来なら10基程度であったと推測される。検出面では広範囲に焼土を確認したが、住居内での被熱なのかは不明である。

建物1 梁間2間以上×桁行2間以上の側柱建物で、調査区外に続く。1間の柱間は2.0mである。北側梁間の方位はN83.7°Eを示す。2m北側には建物に平行した柵列1があり、この建物に付随するものと考えられる。

建物2 梁間2間（2.8m）×桁行1間以上の建物で、調査区外に続く。1間の柱間は1.4mで、西側には柱間が狭い柱穴があることから、庇付きの建物と考えられる。北側梁間の方位はN73.9°Eを示す。

建物3 四面庇の総柱建物で、身舎部分は梁間2間（4.0m）×桁行3間（6.6m）、1間の柱間は梁間が2.0m、桁行が1.7～2.8mである。庇部分も合わせると梁間5.6m×桁行8.1mであり、面積は45.36㎡と調査区の中世建物の中で一番敷地面積が大きい。南側桁行の方位はN69.4°Eを示す。

柱穴29から土師器小皿10、柱穴42から須恵器皿11、柱穴148から土師器小皿12が出土しており、14世紀頃と推定される。

建物4 2間(4.2m)×2間(4.3m)の建物であるが、南側の中央の柱を確認できなかった。1間の柱間は2.1～2.2mである。西側柱筋の方位はN15.5°Wを示す。

柱穴80から土師器皿13と須恵器皿14、柱穴81から須恵器皿15と土師器小皿16が出土しており、14世紀頃と推定される。柱穴73からは鎬連弁文青磁碗17が出土している。

建物5 梁間3間(6.4m)×桁行4間(7.0m)の建物で、1間の柱間は梁間が1.7～2.8m、桁行が1.0～2.3mである。建物内部には間仕切柱と考えられる柱穴が見られる。建物3の柱穴を切っている。西側梁間の方位はN13.6°Wを示す。

柱穴58から青磁碗18、柱穴65から土師器皿19が出土しており、14世紀以降と推定される。

建物6 水路7に続く梁間2間(北側5.3m・南側4.4m)×桁行4間(西側9.9m・東側9.4m)の南側の梁間が狭い総柱建物で、1間の柱間は梁間が2.0～2.9m、桁行が1.7～2.9mである。西側桁行の方位はN14.8°Wを示す。南側の柱は溝220によって切られている。

柱穴5から13世紀末～14世紀初頭頃と思われる瓦器塚の底部20が出土している。

建物7 梁間1間(2.6m)×桁行2間(4.2m)の建物で、1間の柱間は桁行が2.0・2.2mである。北側桁行の方位はN75.1°Eを示す。

柱穴255から須恵器皿21、柱穴227から土師器皿22が出土しており、13世紀代と思われる。

建物8 梁間2間(3.4m)×桁行2間(5.1m)の水路7に続く側柱建物で、1間の柱間は梁間が1.3～2.1m、桁行が2.4・2.7mである。南側桁行の方位はN70.8°Eを示す。

建物9 梁間2間(西側4.3m・東側4.8m)×桁行3間(北側5.7m・南側5.9m)の水路7に続く総柱建物で、1間の柱間は梁間が2.1～2.4m、桁行が1.6～2.1mである。北側桁行の方位はN74.3°Eを示す。

建物10 梁間1間(1.7m)×桁行5間(11.0m)以上の水路7に続く長細い建物で、桁行の1間の柱間は、2.0～2.3mである。東側桁行の方位はN17.1°Wを示す。

建物11 梁間2間(5.1m)×桁行3間(6.8m)の水路7に続く側柱建物で、1間の柱間は梁間が2.5・2.6m、桁行が2.2・2.3mである。東側桁行の方位はN15.8°Wを示す。

建物12 梁間2間(4.0m)×桁行3間(6.3m)の側柱建物で、1間の柱間は梁間が1.9～2.1m、桁行が1.9～2.5mである。北側桁行の方位はN76.4°Eを示す。

建物13 水路7に続く建物と推測されるが、水路7の10～16区では遺構をほとんど検出できていないため、全体の規模は不明である。梁間2間(3.8m)×桁行2間以上の側柱建物で、1間の柱間は梁間が1.5・2.3m、桁行が1.4・1.7mである。西側桁行の方位はN19.6°Wを示す。

建物14 梁間2間(3.2m)×桁行3間(6.1m)の総柱建物で、西側には庇、もしくは軒支柱が付く。1間の柱間は梁間が1.6m、桁行が両端は2.1m、真ん中が1.9mである。西側桁行の方位はN11.3°Wを示す。

建物15 梁間2間(3.5m)×桁行3間(西側4.5m・東側4.8m)の総柱建物で、1間の柱間は梁間が1.4～1.9m、桁行が1.4～1.7mである。西側桁行の方位はN9.7°Wを示す。

建物16 梁間2間(西側3.5m・東側3.3m)×桁行2間(北側4.6m・南側4.4m)の総柱建物で、1間の柱間は梁間が1.4～1.7m、桁行が1.6～1.8mである。東側梁間の方位はN15.5°Wを示す。

建物17 梁間2間(3.7m)×桁行3間以上の総柱建物で、1間の柱間は梁間が1.8・1.9m、桁行が2.7～3.4mである。西側桁行の方位はN18.8°Wを示す。

柱穴 550 からは三足付きの羽釜 23・鍋 24、柱穴 469 からは瓦器壙 25、柱穴 543 からは須恵器皿 26・土師器小皿 27 等、13 世紀頃の土器が出土している。

建物 18 梁間 2 間 (3.5 m) × 桁行 4 間 (6.6 m) の建物で、1 間の柱間は梁間が 1.5 ～ 2.0 m、桁行は北側 2 間が狭く 1.0 ～ 1.2 m、南側 2 間は 2.2 m である。東側桁行の方位は N20.5° W を示す。

柱穴 511 の掘り方の境界付近から、蛇紋岩製紡錘車 28 が出土している。上面の直径 3.5 cm、下面の直径 2.1 cm、厚さは 1.6 cm である。上面には外縁から右回りの櫛歯文帯→左回りの櫛歯文帯→9 連の 2 重弧文となる。2 重弧文の間には斜行櫛葉文が充填されている。下面には放射状に直線文が施文されている。側面には下向鋸歯文帯の下に斜行櫛葉文帯が巡る。上面の文様は弥生時代終末期における小形仿製鏡の文様構成を模したかのように見えるが、製作時期は 6 ～ 7 世紀の範疇と想定されることから、周辺からの流れ込みと考えられる。また、使用当時の削痕や擦痕・欠けが多く見られる。このほかに柱穴 477 からは瓦器壙 29・土師器小皿 30 等、13 世紀頃の土器が出土している。

建物 19 梁間 2 間 (3.5 m) × 桁行 2 間 (4.1 m) の総柱建物で、1 間の柱間は梁間が 1.6 ～ 1.9 m、桁行が 1.4 ・ 2.7 m である。北側梁間の方位は N66.0° E を示す。

柱穴 507 からは瓦器壙 31 等、13 世紀頃の土器が出土している。

建物 20 1 間以上 × 3 間 (6.8 m) の調査区外に続く建物と推測される。1 間の柱間は 2.2 ～ 2.3 m である。北側柱筋の方位は N79.2° E を示す。

建物 21 1 間以上 × 3 間 (5.3 m) の建物で、調査区外に続く。1 間の柱間は 1.7 ・ 1.9 m である。北側柱筋の方位は N78.4° E を示す。

建物 22 梁間 2 間 (3.2 m) × 桁行 3 間 (5.4 m) の総柱建物で、1 間の柱間は梁間が 1.5 ・ 1.7 m、桁行が 1.6 ～ 2.0 m である。南側桁行の方位は N72.8° E を示す。

柱穴 672 からは瓦器壙 32、柱穴 667 からは土師器小皿 33 等、13 世紀頃の土器が出土している。

建物 23 梁間 1 間 (1.5 m) × 桁行 2 間 (3.6 m) の建物で、1 間の柱間は梁間が 1.5 m、桁行が 1.8 m である。南側桁行の方位は N77.6° E を示す。

建物 24 梁間 3 間 (6.9 m) × 桁行 3 間 (北側 8.7 m ・ 南側 9.1 m) の排水路 7 に続く側柱建物で、1 間の柱間は梁間の中央が 2.5 m で両脇が 2.2 m、桁行が 2.7 ～ 3.5 m である。古代の建物の中では、一番面積が大きく、61.41 m² である。南側桁行の方位は N75.5° E を示す。

建物 25 梁間 2 間 (4.0 m) × 桁行 3 間 (6.4 m) の建物で、1 間の柱間は梁間が 2.0 m、桁行の中央が 2.8 m で両脇が 1.8 m である。東側桁行の方位は N15.2° W を示す。柱穴の規模が大きく、深度も深い。また、妻柱に筋を揃えた屋内棟持柱の可能性のある柱穴を確認した。このような構造の建物は、豪族居館や官衙建物に採用されることが多い。

柱穴 859 からは須恵器杯 34 蓋、柱穴 856 からは須恵器杯 35 身等、7 世紀の須恵器と多量の製塩土器が出土している。

建物 26 排水路 7 に位置する梁間 1 間 (1.5 m) × 桁行 2 間 (4.3 m) の建物で、1 間の柱間は桁行が 1.7 ・ 2.6 m である。北側桁行の方位は N85.6° E を示す。

建物 27 梁間 2 間 (2.8 m) × 桁行 2 間 (北側 4.0 m ・ 南側 4.2 m) の排水路 7 に続く側柱建物で、1 間の柱間は梁間が 1.2 ～ 1.6 m、桁行が 2.0 ・ 2.1 m である。北側桁行の方位は N85.9° W を示す。

建物 28 梁間 2 間 (3.8 m) × 桁行 3 間と推測される側柱建物で、1 間の柱間は梁間が 1.9 m、桁行が 1.7 ～ 2.0 m である。南側梁間の方位は N87.2° W を示す。

建物 29 梁間 1 間 (2.5 m) × 桁行 1 間 (3.2 m) 以上の側柱建物である。北側梁間の方位は N2.5° E を示す。

柱穴 164 からは須恵器杯 36、柱穴 167 からは須恵器蓋 37・須恵器皿 38 等、8 世紀の須恵器が出土している。

土坑 1 1～2 区に位置する直径 0.66～0.74 m、深さ 0.24 m の円形の土坑である。建物 1 や建物 2 と関係すると思われる。

埋土から 14 世紀頃と思われる土師器皿 39、土師器小皿 40 が出土した。

土坑 2 4～5 区に位置する直径 0.82～0.9 m、深さ 0.47 m の円形の土坑である。

埋土から 14 世紀頃と思われる古瀬戸鉢 41、土師器皿 42・43、土師器小皿 44・45、古銭 2 点 46 (皇宋通寶 1038 年初鑄)・47 (元祐通寶 1086 年初鑄) と鉄製鎌 48 等が出土した。鉄製鎌は全長 16.5 cm で、茎部の先端は鍵状に曲がっている。鉄製の刃物は地鎮に使用される事例があることから、地鎮的な性格の遺構と考えられる。また土坑 2 は建物 3 の北東部に位置し、市内の上久保遺跡でも身舎 2 × 3 間で四面庇の総柱建物の北東部から土師器皿・土師器小皿が出土する土坑が確認されており、建物 3 と関係する可能性が高い。(『上久保遺跡』南あわじ市教育委員会 2016)

土坑 4 3～4 区に位置する 1 辺約 2.5 m、深さ 0.4 m の方形土坑である。

埋土から 14 世紀頃と思われる土師器皿 49・50、土師器小皿 51・52、須恵器皿 53、須恵器鉢 54・55、有孔土錘 56、滑石製温石 57、古銭 (紹聖元寶 1094 年初鑄) 等が出土した。

中層には炭を多く含む薄い層が全体に広がっており、焼土を含む。市内では高萩遺跡でも建物と関連して埋土に焼土を含み、古銭が出土した方形土坑の例があり、隣接する建物群と関係する祭祀土坑の可能性が高い。(『高萩遺跡』南あわじ市教育委員会 2011)

土坑 28 5 区に位置する直径 0.3～0.54 m、深さ 0.09 m の小土坑で、土坑 89 と建物 4 の柱穴を切っている。

埋土から 14 世紀以降と思われる土師器皿 58 が出土した。

土坑 45 5 区に位置する直径 0.6 m、深さ 0.36 m の円形の土坑である。

埋土から 14 世紀以降と思われる土師器小皿 59 が出土した。

土坑 74 4 区に位置する直径 0.36～0.38 m、深さ 0.31 m の小土坑である。

埋土から 14 世紀頃と思われる土師器小皿 60 が出土した。

土坑 89 5 区に位置する小土坑である。土坑 28 に切られている。

埋土から 14 世紀頃と思われる土師器小皿 61、土師器皿 62 が出土した。

土坑 102 3 区に位置する直径 0.23 m、深さ 0.1 m の小土坑である。

埋土から 13 世紀末～14 世紀初頭頃の土師器小皿 63、土師器皿 64、瓦器埴 65 が出土した。

溝 220 5～6 区に位置する幅 0.8～1.2 m の L 字状の溝である。深さについて北東端は浅いが、南西部は 0.34 m と深くなる。

埋土から輸入陶磁器 66、土師器小皿 67・68、土師器皿 69・70、備前焼鉢 71 等、13～14 世紀代の遺物が含まれていた。

土坑 228 6 区に位置する直径 0.38～0.45 m、深さ 0.6 m の小土坑である。

埋土から 14 世紀以降と思われる土師器小皿 72、土師器皿 73 が出土した。

土坑 250 6 区に位置する直径 0.35～0.52 m、深さ 0.51 m の小土坑である。

埋土から14世紀頃と思われる土師器皿74、須恵器皿75が出土した。

土坑278 5区に位置する1.3×1.12m、深さ0.44mの円形の土坑である。

15世紀頃と思われる須恵器鉢76、砥石77等が出土している。

中層に薄い炭層が広がっており、焼土を含む等、土坑4と同じような状況を示していることから、隣接する建物群と関係する祭祀土坑の可能性が考えられる。

土坑553 13区に位置する直径0.18～0.21m、深さ0.27mの小土坑である。

埋土から13世紀頃と思われる須恵器鉢78が出土した。

土坑583 14区に位置する直径2.34～2.08m、深さ0.28mの六角形に近い土坑である。

埋土には直径5～20cm大の礫を多く含み、人為的に投げ込まれたものと考えられる。焼土が含まれる。礫に混じって、瓦器壙79・80、土師器小皿81、土師器皿82～84、須恵器皿85～87、刻花文の青磁等、13世紀を中心とする土器が出土し、瓦器壙は13世紀でも新しい様相を示す。

焼土を含む等から、隣接する建物群と関係する祭祀土坑の可能性が考えられる

土坑678 14区に位置する直径0.2～0.26m、深さ0.09mの小土坑である。位置的に建物22と関係する可能性が高い。

埋土から14世紀頃と思われる土師質羽釜88が出土した。

溝938・951 建物23～25と平行に走る幅2.2～4.0m、深さ0.34mの溝である。

土師器・須恵器・製塩土器等、飛鳥時代の遺物が出土している。

溝950 南東から北西方向に流れる幅2.2～4.0m、深さ0.66mの溝である。

弥生時代後期末～終末を中心とする遺物89～100が大量に出土した。中層には弥生時代終末期の土器、下層には弥生時代中期後葉の遺物が含まれていた。

2. まとめ

本発掘調査によって弥生時代後期～中世の遺構を確認した。

[弥生時代]

竪穴住居を3棟確認した。竪穴住居1・3からは弥生時代後期後半～終末期の出土遺物があり、竪穴住居4もほぼ同時期と思われる。竪穴住居1は、鐘原遺跡(復元径13m)・木戸原遺跡(11.2m)に次ぐ大きさの円形住居である。このような大型住居は、工房などとして使用されることが多く、床面の比熱痕から鉄器工房の可能性も考えられたが、鉄器は確認できなかった。1区の調査区外では、長さ1.7cm・幅1.1cmの翡翠の勾玉101を採取しており、竪穴住居1から砥石が出土していることから、関係する遺物の可能性が高い。

溝950からは竪穴住居と同時期の遺物の他、弥生時代中期後葉の遺物も出土しており、近辺にこの時期の遺構が存在する可能性が考えられる。

[飛鳥～奈良時代]

東側の建物23～28が飛鳥時代で西側の建物29が奈良時代と考えられる。①群：建物23～25と②群：建物26～28の柱筋がそれぞれ同じような方位を取る。また溝938・951も方位から判断して①群の可能性が高い。周辺の調査では、畿内産土師器や帯金具・円面硯・瓦など、官衙的要素の遺物が出土し、建物24・25は柱穴が大きく深いことから、豪族や官衙的な建物の可能性がある。建物25以外は出土遺物が少なく、時期がわかりにくい、②群が先行する可能性が高い。

[中世]

調査区西側に分布する掘立柱建物の建物 1 ～ 22 が中世と考えられる。

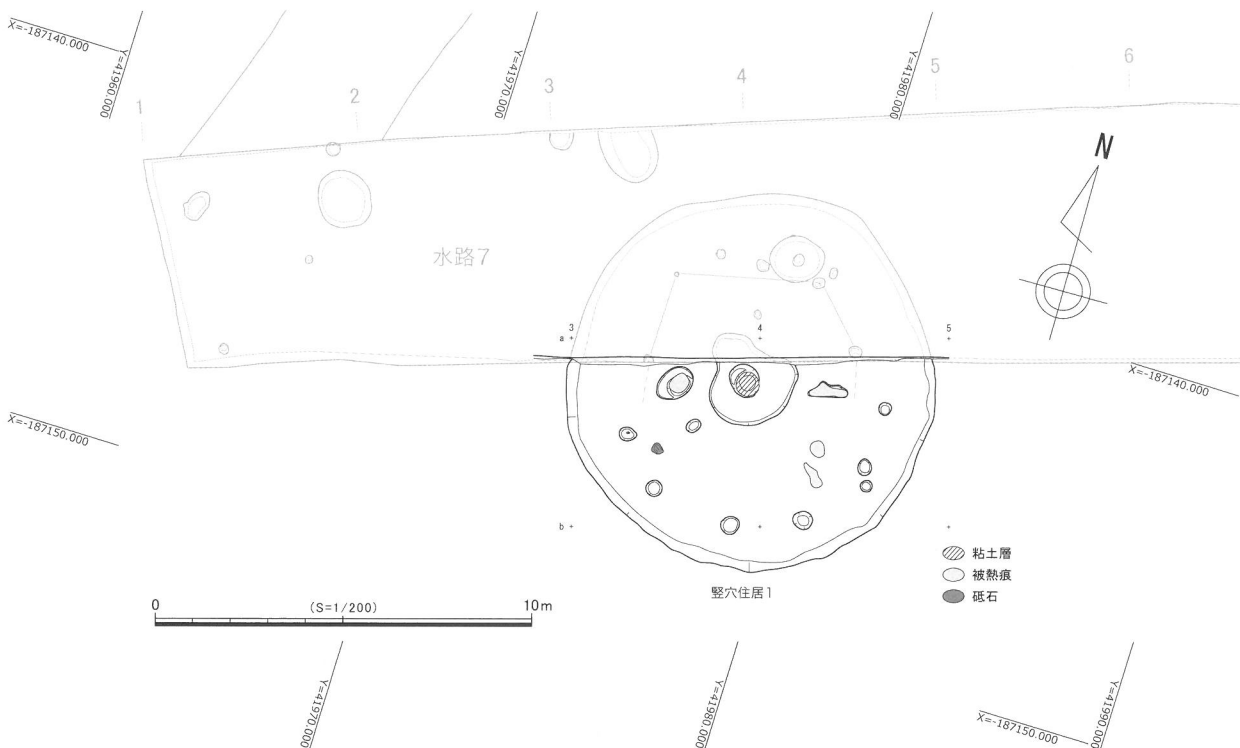
中世の建物群については、大規模な建物を含む①群：建物 3 ～ 8 と②群：建物 13 ～ 22 に分けることができ、全体的には 13 世紀代を中心とする②群から 14 世紀以降の①群へ、中心的な建物が移り変わると推定される。

①群については、建物 5 が建物 3 の柱穴を切っていること、出土遺物から建物 3 ～ 5 が 14 世紀以降、建物 6 ・ 7 が 13 世紀に遡る可能性があることから、建物 6 ・ 7 → 建物 3 → 建物 5 の変遷が考えられる。また建物 3 ・ 5 ・ 6 は入田稲荷前遺跡の中世建物の中でも大規模で同じような規模であることから、集落の中心的な建物であり、建て替えを行ったものと考えられる。特に建物 3 は四面庇建物であり、他の建物より格式の高い建物と言える。

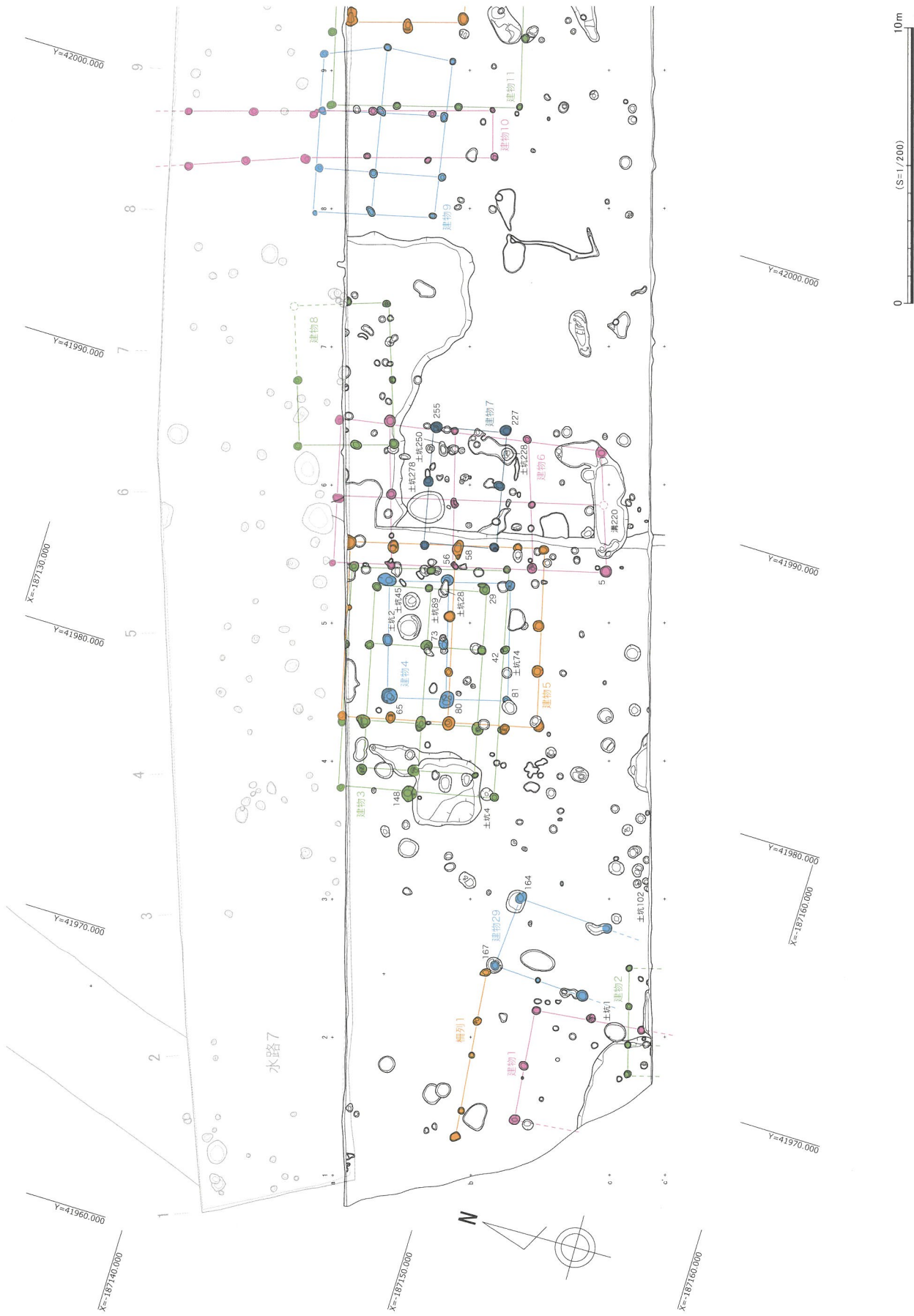
また土坑 2 は建物 3 と関係する地鎮遺構と考えられる。その他の土坑 4 ・ 28 ・ 45 ・ 74 ・ 89 ・ 228 ・ 250 ・ 278 と溝 220 は、位置的に①群に属する可能性が高く、このうち土坑 4 ・ 278 は祭祀遺構の可能性が考えられる。

②群については、方位からさらに② - a 群：建物 13 ・ 16 ・ 17 ・ 18 ・ 19 ・ 22、② - b 群：建物 14 ・ 15 ・ 20 ・ 21 に分けられるが、② - b 群の出土遺物が少なく前後関係は不明である。② - a 群の建物 16 ～ 19 は重なり合うため、さらに 4 時期以上にわかれる。柱穴の切りあいは無く、柱穴出土遺物では建物 17 の瓦器塚は建物 18 ・ 19 より古いと思われる。② - b 群も建物 14 ・ 15 が重なりあうため 2 時期以上にわかれる。

土坑 553 ・ 583 も②群と関係する土坑と考えられ、土坑 583 は祭祀土坑の可能性が高い。土坑 678 は位置的に建物 22 と対応する可能性が高い。(山崎)



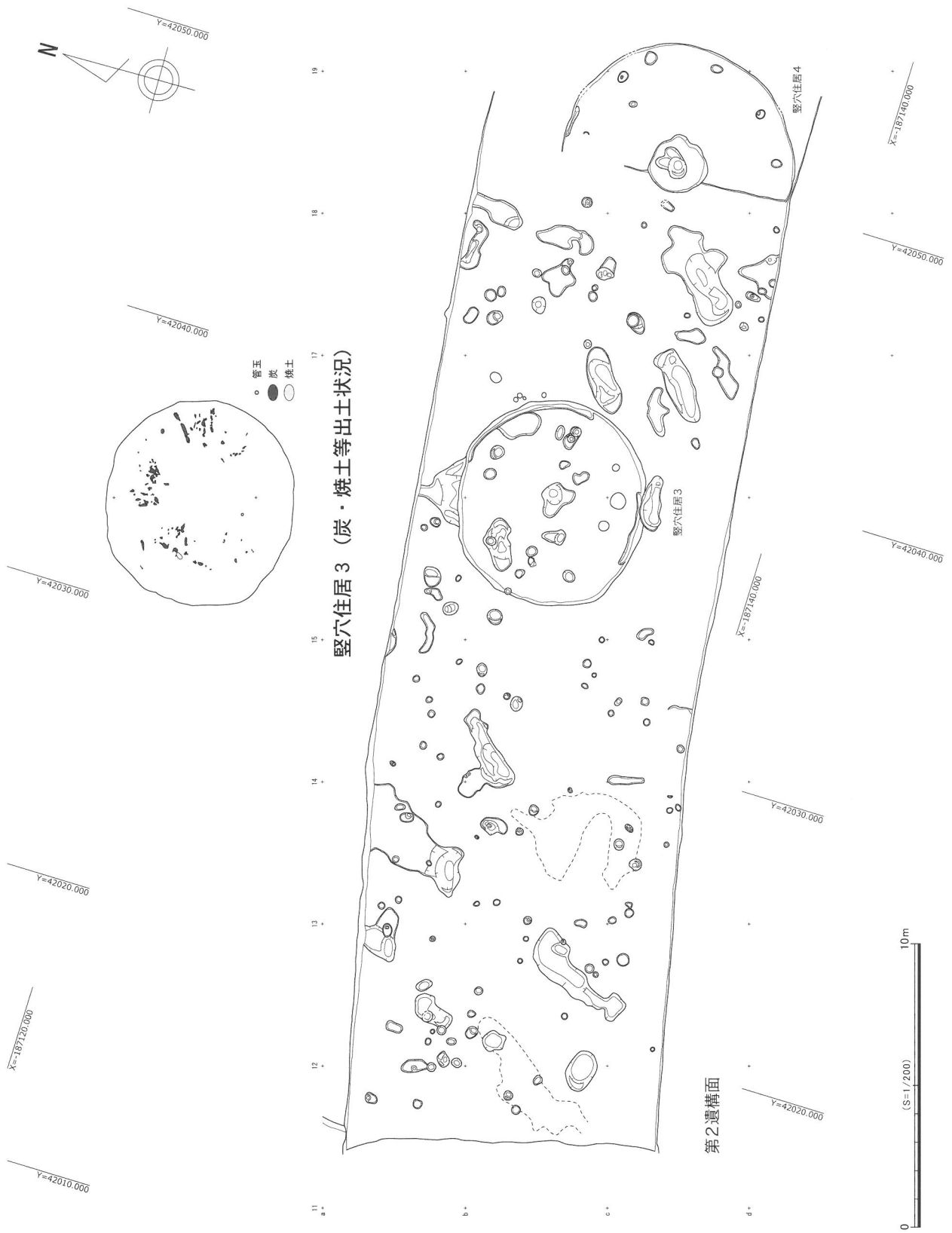
平面図 1 (弥生時代)



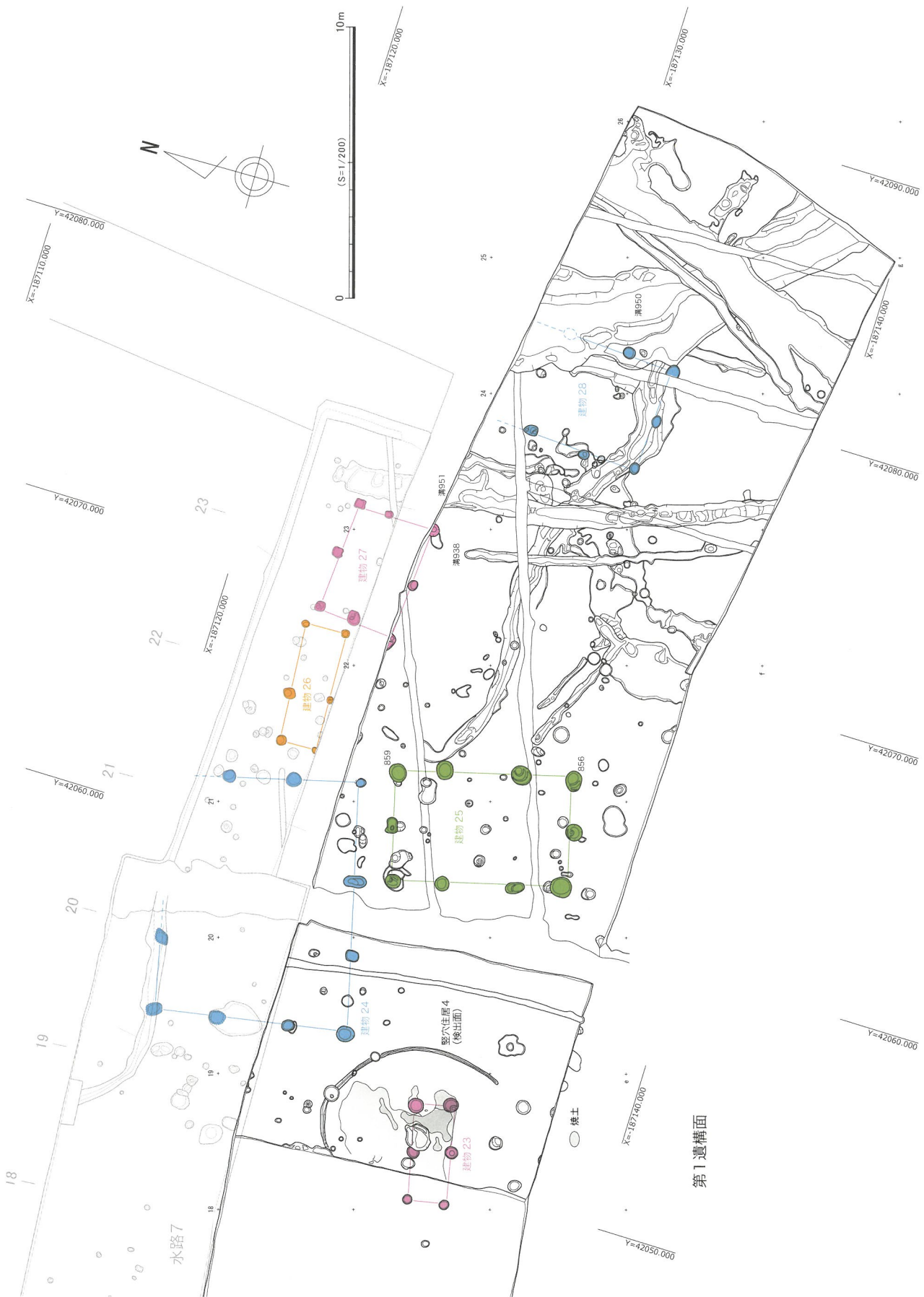
平面图 2 (古代~中世)



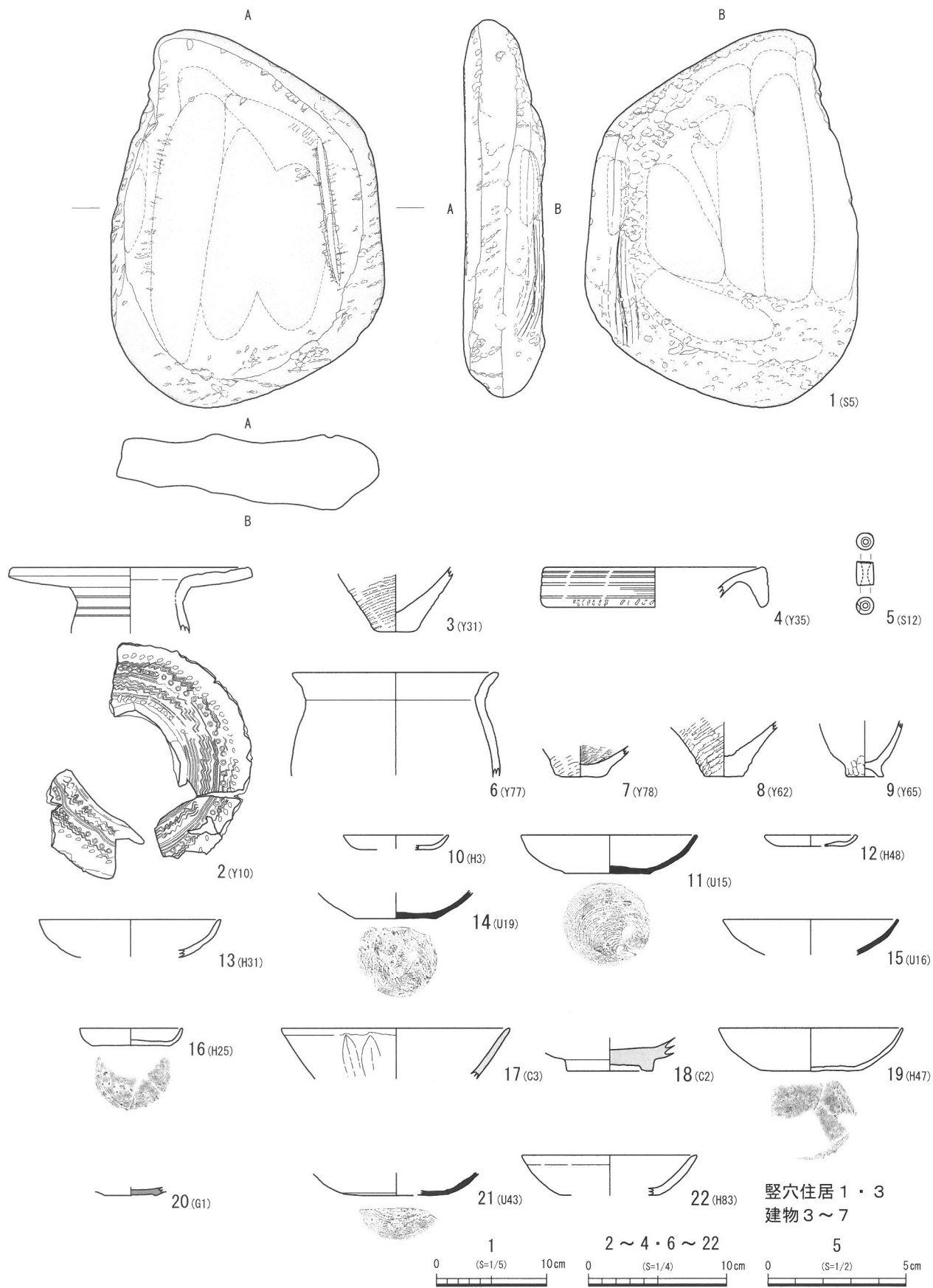
平面图 3 (中世)



平面図4 (弥生時代～古代)

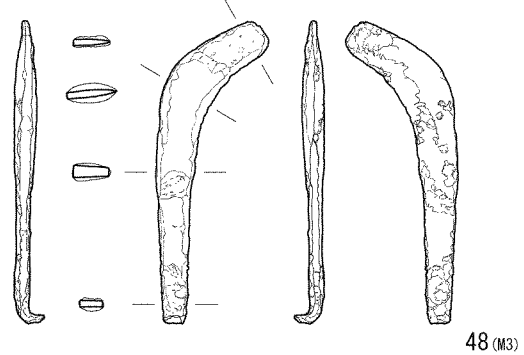
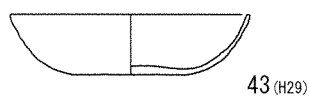
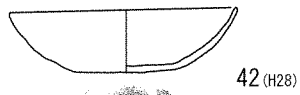
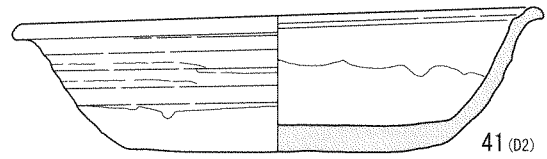
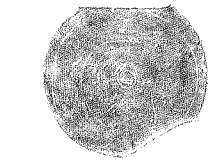
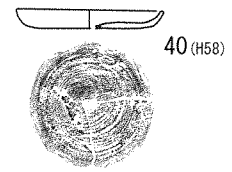
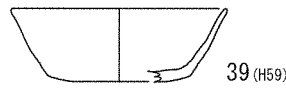
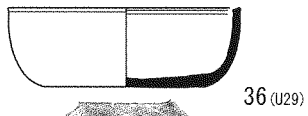
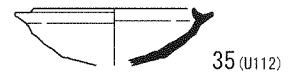
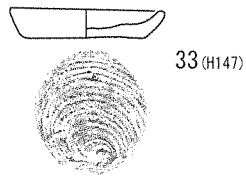
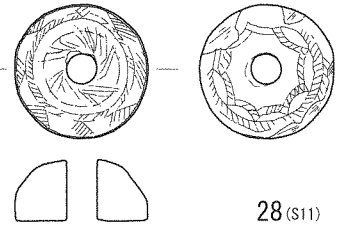
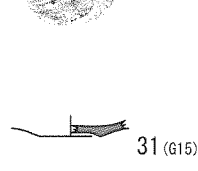
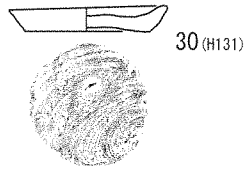
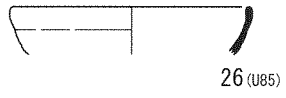
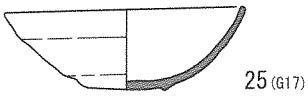
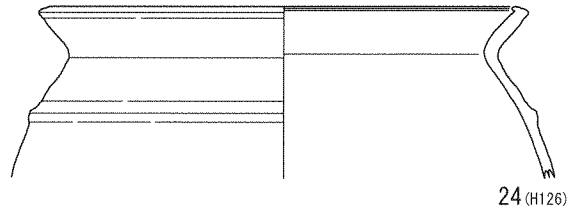
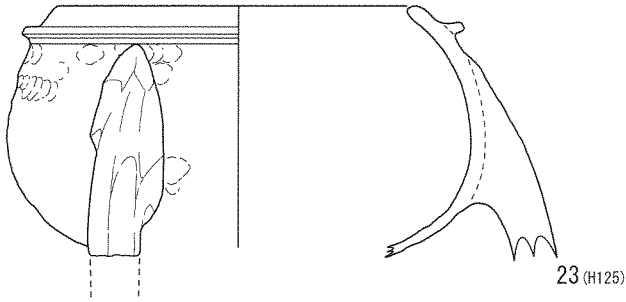


平面图 5 (弥生時代～古代)



竖穴住居 1・3
建物 3～7

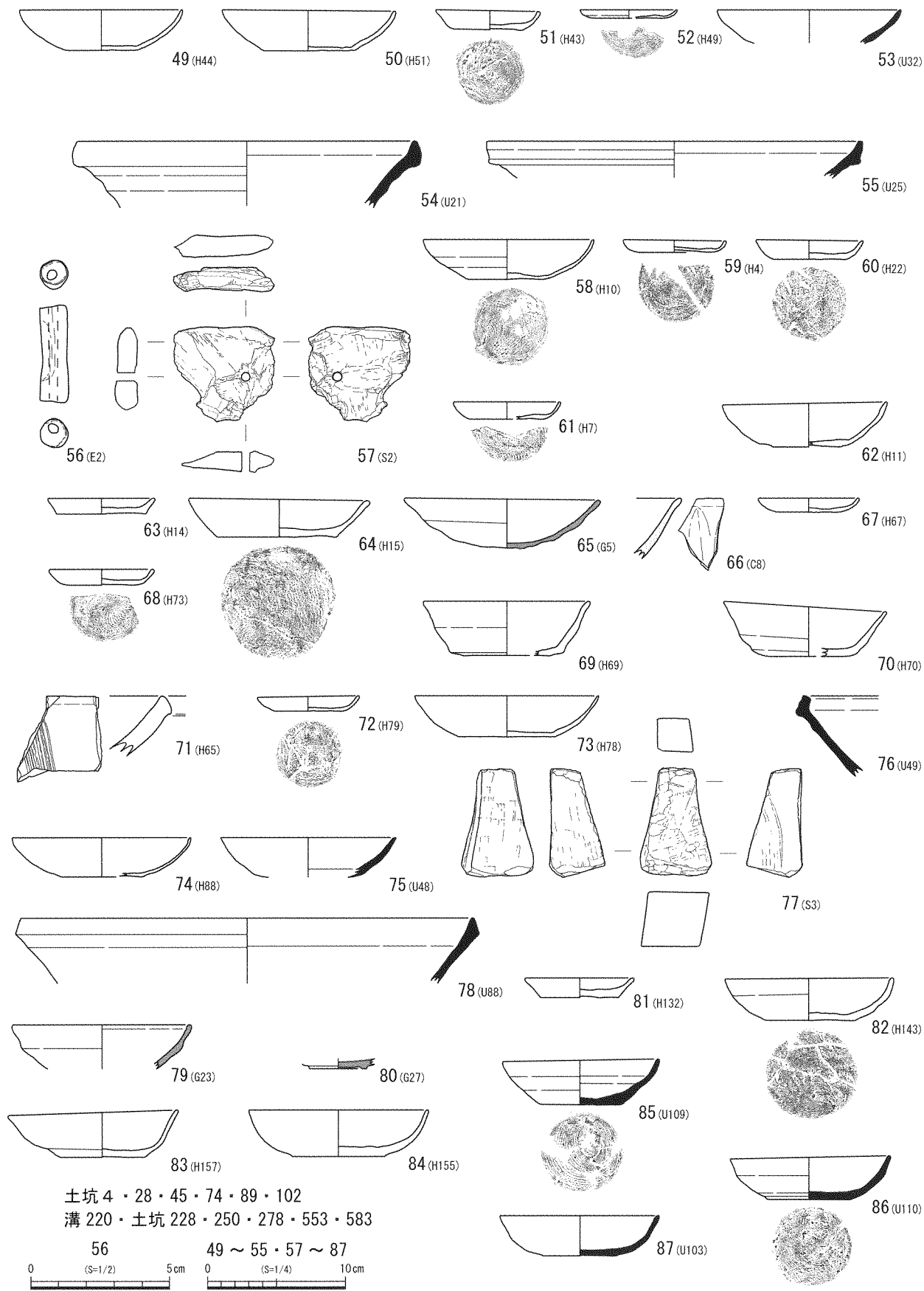
出土遺物 1



建物 17 ~ 19 · 22 · 25 · 29
土坑 1 · 2

23 ~ 27 · 29 ~ 45 · 48 28 · 46 · 47
0 (S=1/4) 10 cm 0 (S=1/2) 5 cm

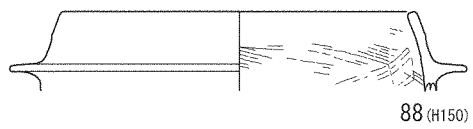
出土遺物 2



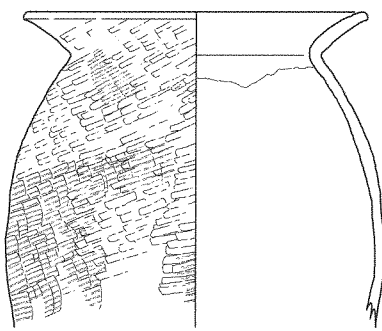
土坑 4・28・45・74・89・102
溝 220・土坑 228・250・278・553・583

56 (S=1/2) 5 cm
49 ~ 55・57 ~ 87 (S=1/4) 10 cm

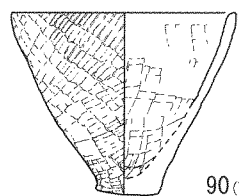
出土遺物 3



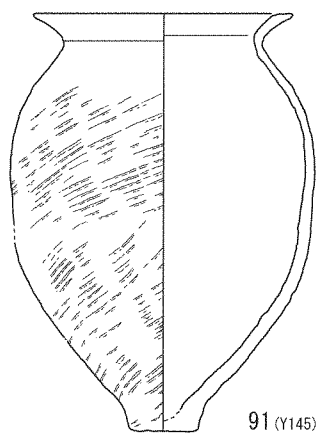
88 (H150)



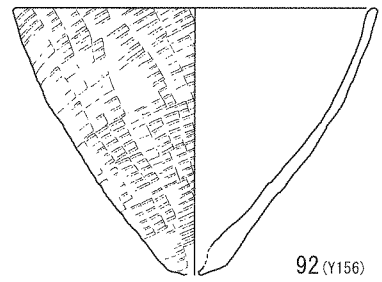
89 (Y160)



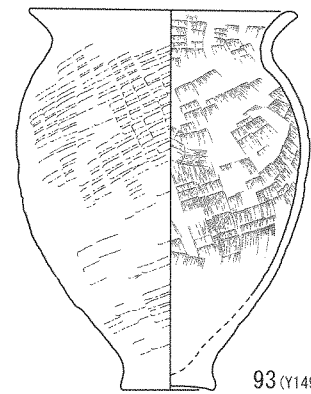
90 (Y183)



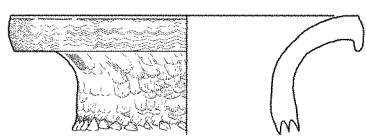
91 (Y145)



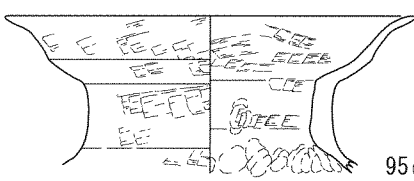
92 (Y156)



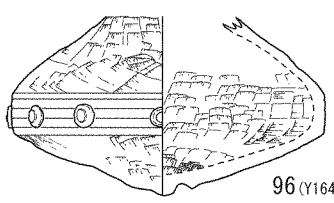
93 (Y149)



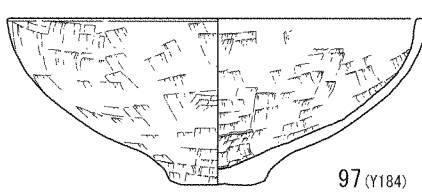
94 (Y152)



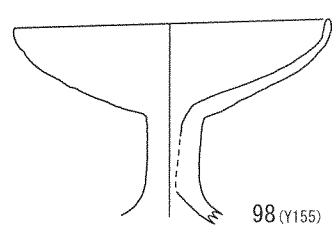
95 (Y188)



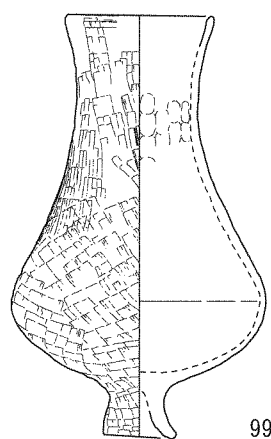
96 (Y164)



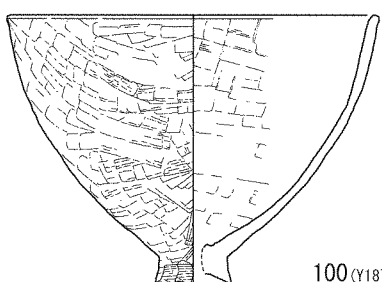
97 (Y184)



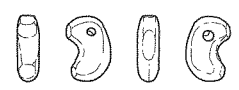
98 (Y155)



99 (Y180)



100 (Y187)

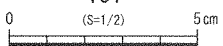
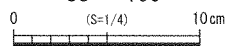


101 (S1)

土坑 678・溝 950・廃土

88 ~ 100

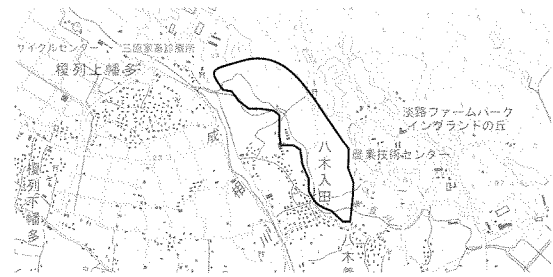
101



出土遺物 4

4. 入田稲荷前遺跡 - 4次調査 -

所在地 八木入田字竹ヶ下外
 事業名 経営体育成基盤整備事業（養宜地区）
 担当者 的崎薫
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成30年6月5日～平成31年2月18日
 調査面積 調査面積 10,468㎡

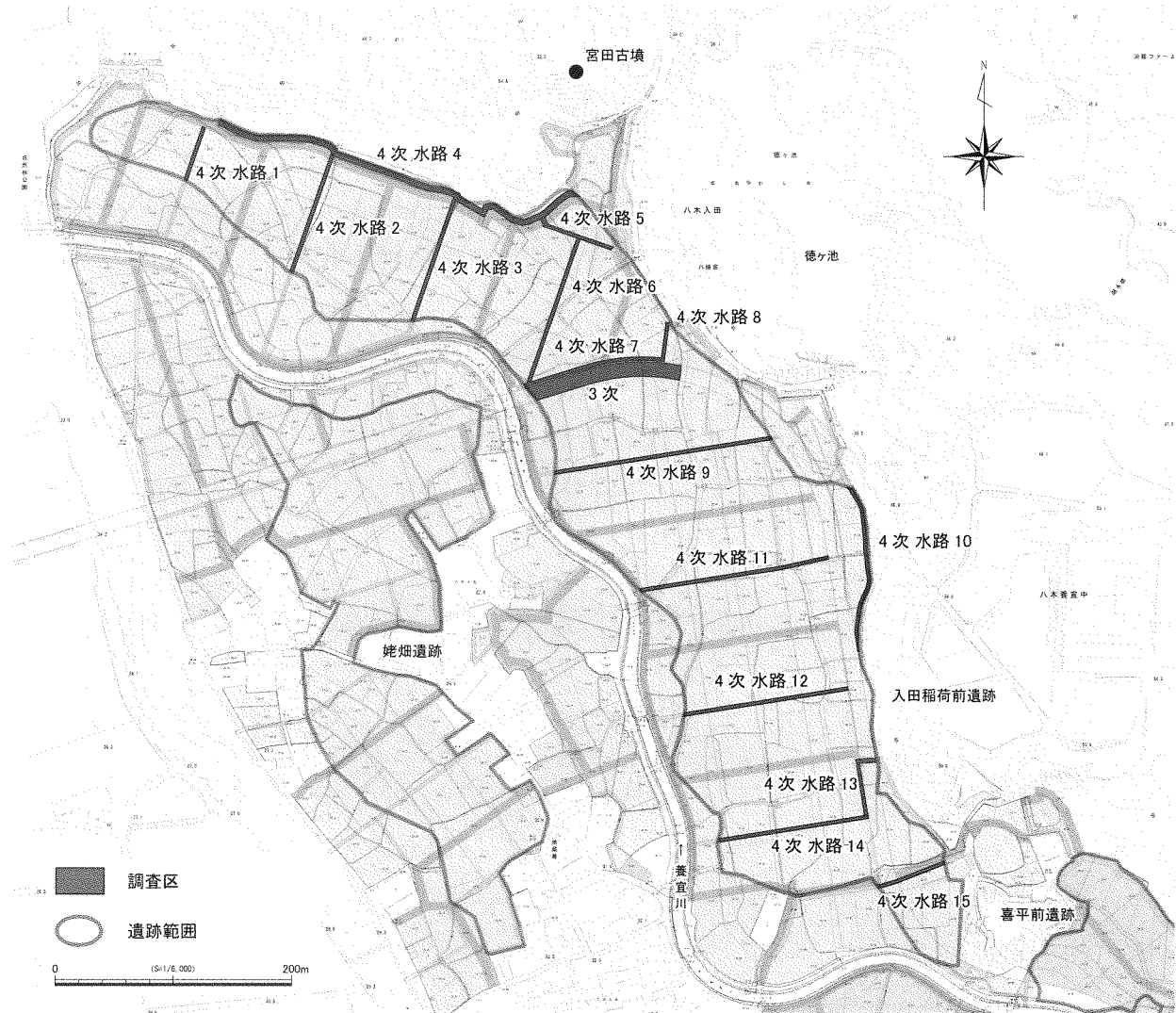


調査の位置

1. 調査内容

本調査は、八木入田地区で計画されている県営圃場整備事業（養宜地区）に伴う調査である。

調査地は、三原平野北東部の南東～北西方向に傾斜する水田などからなり、南・西側には養宜川が流れる。調査は平成28・29年度に行った確認調査結果に基づき、地下の遺跡が破壊される排水路部分の本発掘調査を重機・人力併用で進めて行った。以下調査区の概要を記す。



調査区設定図

[水路1]

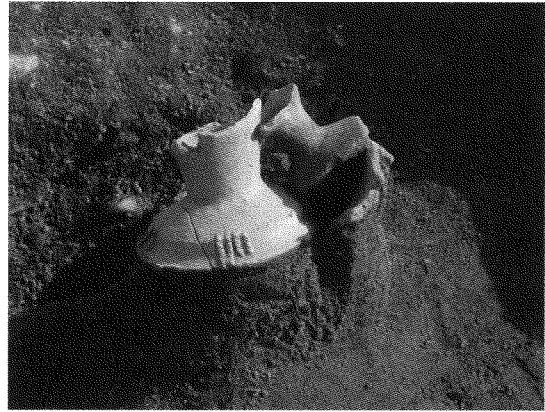
調査地の北西部に位置する調査区で調査面積 127 m²。

自然流路NR 1・2などの遺構が確認できた。NR 1は弥生時代～古代、NR 2からは弥生時代後期～終末期の遺物がややまとまって出土している。本調査区周辺は、遺構密度が低く居住域ではなかったと考えられる。

[水路2]

調査地北部に位置する調査区で調査面積 315 m²。

自然通路や溝状の遺構を中心に確認した。その内調査区中央部のSD 2は幅 0.5～0.9 m、深さ 0.47 mの直線的な溝である。遺物は小片ではあるが土師器、須恵器などが出土しており、奈良時代と考えられる。また包含層から弥生時代終末期の淡路型器台の精製品が出土している。



水路2 淡路型器台出土状況（南から）

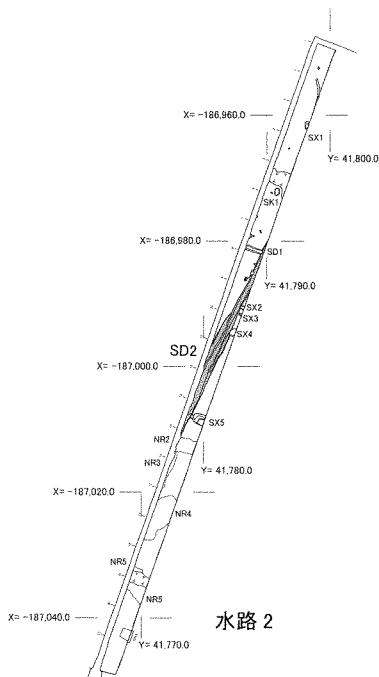
[水路3]

調査地北部に位置する調査区で調査面積 862 m²。

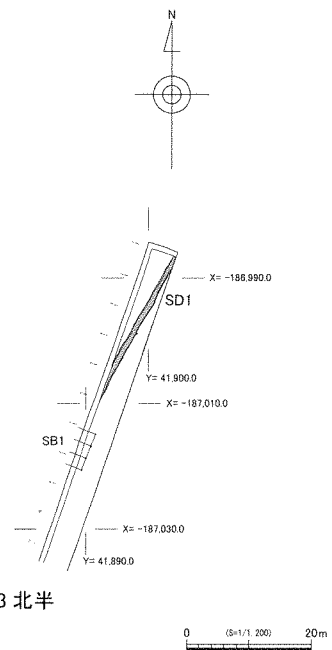
遺構面を2面確認した。第1面の遺構には中世の掘立柱建物3棟（SB 1～3）や古代の溝（SD 1）などがある。SD 1は幅 0.8～0.9 m、深さ 0.16 mの直線的な溝である。遺物は須恵器が出土しており、奈良時代と考えられる。先の水路2のSD 2と水路3のSD 1の距離が約 109 mとなり条里型水田の区画溝と考えられる。

[水路4]

調査地北西部の丘陵裾に位置する東西方向の調査区で調査面積 300 m²。



水路2



水路3 北半

水路2・3 平面図

遺構・遺物の密度が極めて低く、遺跡中心部から離れた地区と考えられる。

[水路5]

調査区中央北寄りの谷部に位置する東西方向の調査区で調査面積 300 m²。

水路4同様遺構・遺物の密度が低く、遺跡中心部から離れた地区と考えられる。

[水路6]

調査中央部の南北方向の調査区で調査面積 719 m²。

遺構面を2面確認した。第2面の遺構には南半部に弥生時代の竪穴建物4棟(SH1~4)などがある。平面形がいずれも円形もしくは不整円で規模はSH1は直径約7.1m、SH2は直径約6.3m、SH3は直径約6.4m、SH4は直径約6.6mを測る。出土遺物からSH1・3が終末期、SH2・3が中期後葉と考えられる。中期のSH2・3は大小が隣接して配置され、中央土坑両側に柱を持つ松菊里系住居と考えられる。

[水路7]

調査地中央部に位置する東西方向の調査区で3次調査区の北側に隣接する。調査面積 1,013 m²。

遺構面を2面確認した。第1面の遺構には中世の掘立柱建物5棟(SB6・8~11)、飛鳥時代の掘立柱建物3棟(SB24・26・27)などがある。

第2面の遺構には竪穴建物2棟(SH1・2)や土器棺墓1基(ST1)などがある。いずれの竪穴建物も平面形がほぼ円形で、規模はSH1は直径約9.5m、SH2は直径8.0mを測る。出土遺物から時期はいずれも弥生時代後期後葉~終末期と考えられる。ST1はSH1の西側8mに位置する土器棺墓で竪穴建物と同時期の終末期と考えられる。

[水路8]

調査区中央やや北寄りに位置する南北方向の調査区で調査面積 136 m²。

溝状の遺構を中心に遺構を確認した。基本的に弥生時代でSD1~3はほぼ同時期の弥生時代後期後半~終末期の遺物が出土している。最も規模が大きいSD3は幅3.1m、深さ0.7mを測る。

[水路9]

調査地中央部に位置する東西方向の調査区で、調査面積 1,196 m²。

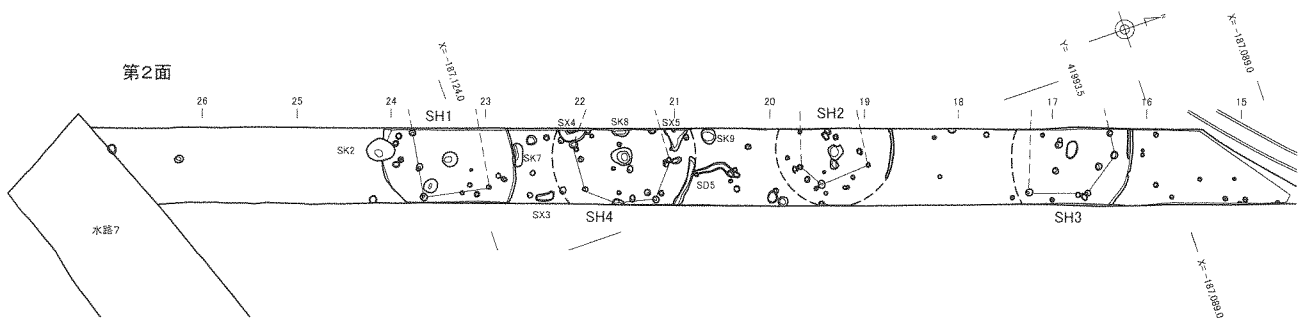
遺構面を2面確認した。第1面の遺構には中世の掘立柱建物10棟(SB1~10)や土坑などを確認した。建物は調査区内で大きく3ヶ所で分かれて重複する形で確認され、時期幅を有すると想定される。

調査区中央部にある土坑SK1・2・5は平面形が円形をなす土坑で土師器、須恵器などが出土している。特にSK2から出土した遺物は12世紀頃の比較的良好な資料と考えられる。



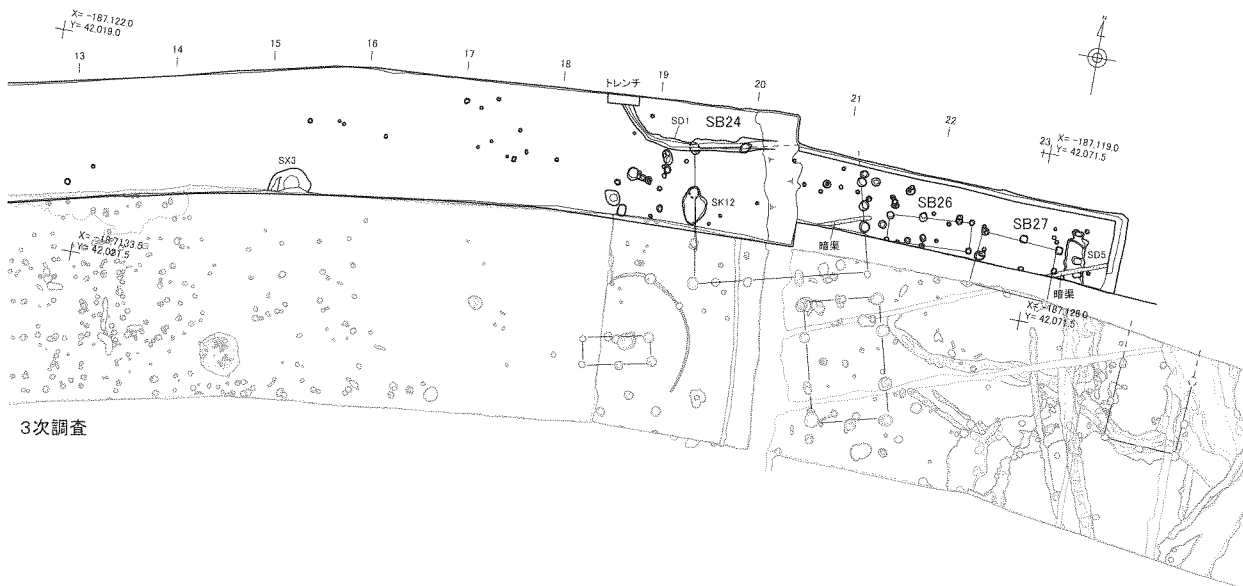
水路9 SK2遺物出土状況(北から)

第2面の遺構には竪穴建物4棟(SH1A・1B・1C、SH2)や自然流路(NR1)などがある。竪穴建物は調査区中央部で4棟が重複する形で確認できた。1A~1Cは弥生時代中期後葉~後期中葉を経て、後期後葉~終末期に建て替えが行われたと思われる。SH2はSH1Cと同時期か近い時期が想定される。調査区東端で確認したNR1は、幅7.5mを測る。水路の掘削深度の関係で完掘は行って

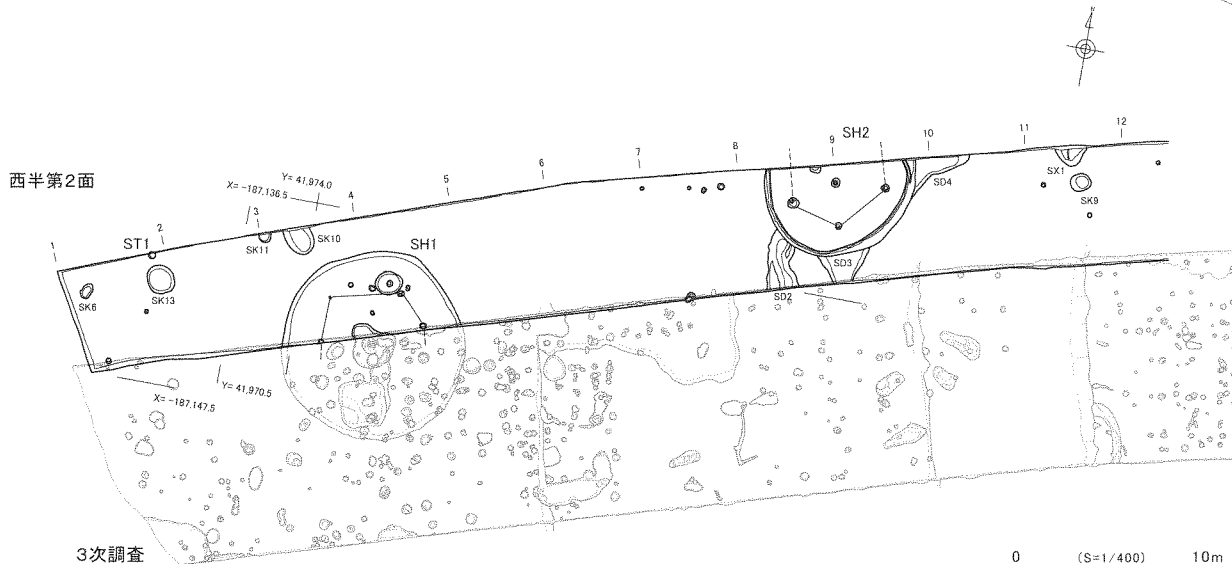


水路6 平面図

東半第1面



3次調査



3次調査

水路7 平面図

いないが、弥生時代後期後葉～終末期の遺物がややまとまって出土している。

[水路 10]

調査地中央部東寄りの丘陵裾部に位置する南北方向の調査区で、調査面積 994 m²。

遺構面を 2 面確認した。両面ともに生活に関連する遺構はほとんど認められず、第 1 面の遺構には北端部に溝 (SD 1) がある。遺構からは弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の完形の土器 1～18 が大量に出土した。また阿波や吉備地域などからの搬入土器以外に河内型庄内甕 8 や布留式土器の影響を受けた甕 9 が含まれていることが注目される。SD 1 は湧水点に隣接していることから、水に関連する祭祀が行われたものと推測される。

第 2 面の遺構には調査区中央部に土坑 (SK 1) がある。規模は長辺 1.2 m、短辺 1.0 m、深さ 0.41 m で、底部には東西に並ぶ 2 本の小穴を有する。小穴は直径 0.12 m で深さ 0.26 m を測る。出土遺物はないが、形態が縄文時代の落とし穴と近似しており、同時代の遺構と判断される。

[水路 11]

調査地中央部の東西向の調査区で、調査面 796 m²。

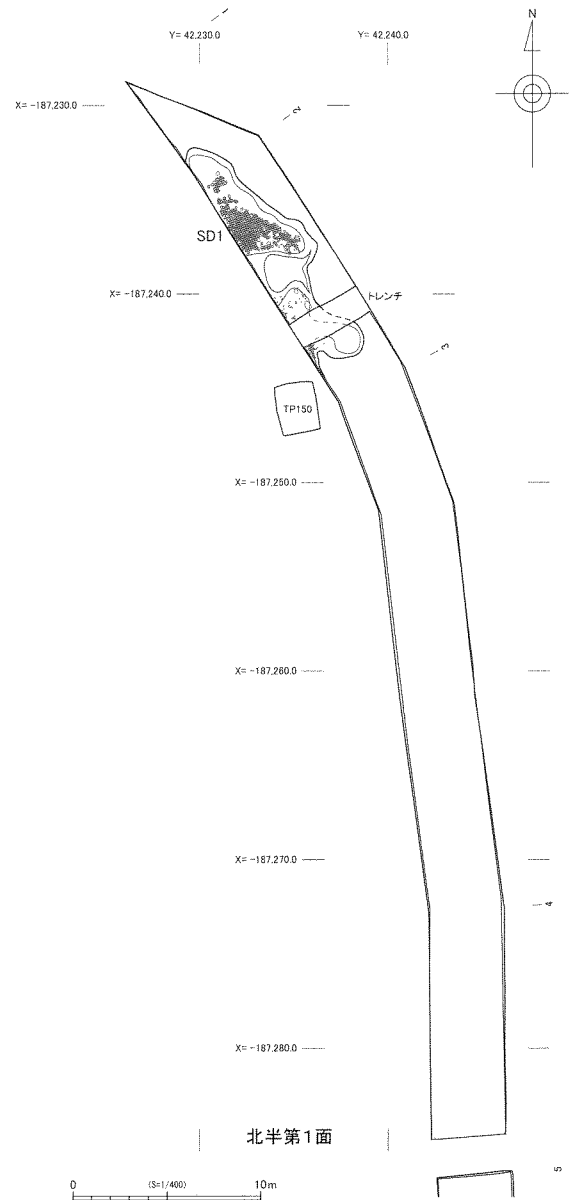
遺構面を 2 面確認した。第 1 面の遺構には調査区西部で掘立柱建物 1 棟 (SB 1)、土坑 (SK 2) などがある。SB 1 は桁行 3 間 (5.2 m)、梁行 2 間 (3.5 m)、出土遺物はほとんどないが、古代と思われる。第 2 面の遺構には弥生時代後期後半～終末期の溝などがある。

[水路 12]

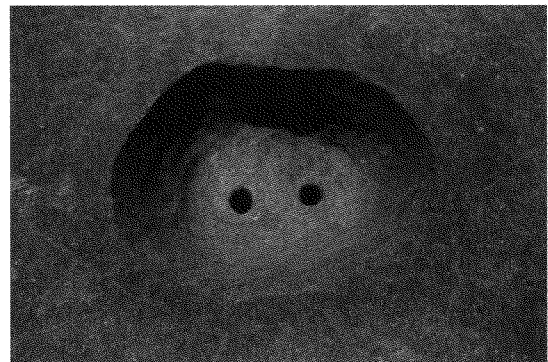
調査地南部に位置する東西方向の調査区で、調査面積 657 m²。

遺構面を 2 面確認した。第 1 面の遺構には中世の掘立柱建物 3 棟 (SB 1～3) や土坑墓 6 基 (ST 1～6) などがある。ST 2 は、長さ 1.5 m、幅 0.9 m、深さ 0.4 m を測り、土師器皿と古銭 (宋通元寶・熙寧元寶・紹聖元寶・元豊通寶・祥符通寶) が出土しており、12～13 世紀頃と思われる。

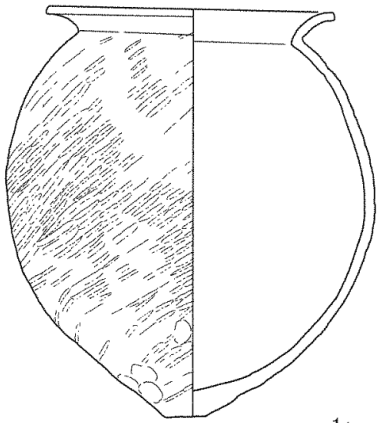
第 2 面の遺構には弥生時代中期後葉～終末期の竪穴



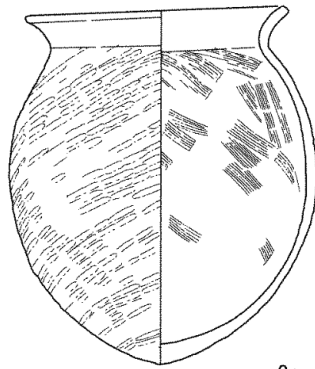
水路 10 平面図



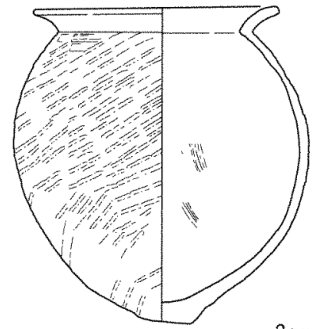
水路 10 SK 1 (北から)



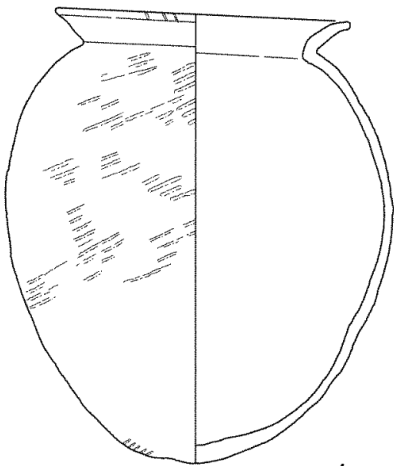
1(Y1054)



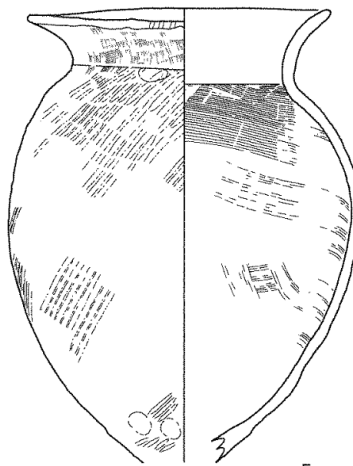
2(Y985)



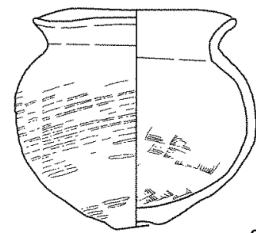
3(Y1034)



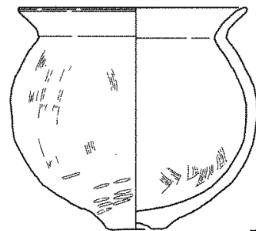
4(Y935)



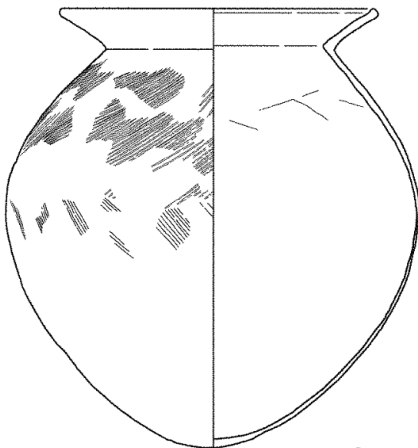
5(Y986)



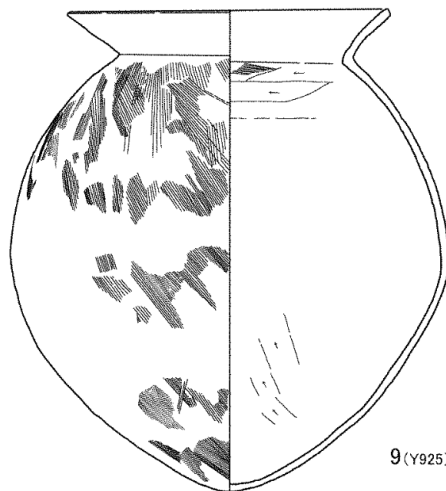
6(Y951)



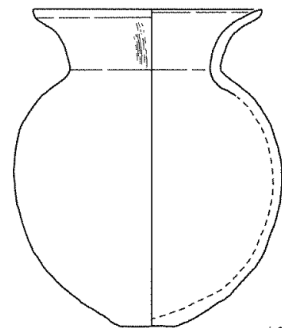
7(Y984)



8(Y934)

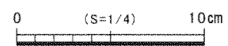


9(Y925)

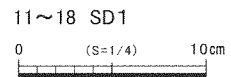
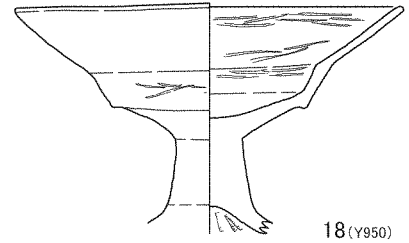
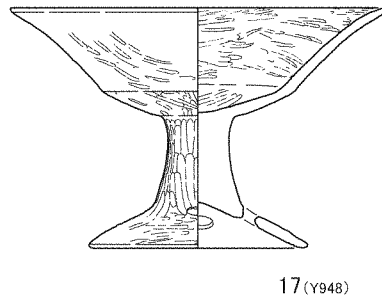
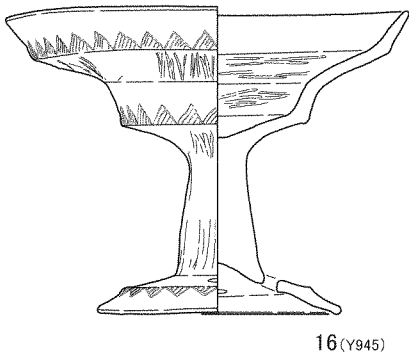
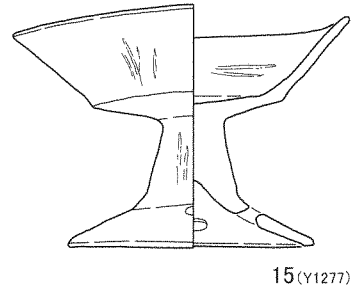
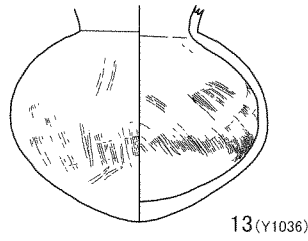
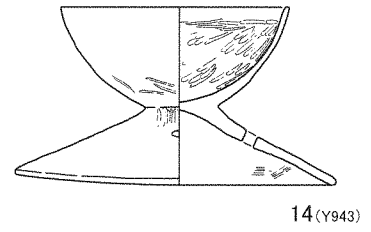
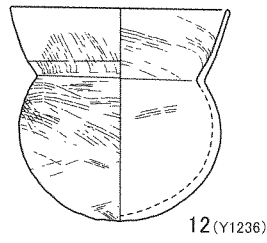
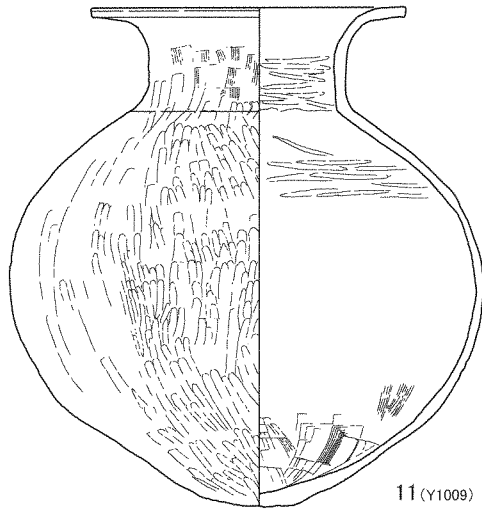


10(Y940)

1~10 SD1



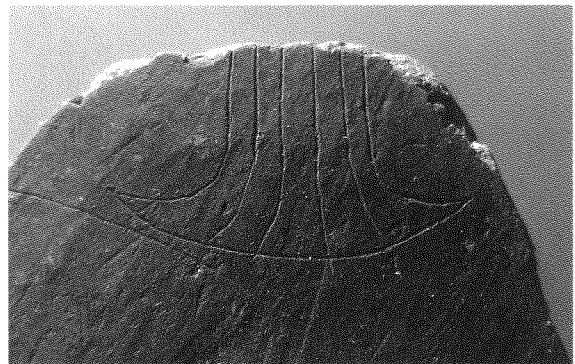
水路 10 出土遺物 1



水路 10 出土遺物 2



水路 11 SB 1 (西から)



水路 12 SH 3 出土絵画土器

建物 9 棟 (SH 1 ~ 9) などがある。竪穴建物の分布は、西群の 7 棟 (SH 1 ~ 7) と東群の 2 棟 (SH 8・9) に大別され、その内西群の SH 3 は直径 7.8 m の円形の建物である。遺物は壺肩部にバチ形の文様が施文された中河内産の土器片や碧玉製管玉など後期後半の土器が出土している。

[水路 13]

調査区南部東寄りにあるL字状の調査区で、調査面積 458 m²。

遺構面を2面確認した。第1面の遺構には中世の掘立柱建物2棟や7世紀後半～奈良時代初頭の土坑などがある。第2面の遺構には弥生時代終末期の竪穴建物1棟、弥生時代中期～終末期の溝がある。

[水路 14]

調査区南端部に位置する東西方向の調査区で、調査面積 981 m²。

遺構面を2面確認した。第2面の遺構には竪穴建物1棟（SH1）や土坑、溝などを確認した。SH1は調査区中央部に位置する1辺10.8mの方形の大型住居である。遺物は弥生時代終末期の土器が出土している。規模が非常に大きく単独で分布することから特別な建物の可能性がある。

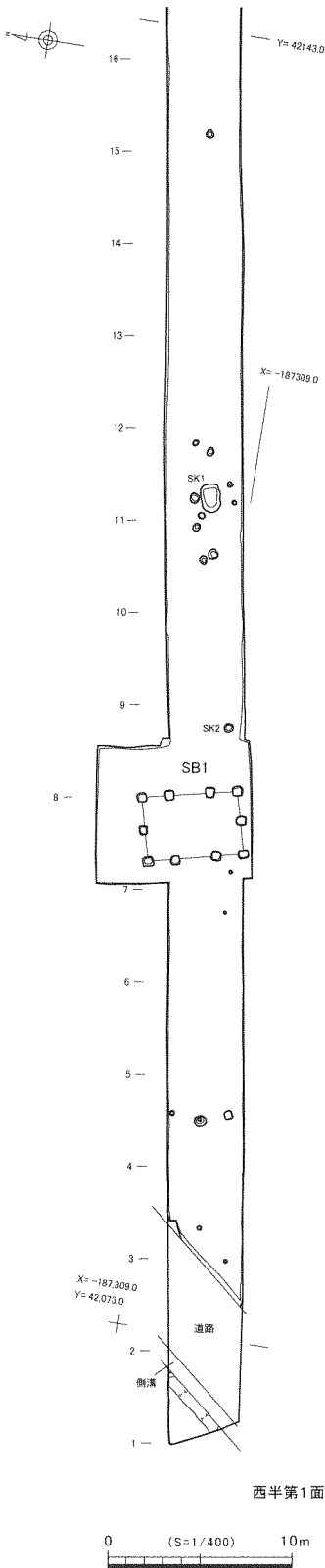
[水路 15]

調査地南西端部に位置する東西方向の調査区で、調査面積 508 m²。

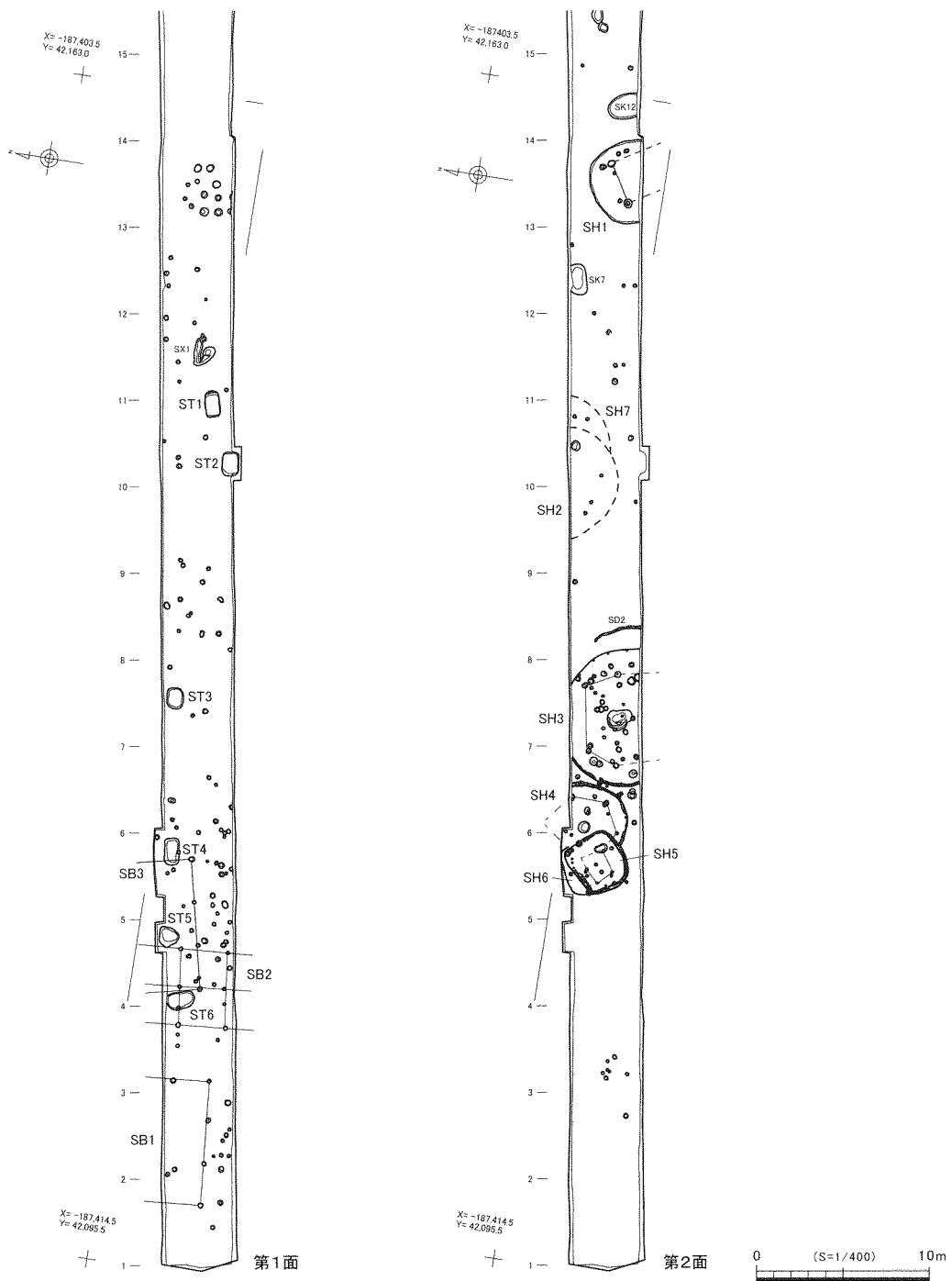
遺構面を2面確認した。第2面の西端部が谷地形となっており、谷部から7世紀後半～8世紀頃の遺物が出土した。遺物の中に円面硯19が含まれており、注意される。

2. まとめ

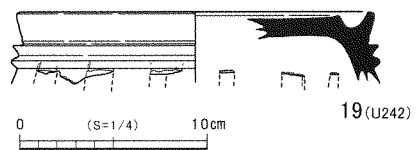
入田稲荷前遺跡は、調査面積の制約から各遺構の様相は把握しにくいですが、古墳時代中期を除く、縄文～中世までの遺跡であることが分かった。特に弥生時代においては、竪穴建物が20棟確認されるなど遺構、遺物量、内容において非常に豊富で三原平野の中心集落の一つになることが見えてきた。古墳時代中期の遺構・遺物は確認されず、飛鳥時代になって、3次調査の成果を含めると遺跡中央部でまとまって6棟の建物群が形成される。建物群の性格については北側に位置する宮田古墳との関連が想定され、豪族居館の可能性はある。白鳳・奈良時代には遺跡南半部で遺構・遺物が確認でき、これまでの成果から官衙的な性格を考慮する必要がある。平安時代は遺物はわずかに出土したが、遺構については明確でない。中世には広範囲に建物群が展開し、遺跡南西部にややまとまって土坑墓が形成される。
(坂口・的崎)



水路 11 平面図



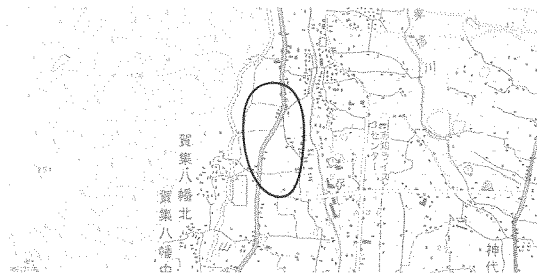
水路 12 調査区平面図



水路 15 出土遺物

5. 石ヶ坪遺跡 - 3次調査 -

所在地 賀集八幡北字石ヶ坪外
 事業名 経営体育成基盤整備事業（八幡北地区）
 担当者 山崎裕司
 種別 確認調査
 調査期間 平成30年10月1日～11月7日
 調査面積 228㎡（2×2mの調査区57ヶ所）



調査の位置

1. 調査内容

調査地は三原平野西部に位置し、大日川と山路川に挟まれ、南東から北西に緩やかに傾斜する。

調査地南端には周知の遺跡である石ヶ坪遺跡が存在し、イオン南淡路店の建設に伴い平成6年度に確認調査が行われ、平成7年度には県道福良・江井・岩屋線歩道拡張工事に伴い本発掘調査が行われている。この本発掘調査では古墳時代末～奈良時代頃と推定される大型の方形柱穴をもつ建物跡や中世建物が検出されている。また当事業に伴い平成26年度に分布調査を行っており、その結果に基づき確認調査区を設定した。

No.33 土師器・須恵器を含む堆積層が確認できた。良好な遺物が少ないが、須恵器に関して奈良時代の杯Bが出土しておらず、古墳時代後期が中心と推定する。

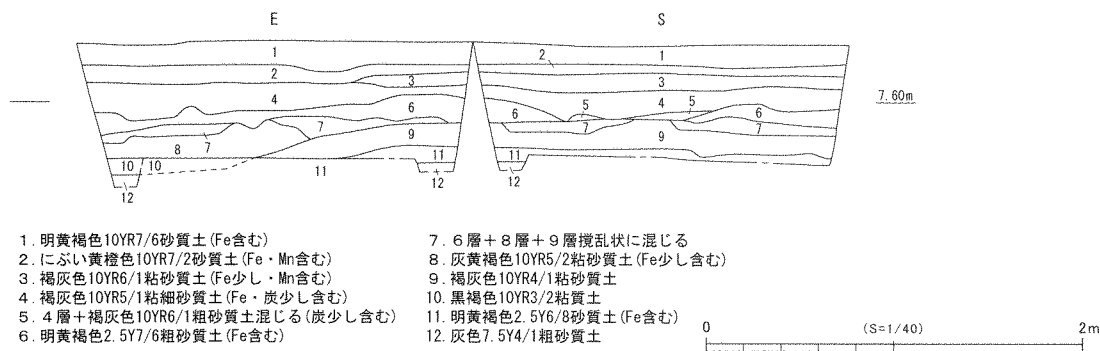
9層以下に遺物は含まず、粘土質や粗砂質の不安定な堆積土で湧水が激しく、北方向へ落ち込んでいく。一部攪乱状の堆積土も見られることから、調査区南～南西方向の包含層や遺構面を削平し、低い場所を埋め戻した可能性も考えられる。

2. まとめ

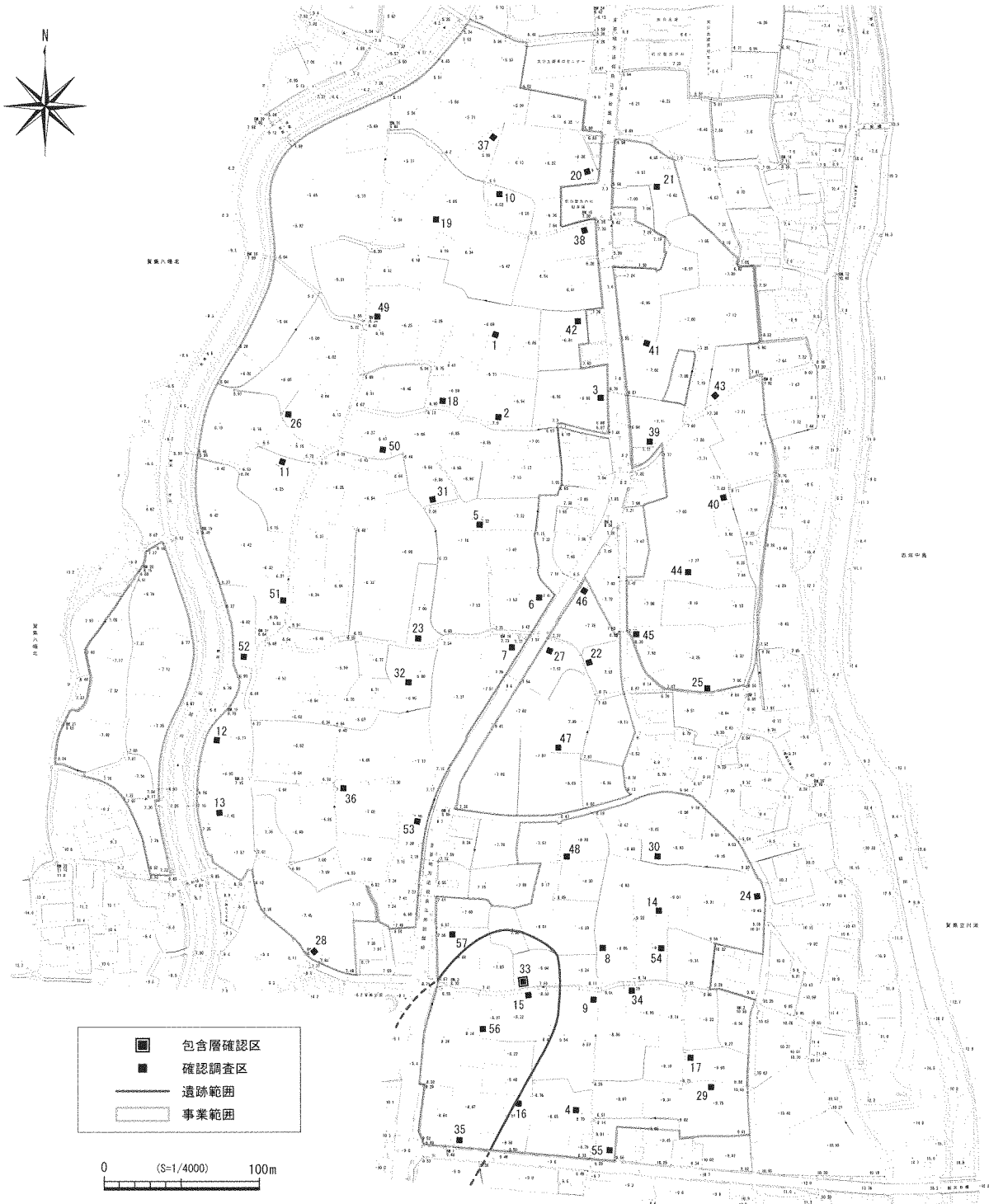
全体的に極めて不安定な堆積土である調査区がほとんどで、旧山路川と旧大日川が複雑に入り込み、河川の影響を大きく受けた場所であったと推定される。

まとまった遺物が出土したのはNo.33のみで、この周辺も不安定な土壌堆積であるが、周辺に包含層が分布する可能性も考えられるため、平成7年度の本発掘調査区からNo.33にかけての範囲を包蔵地とした。時期は古墳時代後期を中心とすると考えられる。

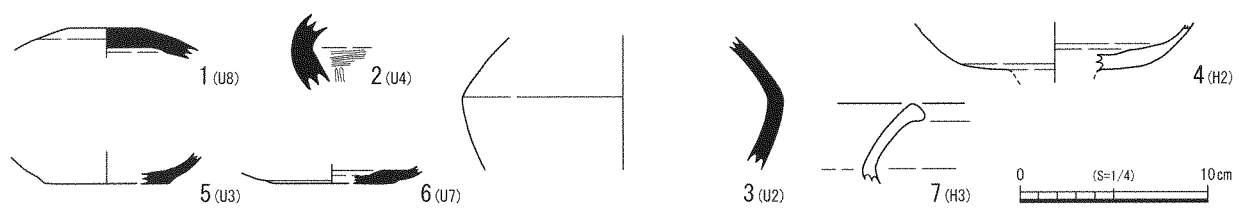
No.33



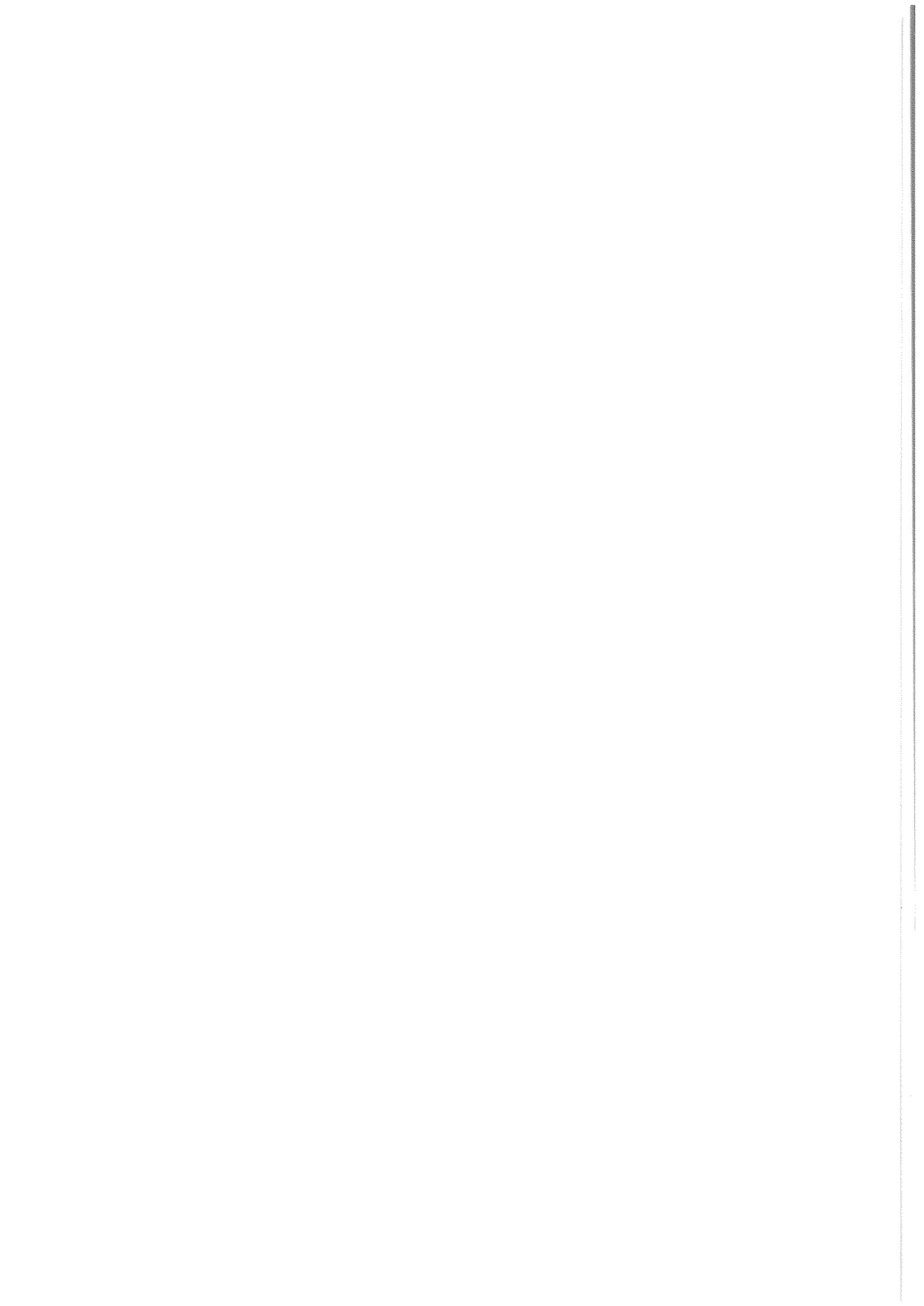
No.33 層序図



調査区設定図



No. 33 出土遺物



令和6（2024）年3月31日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報XIV

2018年度 埋蔵文化財調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙 1100

TEL 0799-42-3849

印刷 株式会社 奥井印刷

〒656-0513 兵庫県南あわじ市賀集野田 459-1

TEL 0799-53-1314